
バカとテストと年上の同級生

L A N 武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと年上の同級生

【Nコード】

N5232W

【作者名】

LAN武

【あらすじ】

俺は今年二十歳の高校生！？

オリ主『榊龍星』やオリキャラ『瀬川芹香』『榊白姫』を交えてお馴染み吉井明久達が文月学園を舞台に大暴れ！

今、馬鹿達の華が咲き乱れる！

感想を戴けると作者のテンションが上がり、更新が幾らか早くなります。

現在、清涼祭編です。

第0問（前書き）

取り敢えずプロローグ的な物です。短いですよ？ではどうぞ。

第0問

文月学園校舎へと続く坂道を文月学園の制服に身を包んだ青年は欠伸をしながらゆっくりと歩く。

通い慣れた通学路を通り校門へとたどり着くと其処には日焼けした浅黒い肌我正しく鋼鉄と呼べる肉体を持つ生活指導の鬼と呼ばれる西村教諭が腕組みをしながら立っていた。

「榊、今何時だ？」

「ん？何、西やん。時計忘れたの？今9時丁度だよ
ごす。」

正直に答えたのに拳骨落とされた。

「遅刻だ馬鹿者。後学校では西村先生と呼ばんか」

そう言われて青年・榊龍星・は暫し考え込み、漸く思い至りポンツと手を打った。

「おお！そうだったそうだった。すいません西村先生」

「いや、其処まで考え込まないとわからんのか？」

額に汗を垂らしながら龍星をみる西村教諭。

因みに龍星と西やん事西村教諭はトリアスロンと言う共通の趣味を持つ仲間同士で互いに切磋琢磨する好敵手でもある。

「……まあいい。ほら」

そう言つて西村教諭が差し出したのは一枚の封筒だった。

「どうもっす。」

龍星は封筒を受け取ると早速開いて中から一枚の紙を取り出し開いた。そこには大きく『Fクラス』と書かれていた。

「あゝ、やっぱりね」

けらけら笑いながら予想通りと言わんばかりに頷く龍星。

西村教諭は溜め息をつきながら早く教室に向かう様に促した。龍星はそれに頷くとFクラスへと走って行った。

この日より彼・榊龍星・の波乱に満ちた……満ちすぎた一年間が幕

を開けるのであった。

キャラ設定(前書き)

榊龍星のキャラ設定です。

キャラ設定

榊龍星

オリ主

身長二メートルjust

体重97キロ

中学生の頃に大病を患いそれが原因で三年間休学した為、今年二十歳の高校生。

遅刻常習犯で遅刻魔神と呼ばれたりするが、もっぱら『兄貴』と呼ばれる。

日本史特化型の筋肉紳士。

趣味は鉄人と同じく身体を鍛える事とトリアスロン。後ゲームと漫画。

姫路瑞希とは幼なじみで互いに『瑞希』『龍兄』と呼び合う。姫路料理の一番の犠牲者。これにより彼の胃袋はオリハルコン並みに鍛えられた。

髪は黒で首の後ろで結んでいる。

彼女持ちの為、FFF団からはS級異端者認定されている。

召喚獣

装備は日本刀に青い着物と白い袴。

腕輪の能力は『爆炎』そのまま放射と刀身に収束させる事が出来る。因みに収束した場合、刀身が炎で熱され真っ赤に染まる。

キャラ設定（後書き）

今後のキャラ設定は後書きに書いていこうと思います。

第1問『第一次試召戦争編』（前書き）

第1問投稿です。微妙にオリ展開が混ざってます。
それではどうぞ。

第1問『第一次試召戦争編』

「バカテストノ科学」

【第1問】

問 以下の質問に答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても。

榊龍星の答え

『合金の例……………超合金ニューZ』

教師のコメント

マジンカイザーですか。先生もマジンガーシリーズは好きです。

榊龍星のコメント

先生とは美味しい酒が飲めそうです。

「……………マジか？」

Fクラスへ向かう途中、Aクラスが眼に入った龍星は何の気なしにAクラスの教室を見てそう呟いた。

「凄まじい設備だな。高級ホテルみてーだ。」

システムデスクにノートパソコン、個人エアコンにリクライニングシートと飲み物完備の冷蔵庫。いたせりつくせりである。

「ん？」

ふと一人の女生徒と眼が合う。女生徒は龍星にニコツと笑いかけると担任にバレない様に小さく手を振ってきたので龍星もそれに応えて笑いかけるとグツとサムズアップをする。

「っと！早く教室に行かねーと！」

龍星は女生徒に手を降るとFクラスへと足早に向かった。

間もなくFクラスにたどり着くと龍星はドアを開けて、

「すいませーん！遅刻しやしたあ！」

と、教師に向かって言った。

「ああ、君は確か遅刻常習犯の榊君でしたね。取り敢えず席に着いて下さい」

何故か砕け散った教卓の後ろにいる寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを着た二年F組担任の福原慎教諭は龍星にそう言って着席を促すが龍星はジツと福原教諭（正確には寝癖のついた髪）を見て動かない。

「どうし「先生、ちょっと失礼します」ましたか……？」

龍星は福原教諭の言葉を遮って後ろに立つと鞆を漁りクシと整髪用ジェルを取り出した。

「すいません、少し動かないで下さいね。あらよつとー！」

シャシャツという音と共に龍星の腕がブレたかと思うと先程までの寝癖が嘘のように整った福原教諭が其処にいた。

「あつ有り難う御座います」

「秘技瞬間整髪。早々に遅刻したお詫びですよ先生」

龍星は頭を下げると空いてる卓袱台を見つけ其処に座った。

「えー……皆さん少々待っていて下さい。教卓の替えを用意してきます」

そう言つて福原教諭は足早に教室から出て行つた。

「早速魅せてくれるね龍」

「相変わらず凄い腕だな龍星」

ふと後ろから声があったので振り返ると其処には弟みたいな親友吉井明久と去年のクラスメイトで友人の坂本雄二がいた。

「なんだ。明久に雄二もFクラスかつてお前らがFクラス以外な訳ねつか。バカだもんなお前等」

「あつあはは」

「ほつとけ！それにお前には言われたくねえよー！」

「他には秀吉に島田に瑞希がいるじゃね〜か」

龍星はクラス内を見渡し見知った顔を見つけると立ち上がり其方の方へと歩き出す。

「よっ秀吉に島田に瑞希おはようさん」

「うむ。おはようなのじゃ龍星殿」

「はろはろ〜」

「あ、おはようです龍兄」

「瑞希、身体の方はもう大丈夫なのか？」

「はい、もう大丈夫です！」

につこりと笑って言う幼馴染みの瑞希……姫路瑞希に笑って返しその柔らかい髪に手を置きそっと撫でる。

「そっか。でもあまり無理はすんなよ？」

「はい！」

太陽の様に微笑む瑞希の頭から手を離し談笑していると雄二を連れて真剣な顔をした明久が龍星に話しかけてきた。

「龍、ちよつといい？」

「どした？」

「此処じゃ話し難いから、廊下で」

「おう」

立ち上がり廊下に向かう。

「んで、話って？」

廊下に出ると雄二が早速切り出した。

「このクラスについてなんだけど……」

「正直酷いな。ひび割れた硝子に腐った畳。それに脚の折れた卓袱台と綿も満足に入っていない座布団。教室に来る前に見たAクラスとは天と地の差があるな」

「龍星も見たのか？」

腕組みしながら言う龍星に雄二は問いかける。

「そりゃあな流石に眼に入るだろ？」

その問いかけに答える龍星。そんな二人に明久は提案を出した。

「そこで僕から二人への提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「試召戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

明久の提案に雄二の目が細くなる。しかし龍星はその理由が解つたのだろう。微笑みを浮かべて明久を見ている。

「それは「瑞希の為だろ？」う、うん。だって可哀想じゃないか。

Aクラスに入れる実力があるのに振り分け試験で高熱が出て退席したからFクラスだなんて！」

話す内にその時の怒りを思い出したのだろう。少し熱が入り二人に向かい叫ぶ明久。

そんな明久を見て龍星は昔を思い出した。

（そう言やガキの頃にも瑞希の為に明久が怒つた事があつたな）

それは小学校の頃、いじめっ子に執拗に苛められ遂に泣き出した瑞希を見て明久は怒り、いじめっ子に対し殴りかかり取っ組み合いの喧嘩になつた事があつたのだ。

「あ、ごめん。ちよつと熱が入つた」

二人に対し謝る明久。

「気にするな。それに元々俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思つていたところだ」

「え？どうして？」

「お前こそ勉強に興味ないだろが」

不思議そうな顔で見る明久と龍星に雄二はニヤリと笑つと答えた。

「何、世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくてな」

「????？」

「お前がそんな事言い出すとはな。明日は雨か？」

「茶化すな。それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし おっ

と、先生が戻ってきた。教室に戻るぞ」

「あ、うん」

雄二に促されるまま、二人は教室に戻った。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

砕け散った教卓を替えて、気を取り直してHRが再開される。

「えー、須川亮です。趣味は」

得に何も起こらず、淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「それでは榊君、お願いします」

「ウイッス。」

龍星は立ち上がり教壇へと向かう。

「知ってる奴もいるだろうが改めて、俺が遅刻魔神とも呼ばれる今年二十歳の高校生！榊龍星だ。みんな気軽に遅刻魔神でも榊でも兄貴でも好きなように呼んでくれ！」

龍星が言い終わると同時に、

『『『兄貴いいいいいい！！』』』

とクラス中（明久・雄二・秀吉・島田・瑞希他一名を除く）から一斉に声上がる。

「有り難う。今年一年宜しく頼むぜ！」

サムズアップをして席に戻る。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原教諭に呼ばれて雄二が席を立つ。

ゆっくりと教壇に向かうその姿は上に立つ者としてのオーラを纏っているようにも思える。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたい」

全員の目を見た後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられてみんなも雄二の視線を追い、それらの備品を眺めていった。
「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「みんな不満はないか？」

『『『大ありじゃあつ！！』』』』

二年F組生徒の魂の叫びがそこにあつた。

「だろう？俺だってこの現状には大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる
！』

クラス中から次々に不満の声があがる。

「みんなの意見はもつともだ。そこでこれは代表としての提案だが
」

自信に溢れた顔に不適な笑顔を浮かべて、これから戦友になる仲間達に野性味満点の八重歯を見せて、

「 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
Fクラス代表である坂本雄二は戦争の引き金を引いたのだった。

第1問『第一次試召戦争編』（後書き）

龍星の回想で明久が瑞希を守るためにいじめっ子に喧嘩を仕掛けてますが、これは吉井明久と姫路瑞希の関係が榊龍星という存在を介して縮まっているからです。

因みに作中にはでていませんが二人の呼び方は『瑞希ちゃん』と『明久君』に変わっています。

第2問(前書き)

会話が多い！地の文少なめ！最後がカオス！どうしてこうなった？

第2問

「バカテスト／国語」

【第2問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意な事でも失敗してしまう事』
- 『(2) 悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』等がありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

榊龍星の答え

『(1) プロドライバーがスピン』

『(2) 泣きつ面殴ったり投げたり』

教師のコメント

(1) は意味はあってますが、この問はことわざを答えなさいとあるので間違いです。

君も鬼ですか。

『勝てる訳が無いだろう！』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何も要らない』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

AクラスとFクラス、確かに誰が見ても戦力差は明らかだった。

「そんな事は無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何を馬鹿な事を』

『出来る訳無いだろう』

『何の根拠があつてそんな事を』

否定的な意見が教室中に響き渡った。

確かに馬鹿の巣窟とも言えるFクラスでは学年トップクラスであるAクラスには勝てないだろう。それは提案者の明久も龍星も同感である。だが、勝てないからと言って辞める気は二人には無い。

「根拠ならあるさ。このFクラスには試召戦争で勝つ事が出来る要素が揃っているからな」

雄二の言葉を受けてFクラスの生徒達が更にざわめく。

「それを今から説明してやる。おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカート覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る、頬に畳の跡を付けた康太と呼ばれた生徒。その後ろに仁王の如く立つのは龍星である。

「康太あ。お前今何してた？まさかと思うが瑞希のスカートを覗いていた訳じゃないよなあ？」

ニツコリと笑いながら（ただし目は笑っていない上に額には青筋がうっすらと浮いている）康太の頭にゆっくりと手を翳す龍星。

因みに龍星の身長は2メートルジャスト。Fクラス内でもかなり背が高い上に西村教諭並みのガタイをしているので上から見下ろされるとかなりキツイ。

「！？（ブンブンブンブン）」

先程よりも速く顔と手を降る康太。

「そうだよなあ。お前が俺の前でそんな事する訳無いもんなあ？寝てただけだよなあ？」

「！（コクコクコクコク）」

康太は高速で頷く。

他のクラスメイト達は龍星の迫力に押され冷や汗を流している。（明久達は苦笑していた）

「いや、悪かったな。ほら早く雄二んところ行って来い」

そう言つて龍星は先程までとは打って変わって優しげな笑顔を浮かべて康太の背中を軽く押した。

この後、土屋康太氏は語る。

「……あの時頷いていなかったら今頃俺は病院のベッドの上だった。」

「あゝ、ちよつとしたトラブルはあったが紹介しよう」

先程までの冷えた空気を何とかしようと雄二は声を上げた。

「土屋康太。コイツがああの有名な、『寡黙なる姓識者』^{ムツリーニ}だ」

「……………!!(ブンブン)」

土屋康太という名前は知らずとも、ムツリーニという名前を知らない者はほとんどいなかった。

その名は男子には畏怖と畏敬を、そして女子には軽蔑を以て上げられるのだ。

『ムツリーニだと…………?』

『ばつ馬鹿な、奴がそうだと言うのか…………?』

『だが見る。あそこまで明らかな証拠を未だに隠そうとしているぞ…………』

『ああ。正にムツリーの名に相応しい姿だ…………』

畳の跡を手で押さえている姿は果てしない哀れみを誘う。例えどの様な状況であろうとも、自らの下心は隠し続ける。その異名、伊達では無い。

「?????」

「瑞希、お前は知らなくていい。知らなくていいんだ…………」

多数の疑問詞を浮かべる瑞希の肩を軽く掴み、龍星はゆっくりと首を左右に降る。

「え?龍兄がそう言うんなら知らなくていいことなんですね?」

「ああ。」

二人のやり取りが終わるのを見計らって雄二が瑞希に声をかける。

「姫路に関しては言うまでも無いだろう。皆だつてその力は良く知っている筈だ」

「えっ?わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

Aクラスに匹敵する実力を持つ瑞希は、確かにFクラスの主戦力になるだろう。

『そつだ！俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『ああ。姫路さんさえいれば何もいらないなつ！？（冷や汗）』

瑞希に先程から熱烈なラブコールを送っていたこの生徒は超怒級シスコン（瑞希限定）の龍星に素敵なプレッシャーをプレゼントされた。

「木下秀吉もいる」

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「更に日本史限定ではあるが、榊龍星もいる」

『兄貴！』

『確か兄貴の日本史はAクラス並みだと聞いたぞ』

『やっぱり兄貴は頼りになる』

まさか自分が上げられると思っていなかった龍星はちょっとビックリしていた。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かに何だかやつてくれそつな奴だ』

『坂本つて、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるつて事だよな！』

気が付けば、クラスの士気は確実に高まり、いけそつだ、やれそつだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。

「それに吉井明久だつている」

……シーン

それが一気に下がった。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いた事無いぞ」

「ホラ！折角上がった士気に翳りが見えてるし！　ってなんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつは『観察処分者』だ」

シンとした空気の中、

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

クラスの誰かがそんな致命的な台詞を口にした。

「ち、違つよつ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「観察処分者の利点は召喚獣の扱いに慣れている事だ」

雄二が口を開くよりも先に龍星が口を開く。

「兄貴、それは一体？」

「観察処分者つてのは言わば教師の雑用係りなんだが、その雑用の内容は力仕事が主だ。サッカーのゴールポストを運んだりとかな。

西村先生や俺なら兎も角、普通なら一人では到底無理だろう？」

龍星が説明しながら周りをみると皆頷いていた。

「其処で出て来るのが、少ない点数でも人間の倍以上の力を持つ召喚獣だ。観察処分者の召喚獣は特別な処理がされていて物に触る事が出来るんだ」

「つまり先生のお願いで明久君は召喚獣を何時も使っているからこの中の誰よりも召喚獣の扱いに慣れているという事ですね？」

瑞希の言葉に龍星は頷いた。

「だが当然デメリットもある」

「僕の召喚獣は物に触れる代わりに負担の何割かは僕にフィードバックするんだ」

龍星に続いて明久が話し始める。

「それに当然、教師の監視下でないと喚び出せないしね」

『……待てよ？確か《観察処分者》って召喚獣がダメージ受けると召喚者にもダメージが来るんじゃないかなかったっけ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるって事になるよな』

「あつバレた」

実は明久はあまり戦闘に参加する気は無い。召喚獣が傷付けば自分も痛いからだ。

「気にするな。どうせ、居ても居なくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきだよな？」

「兎に角だ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

雄二は明久を大胆かつ完全に無視して話を進めた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば総員筆を取れ！出陣の準備だ！」

『うおお　　っ！！』

「お、おー……」

クラスの雰囲気には圧されたのだろう、瑞希も小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になつてもらおう。見事大役を果たせ！」

「ちよつと待て駄雄二！今使者の発音が微妙に違つたよね！」

ヒートアップしたのだろう。明久から斬新な渾名が飛び出した。

「駄雄二っ！！くっ！（ふるふる）」

龍星は後ろを向いて震えている

「明久、なんだその『駄雄二』とかゆう斬新な渾名は！まるで数多くいる雄二の中で俺が一番駄目な雄二みてーじゃねーか！」

「落ちて着け雄二。今は使者を決める大事な場面だろう？」

雄二を宥める龍星。しかし、その顔は笑っている。

「それに使者なら俺が行こう。下位勢力の使者は酷い目に会うみた

いだしな。」

「なら僕も行くよ。だから雄二」

龍星と明久は教室の片隅を指差して声を揃えて、

「島田^{さん}をキチンと慰める様に！」
と言った。

見ると、教室の片隅でうずくまっていたの字を書いている島田美波が其処にいた。

「し、島田？何してんだそんなトコで？」

雄二の声に美波は反応して振り向いた。その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「……だって坂本、ウチの事戦力と思っていない……」

その言葉に雄二は、はっとする。先程雄二が挙げた戦力の中には確かに美波の名前が無かった。

「い、いやスマン。忘れていただけだ(汗)」

その言葉に美波の涙腺は決壊！泣きながら、

「ウチは存在感無いんだあ〜!？」

と叫び、クラスメイト達は黒いマスク(額にFのマーク付き)を被り、

「此より、可憐な女生徒を泣かせた坂本雄二の処刑を行う！」と宣告。わらわらと雄二に群がってきた。

それを見ていた龍星と明久は、助けを求める雄二を見なかった事にしてDクラスへと宣戦布告に向うのだった。

第2問（後書き）

龍星の超怒級シスコン（瑞希限定）について。

龍星と瑞希は幼い頃から常に一緒にいました。龍星にとっては大切な家族みたいな存在です。最早、妹と言っても過言ではありません。そして、龍星は人一倍家族を大切にする男です。つまり龍星は瑞希に対して異性愛を飛び越えて家族愛を抱いているんですね。故の超怒級シスコンです。

最後のカオスは『バカとテストと召喚獣ぢゃ』から抜粋。

第3問（前書き）

第3問の投稿です。

今回はほぼオリジナルしあげ。

オリジナルキャラがです。

キャラ設定は後書きに。

それではどうぞ。

第3問

バカテスト/英語」

【第3問】

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 * x」

教師のコメント

出来れば地球上の言葉で。

榊龍星の答え

「ボセザパダギボゴドガガジヨグギデギダゾンザバゼグ」

教師のコメント

出来れば現代の言葉で。

「オレハキサマラブツコロス！」

「自業自得だ。駄雄二」

「龍の言う通りだよ。駄雄二」

ズタボロになった雄二と龍星・明久が言い合いながら、その後を瑞希・美波・ムツツリーニ・秀吉が苦笑しながら屋上へと向かって歩く。

「駄雄二駄雄二うるせえよ！遅刻魔神にバカ久が！」

そんな会話をしながら雄二は屋上に通じる扉を開け放った。

雲一つ無い青空から眩しい太陽光が差し込む。

「明久、龍星。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろした。

「ああ」

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

明久達も雄二に習い各々腰を下ろした。

「宣戦布告と言えば明久は怪我をしとらんようじゃが、下位勢力の使者に対する暴行はデマじゃったのこのう？」

秀吉の言葉に明久と龍星が答える。

「秀吉。確かに僕はDクラスに攻撃されかけたよ」

「まあ、俺が秘技ノ3『マッスルランゲージ筋肉言語』を使って誠心誠意説得したら引いてくれたよ」

（（（マッスルランゲージってなんだーっ！？）））

瑞希を除く4人（雄二・秀吉・美波・ムツリーニ）の心が一つになつた瞬間だつた。

【秘技ノ3筋肉言語とは！龍星の鍛え上げた筋肉による会話術。これにより交渉相手はいざこざを起こす気が無くなり平和的に交渉を進める事が出来るのだ！尚、ボディランゲージ肉体言語の上位種にあたる】

「と、兎に角昼飯にしよう」

「そうだな。明久、飯は持って来たのか？」

「うん！今日はお弁当作ってきたんだ」

そう言つて明久は鞆の中から弁当箱を取り出す。蓋を開けると色とりどりのオカズと白米が食欲をそそる。

この作品の明久は一人暮らしを開始した当初は原作通りの食生活でしたが、弟分の健康を心配した龍星の筋肉言語によって矯正。現在はマトモな食生活しております。

「吉井つてお料理出来たんだ？」

「……美味そう」

「確かに美味そうじゃの」

美波・ムツリーニ・秀吉の三人が明久の弁当を見てそれぞれの反応を返す中、瑞希がそれをじつと見て黙り込んでいた。

「龍兄！わた「駄目だからな？」はうゝ（涙）」

「なんだ？姫路が料理をするとマズいのか？」

「……とてつもない事になる」

心無しか青ざめた龍星を見て興味が沸いたのか雄二がたずねてきた。「とてつもない事つて？まさか食つた途端に死ぬ訳じゃねえだろ？」

「その可能性は大だ。何せ味付けに科学薬品を使つてたからな」
時が止まった。

「今は大分マシになつたがまだまだ他人に喰わせるのは危ないから

な。おば……瑞穂さんからの許可がでるまでは我慢だ」

「……はい（涙）」

そして時は動き出す。

「……はい　　っ!?!」「」「」

「もぐもぐもぐもぐ」驚く4人と弁当を食べ続ける明久。

「えっ? 科学薬品つて。えっ?」

「そんな物危なかつしくて食べねえだろ!」

「……危険極まりない」

「流石に儂もビツクリじゃ」

「俺はガキの頃から瑞希の料理の試食をしてきたが?」

涼しい顔をして平然と言う龍星。

「大丈夫だったのか!?!」

「最初の頃は流石に死にかけたがな。今は舌が痺れるくらいだ」

「龍兄が入院した後、龍兄からお母さんの許可が出るまで他の人に

料理をする事を禁止されました（涙）」

「だから病気で入院した時、検査を担当した医者に驚かれた。『貴

方の胃はオリハルコン製ですか?!?!』とな」

お医者様もビツクリの胃の強度である。

「ところで、龍星は昼飯を喰わないのか?」

話が一段落した時、昼食を食べていない龍星に雄二が問いかけた。

「ん? いや、そろそろ来ると思うぞ」

龍星の答えに雄二が疑問詞を浮かべた。それと時を同じくして屋上の扉が音を立てて再び開いた。

「……? (キヨロキヨロ)」

扉を開けたのは、龍星が先程（第1問参照）Aクラスの前を通った時に手を降ってきた女生徒だった。

「芹せり! こっちだこっち!」

龍星が手を上げて女生徒を呼ぶと芹と呼ばれた女生徒は満面の笑み

を浮かべて龍星に駆け寄ってきた。

「誰だ？」

雄二が問うと龍星は、

「こいつは瀬川^{せがわせりか}芹香。俺の彼女様だ。」

と紹介し、芹香はぺこりと頭を下げた。

「なに　　っ！」

雄二とムツツリーニが驚愕の声をあげる。

「芹香殿ではないか。そう言えば龍星殿の恋人じゃったのう」

「瀬川さんこんにちは」

「こんにちは芹香ちゃん」

秀吉と明久、そして瑞希は芹香に挨拶をした。

「榊って恋人いたんだ？」

「おう。可愛いだろ？」

美波は龍星に問いかけ龍星はノロケる。

実際、芹香は可愛いというよりも美人の類に入るだろう。

背は凡そ158センチ位だろうか？長身とは言えないがスタイルは

良く、黒と言うより濡れ羽色と言えるその髪は腰より下まで伸びて

おり、それをポニーテールに纏めている。

少々吊り目気味の顔は愛嬌のある笑顔を浮かべており、何よりも特

筆すべきは大きめの制服ですら隠しきれない瑞希より大きなその胸

である。

「……………っ！？（ブシャアアアアアッ！）」

ムツツリーニが凶器とも言える『ソレ』を見て鼻血を滝の如く噴出

する。

「ムツツリーニイイイイイツ！？」

明久はムツツリーニを助けるべく駆け寄る。

「しっかりしてムツツリーニ！気をしっかりと保つんだ！」

「……………明久」

「喋っちゃ駄目だ！今保健室に！」

「……………我が人生に悔いは無い（かく）」

「ムツツリイイイイニイイイイツ！(豪涙)」
ムツツリーニは明久の腕の中で笑顔を浮かべて逝った。

土屋康太。享年16歳。笑顔とカメラの似合う漢だった。

「……勝手に殺すな」

なんとか生きていたムツツリーニは鼻血止めのティッシュを鼻に詰め、失った血液を補うべく輸血を開始していた。

「人の彼女の胸見て鼻血噴くなや」

龍星は芹香から受け取った弁当を食べながらムツツリーニにツッコミを入れる。

因みに、秀吉と瑞希はそれを見て呆れながら苦笑を浮かべ、美波は再び落ち込み芹香は龍星の背中に顔を真っ赤にして隠れていた。

「まさしく美少女と野獣だな」

雄二が要らんこと言えば、

「……(むーっ)！」

芹香が龍星の背中から顔を出し膨れながら雄二を睨んでいた。

「ところで秀吉は瀬川の事知ってるのか？」

雄二が秀吉に尋ねる。

「うむ。芹香殿は姉上の友達じゃからな。その縁で仲良くさせていただけいておる」

秀吉の返答に雄二は納得して頷いた。

「そう言えば自己紹介してなかったな。Fクラスの坂本雄二だ」

「……土屋康太」

「島田美波よ。宜しくね(涙目)」

3人の自己紹介にコクコク頷く芹香は、

「……(Aクラスの瀬川芹香です。宜しくお願ひします)」
と小声で自己紹介をした。

芹香は常時小声です。台詞は「……(〜)」で表しています。

「そろそろ時間だな」

昼食と自己紹介がすみ6人で談笑していると、ふと時計を見た雄二がみんなに切り出した。

「それじゃあ行こっか」

「いよいよですね？」

「頑張るわよ」

「……情報収集は任せろ」

「では、いざ出陣と行こうかの」

明久・瑞希・美波・ムツツリーニ・秀吉の順で立ち上がる。

「……？（何をするのかわからないけど、頑張ってるね？）」

龍星を見上げ、激励する芹香に龍星は芹香の頭を撫でながら、「おう！行ってくるぜ？」

と言ったのだった。

この日の午後、いよいよFクラスの試召戦争が幕を開ける。

第3問（後書き）

キャラ設定

瀬川芹香

オリジナルキャラ。

Aクラス所属の龍星の恋人。

身長・髪色・髪型は本編参照。

スタイル抜群で胸は瑞希以上のスイカッパ（笑）

学園長藤堂カヲルは母方の祖母、つまり学園長の孫。

学園長と似ても似つかないので大抵の人に信じて貰えない。

学園長曰わく「あたしの若い頃にそっくり」だそうな。

龍星との出会いは中学の頃。

告白は意外にも芹香の方から。

龍星入院中は三年間毎日お見舞いに行っていた。

性格は大人しく恥ずかしがり屋。故に告白したのが芹香の方と知っ

て明久と瑞希はびっくりしていた。

霧島翔子・木下優子・工藤愛子は友達の間柄。

召喚獣

装備はネコミミ&尻尾に巫女さんスタイルに弓装備。

腕輪は『疾風』。弓に纏わせて敵を斬る事と矢に纏わせて高速で打ち抜く事が出来る。

今回やりたかった事は姫路料理禁止ネタとムツツリー二の鼻血ネタ。えっ？芹香の胸ネタだろって？……なんでバレたんだ？

第4問（前書き）

今回ちょっととしたテストと云うか試したい事をやってみました。
皆さんの反応が怖い。

そして戦闘が果てしなく難しい。

という訳でDクラス戦です。

どうぞ！

第4問

「バカテスト/数字」

【第4問】

問 以下問いに答えなさい。

『(1) $4\sin + 3\cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのはどれか、?? ? の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

『(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?』

教師のコメント

そうですね。角度を『 \circ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X = \text{おおよそ} 3$ 』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

榊龍星の答え

『(1) X (この先は血で汚れて読めない)』

教師のコメント

テスト中、君に一体何が起きたんですか!?

「吉井!木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ!」

ポニーテールを揺らしながら駆けるのは引き受けた覚えが無い部隊長の明久と同じ部隊に配属された美波。どうやら先程のショックからは立ち直れたようである。

そんな美波を見て明久は何かを考えると合点がいったのか手をポンと叩いた。

「ああ、胸か」

「アンタノユビヲオルワ。コユビカラジュンニ、ゼンブキレイニ。ケタケタケタ……」

美波の目からハイライトが消え、全身から黒いオーラを噴出する。黒い『ナニカ』が美波に降りてきたようだ。どうやら明久は美波の

触れてはならない『スイッチ』に触れてしまったようである。

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと僕の関節が逆方向に
イイイイイイツ!!」

「何をやってるんだ!? お前等はっ!!」

部隊長補佐の龍星は怒鳴りながら、ケタケタ嗤い明久にパ スペシ
ヤルを決め続ける美波の頭ハリセン（芹香作・銘：芹香政宗。本
体には悪霊退散と書いてある）をスパンと落とす。

「はっ!? ウチは一体何を?」

美波の身体から何か黒いモノ（ツインドリルの様な物があつた）が
抜け出すのが龍星の目に見えたような気がした。

「正気に戻ったか? 全く、馬鹿騒ぎも状況を見てからにしろ! Fク
ラスの先攻部隊から戦死者が出たみたいだ。ほら、西やん……じゃ
ない! 西村先生のお出ました!」

「さあ来い! この負け犬があ!」

「て、鉄人!? 嫌だ! 補習室は嫌なんだっ!」

「黙れ! 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ! 終
戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな
」

「た、頼む! 見逃してくれ! あんな拷問耐え切れる気がしない!」

「拷問? そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃
には趣味が勉強、尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒
に仕立て上げてやるっ!」

「お、鬼だ! あっ、兄貴! 助けっ

ヒイイヤアアア

(ボタン、

ガチャ)

(西やん、そりゃ立派な教育じゃなくて立派な洗脳だよ)

龍星は今のやりとりを見て心の中でそう思った。

西村教諭はまだマトモだと思ったが、やはり文月学園にマトモな人
間は少ない様である。

因みに明久と美波は今を見て青ざめている。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに? 作戦? 何て伝えんの?」

「総員退避、と」

「この意気地無し！」

「この大馬鹿野郎！」

美波は目をチヨキで殴り、龍星は頭をハリセン（本体に臆病者が！と書かれてある）で叩く。

「目と頭があ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！」

「お前は部隊長だろうが！臆病風に吹かれてどうする！」

だが、明久の覚ますべき目には激痛がはしっている。美波の台詞はせめて、グーかパーで殴った後に言うべきだろう。

「いい、吉井？ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給が出来ないじゃない」

「ごめん。僕が間違ってたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利する事だけを考えよう」

「それにな、其処まで心配することあねーよ。Fクラスは個別戦闘は弱いかもしれねえが、これは戦争なんだ、多対1で戦えば良い」
DクラスとFクラス。点数では確かに負けるだろうがそれだけでは試召戦争を勝ち抜く事は出来ない。やり方次第では十分に勝てる可能性はあるだろう。

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

その時、美波の所に報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

手のひらを返した様に先程とは真逆の事を言う美波に龍星は思わずハリセン（さつきと言ってる事が真逆じゃねーか！？と書かれてある）で頭をしばく。

「ちよっ！女の子の頭をしばし叩かないでよ！…！」

「すまん。つい思わずツツコミを入れちゃった。てか、言ってる事がさつきと違っただろうが!!」

「だって、戦死したら補習室逝きよ!」

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「ええ、ウチらは精一杯努力したわ」

そんな2人のやり取りを聞きながら龍星は頭を抱えた。

明久と美波がくるりとFクラスに向かって方向転換をすると、其処には本陣（Fクラス）の近衛隊に配置された筈のクラスメイト、横田がいた。

「横田どうした?」

「兄貴、代表より伝令があります」

メモを見ながら横田がハキハキとした声で伝える。

「『逃げたらクロス』」

「全員突撃しろおーっ!」

既に明久は叫びながら戦場に向かって全力ダッシュをしていた。龍星は明久の後を追って走り出す。が、あっさり追い抜いた。すると、前方から此方に向かって走って来る秀吉を発見した。

「明久と龍星殿、援護に来てくれたんじゃな!」

「秀吉、大丈夫?」

「うむ。戦死は免れておるものの、点数はかなり厳しい所まで削られてしまったわい」

「それじゃあ、早いとこ補給を受けてこい。お前等が戻るまで俺達が何とかしよう」

龍星の言葉に秀吉は頷いて、

「そうじゃな。せめて一、二教科だけでも受けてくるとしよう。」「言うや否や、秀吉と前線部隊のクラスメイト達が教室に向かって走って行った。

「さて、部隊長殿。気合いを入れて時間稼ぎをしますか!」

「了解、部隊長補佐殿!」

明久と龍星は、後から走って来る美波と中堅部隊を連れて前線へと

走って行った。

「吉井、榊、見て！」

龍星達の隣を走る美波が叫ぶ。

「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

見ると二年生化学担当の五十嵐、布施両教諭が渡り廊下にいた。

「どうやら、Dクラスは短期決戦を挑んで来た様だ。」

「島田さん、龍星。化学に自信は？」

「ある訳ねーべ。俺は日本史特化型よ？」

「同じく全く無し。六十点台常連よ」

流石はFクラスと言った所だろうか。お世辞にも良い点数とは言えなかった。

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生には近付かないよう注意しながら総合科目の学年主任の所に行こう」

「高橋先生だな？了解だ！」

「同じく了解よ」

「あっ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！五十嵐先生、こつちに来て下さい！」

「ちっ！明久、島田、先に行け！コイツは俺が任された！」

龍星の言葉に明久と美波は一瞬躊躇うものの、頷いて先へと走って行った。

「ああ！お姉さま、待って下さい！」

「おっと、あなたの相手は俺だよ！」

「くっ！醜い豚野郎の分際で美春とお姉さまの邪魔をしないで下さいー！」

美春と名乗った女生徒は、龍星を豚野郎呼ばわりしてその横を駆け抜けようとするが、一瞬早く龍星が叫んだ。

「サモン試獣召喚！」

呼び声に応じて龍星の足元に幾何学的な魔法陣が現れる。教師の立ち会いにシステムが応えた証である。そして、現れる召喚獣。

現れた召喚獣は青い着物に白い袴姿に手には日本刀を持っているという点以外は、喚び出した本人そっくりである。ただし、身長は八十センチ程度だ。その姿を一言で表現するなら『デフォルメされた榊龍星』と言ったところだ。

「さて、試召戦争のルールは知ってるな？このまま通り過ぎるなら敵前逃亡で補習室行きだな。俺は別に構わんが……さて、どうする？」

試召戦争のルールに『相手が召喚獣を喚び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける』とある。

このまま美春が通り過ぎるなら戦闘放棄と見做され戦死者扱いとなり補習室へ連行される事になる。

「豚野郎の分際で美春の愛を邪魔するとは許せません！試獣召喚！」
そして召喚される美春の召喚獣。どうやら獲物は普通の剣のようだ。2人の召喚獣の頭には参考として、2人の戦闘力（点数）が浮かび上がっていた。

『Fクラス榊龍星VS Dクラス清水美春

化学 50点 VS 94点』

「その程度の点数で美春に勝負を挑むとはやはりFクラス！お姉さまが影響される前に美春がお救いしなければ！」

「戦闘力がそのまま勝敗に繋がらんという事を教えてやろう」

龍星の言い方にカチンときたのだろう。美春の召喚獣が剣を振りかざし襲ってきた。

そのまま剣を振り下ろした美春はニヤリと笑う。恐らく真つ二つになつた龍星の召喚獣を思い浮かべたのだろう。

だが次の瞬間、美春は目を疑う。

龍星は振り下ろされた剣を刀の鞘を使って受け流したのだ。

「一つ教えてやろう。日本刀はな西洋の剣の様に相手の攻撃を受け止めるようには作られてはいない。下手に受ければ簡単に折れちまう。ならばどうするか？今見たいに攻撃を受け流せば良いのさ」

龍星は言い終わると、召喚獣を操作して鞘から刀を抜いた。

「それと、もう一つ。」

「くっ！豚野郎のクセに生意気です！」

美春は次々に攻撃を繰り返すが龍星は鞘を使って受け流すか、よけるかで攻撃しようとしなない。

「この！この！」

「お前の様に怒りで頭に血を上らせる事は、戦いにおいて最大の悪手だ。怒りは冷静さを奪い攻撃を単調化する」

龍星はこの時、ある瞬間を待っていた。そして、その瞬間は遂に訪れる。

怒りにより冷静さを失った美春は段々と大振りの攻撃を繰り返す様になってきた。そして、美春の召喚獣が致命的な隙を見せる。

「隙あり！！」

ザシュツという音と共に、龍星の召喚獣は美春の召喚獣の首を切り落とした。

これにより美春の点数はゼロとなり、勝負は龍星の勝利に終わった。この後、突如として現れた西村教諭に美春は補習室へと連行された。

「あゝ、疲れた（汗）」

龍星はFクラスの教室に戻ると畳にへたり込んだ。

周りを見ると雄二達は既にいなかった。恐らく明久達の援護に向かったのだろう。

「しっかし、召喚獣を動かすつてのはキツいな。まあ、なれるしかねーんだろな」

そう言つて龍星は立ち上がり走り出す。

「よっしゃ、もう一頑張りしますかねっつと！」

そう言つて、龍星は明久達の援護に向かうのだった。

第4問（後書き）

美波のダーク化は、度重なったショックに明久の一言が加わり起こりました。皆さんの反応が良かったらこれからも度々出てくる事でしょう。

最後のVS美春戦はかなりあっさり倒している様に見えますが、実は10分近く避け続けてます。だから、ラストで龍星はへばってたんです。

今回のネタ。

仮面ライダーWよりスリッパネタ〜スリッパをハリセンに変えて〜

第5問（前書き）

警告！！今回は、須川と雄二と』とある二年B組の卑怯者』が酷い目にあってます！この三人のファンの方はご注意ください！！

それでも構わんと言う方はどうぞお進み下さい。

後、龍星からの一言です。

龍星「この物語に出る人物は皆、特殊な訓練を受けてます。決して俺達の真似をしないで下さい」

………する人はいませんか？

第5問

「バカテストノ物理」

【第5問】

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希・瀬川芹香の答え

『粒子』

教師のコメント

良く出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

榊龍星の答え

『ビックウエーブ』

教師のコメント

視認出来ないのに何故ビックウエーブだと分かるのですか？

龍星が前線に向かって走っている時、チャイムが鳴り放送が入った。ピンポンパンポン《連絡致します》
聞き覚えのある声で校内放送が流れた。

「この声は……須川か？一体何を？」

《船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています》
ドガシヤアツ！

龍星は放送を聞くと盛大にすっころんだ。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「イタタタツ！な、何ちゅう危険なコトを抜かしとるんだ、須川の奴は！」

そう言つて龍星は放送室へ向かつて爆走しだした。

船越女史は婚期を逃した焦りの為か、遂には単位を盾に生徒達に交際を迫る様になった、ある意味危険な先生である。

可愛い弟分の貞操が本っ気でヤバいのだ。龍星は一分一秒でも速く放送室へ向かう為に全力疾走をする事にした。

「須う川ああああああっ！！！」

それは丁度、弟分の明久が魂の叫びをあげたのと同じタイミングだった。

全力疾走をする龍星の目に放送室が見えたのは、使命を終えた須川が放送室から出て来るのと同じ時だった。

「須川あああああ！！！」

龍星の叫びが聞こえた須川が振り返ると其処には凄まじいスピード

で走ってくる龍星の姿があった。

「あれ？兄貴、どうし「死ねよやあああつ！」ひでぶつ！」
「あべし……！」

須川の言葉を遮り、勢いそのまま須川にズバシッとハリセンアタク（本体にウエ　　イ！！と書かれてある）をかました龍星はギャツギャツギャツと凄まじい音を足元からさせながら止まった。因みに張り飛ばされた須川は偶々通りかかった『とある二年B組の卑怯者』を弾き飛ばして止まった。

「安心しろ。急所は外している」
凄まじい勢いで張り飛ばしておいて、急所もへつたくれも無いと思う。

「答える。何故明久を船越女史の生け贄にした？」
須川の胸元を掴み取るとそのまま引き寄せて質問する。

「ら、らிரಿಯうのひりでしゅ〜（だ、代表の指示です〜）」
呂律の回っていない須川が答える。

「そうかあ、駄雄二の指示かあ！ありがとう。ゆっくり休め須川」
龍星は須川の屍に手を合わせると再び走り去った。

この後、暫くしてから須川は立ち上がり何事もなかったかのように歩き去った。

因みに巻き添え喰った『とある二年B組の卑怯者』は深夜になるまで起きなかつたという。

「卑怯者、死して屍拾うもの無し」

龍星が須川を張り飛ばし、『とある二年B組の卑怯者』が巻き添え喰った頃、雄二達の援軍を待っていた明久はDクラス所属の笹島圭吾に勝負を挑まれていた。

「吉井明久！その首級貰ったあつ！」

その声に明久は覚悟を決めた。

「負けるツものかああつ！試獣召喚！」

明久の叫びに応え、足元に顕れる魔法陣。

明久の中から何かが抽出されていくような感覚と共に開放感が訪れる。

そして現れる、黒い学ランに身を包み手には木刀を持ったもう一人の明久。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手を　あがあっ！」
明久の肩にいきなりの激痛。

どうやら明久の召喚獣は敵召喚獣が突っ込んでくる正面に現れたようだ。痛みのフィードバックが明久の身体を苛む。

「この部隊長は馬鹿だ！俺一人で充分だから、皆は残りを！」
笹島は明久に対し失礼（？）な言葉を吐いた。

「くたばれ吉井！」
「そうはいいか！」

明久は自らの召喚獣を低い姿勢のまま横っ飛びさせる。そしてタイミングを合わせ、通過する敵の足をヒョイツとすくう。

「なっ!?!」
豪快に転ぶ笹島の召喚獣。

相手が驚いている今がチャンスとばかりに明久は叫ぶ。

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

「なにいつ!?!」

Aクラス代表　学年主席の才色兼備、霧島翔子のスカートの下を見る為にD・Fクラスの男子は疎かDクラスの女子まで振り返った。明久は皆の注意が逸れた一瞬を利用して、近くの窓に履いていた上靴を思いっきり投げつける。

ガシャアアン！

破砕音とともに、窓ガラスが砕け散る。

『な、なんだ!?!何事だ!?!』

突然の出来事にその場の全員の注意が更に逸れた。

「うわっ！島田さん！そんな物をどうする気なんだよ！」

今この場にいない美波を犠牲にして、明久は今後の自身の保身の為に小芝居をうちながら、壁に備え付けられている消火器を掴み取り、安全弁を引き抜く。

ブシャアッ！という景気の良い音と共に溢れ出る消火薬の粉末。

「う、うわっ！なんだ!？」

「ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

視界は消火薬の粉に遮られ、戦闘の継続はかなり困難になった。

「島田さん、君は何て事を！」

明久は念の為もう一芝居うった。これで皆が犯人は美波と思い込むだろう。

「Fクラスの島田め！何て卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

「……男らしくしてステキ……。美波お姉さま……」

どうやら清水美春と同じ属性を持つ女子が他にもいるようだ。

明久が美波という尊い犠牲に黙祷を捧げながら振り返ると、雄二達が駆け寄ってくる姿がかなり近くに見えた。

「だあああっ！」

明久は空になつた消火器を天井のスプリンクラー目掛けて思いっきりぶん投げる。

見事に命中、正に大当たりというヤツである。

シューアアア

明久の狙い通りスプリンクラーが作動。水滴が辺りに舞う粉を落とし始める。

「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます！」

再びクリアーになった視界で勝負を申し込んだのは、雄二率いるFクラス本隊の一人、近藤吉宗だった。

「試獣召喚！」

『Dクラス中野健太VS Fクラス近藤吉宗
化学43点VS 91点』

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

Dクラスの部隊長塚本の撤退命令がすぐ近くから聞こえてきた。

「深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

Fクラス代表の雄二の指示が飛ぶ。

「さて、無事なようだな。明久」

「うん、まあね」

明久はひとまず窮地を逃れる事は出来た。

Fクラスは部隊を立て直す為、荒れに荒れた戦場を後にした。

明久は教室に戻り、化学のテストを受け直した後、

「明久、良くやった」

と、総大将である雄二が明久を褒めると言うらしくない言葉を口にしたのを聞き驚いた。

明久が疑問に思いつながら雄二の顔を見ると、その顔にはメチャクチャ晴れやかな笑顔が浮かんでいた。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バツチリな」

雄二は完全に明久の不幸を喜んでた。

「雄二、須川君が「須川は俺が張り飛ばしといたぜ？明久」えっ？」

突如聞こえた聞き慣れた声に振り向くと、其処にはハリセンを担いだ龍星が爽やかな、本っ当に爽やかな笑顔を浮かべて教室の入り口に立っていた。

「龍！良かった、無事だったんだね！」

「ああ、見ての通りだ。……さて、雄二」

ハリセンを担いだまま、ゆっくりと爽やかな笑顔を浮かべて雄二に近付いていく龍星。

そして、後ずさる雄二。

「俺が須川を張り飛ばした時に聞き出したんだが……」
ダツシュで逃げる雄二。

だが、龍星に回り込まれて逃げられない！！

「あの放送、お前の指示だってなあ？」

龍星の言葉に明久が驚いて雄二を見る。

雄二は往生際悪く逃げようとしていた。

「明久」

そう言つて懐から出したもう一本の折り畳み式の高性能ハリセン（
やっぱり芹香作・銘【芹香村雨】）を明久に投げ渡す。

「お、落ち着け！あれは作戦で！？」

「問答！」

「無用だ！」

「このクソ野郎！」

明久と龍星は互いにハリセンを構えて叫ぶ。

「龍星ダイナミック！！」

「明久クラッシュ！！！！」

龍星は袈裟切りに、明久は逆袈裟に雄二にハリセン（龍星のは【く
たぱりやがれ！】、明久のは【この腐れ外道！】と書いてある）を
叩きつけた。

「アパチャアアイツ！！」

雄二は訳の分からない叫び声を上げながら膝から倒れた。

「成敗！」

「雄二の栄えた試し無し！」

龍星・明久の順で決め台詞を叫んだ。

「流石にやり過ぎでは……？」

瑞希の言葉が教室に虚しく響くのであった……。

「さて、船越女史は後で何とかするとしてだな」

龍星と明久に睨まれながら（あの後すぐ起きた）雄二が言葉を紡ぐ。

「まずは、Dクラス代表の平賀を討つ」

「そう、それでこの戦争は終わりだ」

龍星の言葉に頷いて雄二は立ち上がる。

「明久、取り敢えずお前が平賀に突っ込め……って、落ち着け！捨て駒じゃねえ！！」

雄二の言葉に再びハリセンを構えようとした二人を見て雄二は慌てて叫ぶ。

「平賀を討つ本命の矢は姫路だ」

雄二の言葉にクラス中が瑞希を見る。

「えっ？私ですか！？」

ビックリする瑞希。

「成る程、二段構えの矢か。油断を誘う矢の明久を隠れ蓑に本命の矢である瑞希で平賀を打ち抜く」

龍星の説明に雄二は頷く。

「俺達の役目は平賀までの道を切り開く事か。みんな覚悟はいいか？」

龍星はクラスメイト達に問う。するとクラスメイト達は、

『覚・悟・完・了・！・！』

と叫び頷いた。

「すまん。みんな、お前達の命、姫路と明久に賭けてくれ！！Fクラス、行くぞおっ！！」

『『『オオオオオオオオツ！』』』

雄二の号令に皆が一つと成って走り出す。

「下校してる奴らに上手く溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄二の号令にFクラスの面々が各自動き出す。

「そつちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を」

「日本史で」

Fクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでいる姿がそこら中に見て取れる。

下校中のドサクサに紛れて敵に近付き、取り囲んで討ち取るという作戦である。

『Dクラス塚本、討ち取つたりいいっ！』

一際大きな声が戦場に響き渡る。

既にHRも終わり、教師達を捕まえ易くなったお陰で、この作戦は上手くいっているようだ。

だが、

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Dクラスの本隊が遂に動き出したようだ。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りにいけ！他のメンバーは囲まれている奴らを助けるんだ！」

『おおー！』

Dクラス代表平賀の号令の下、あつという間に雄二の周りがDクラスメンバーで囲まれる。

だが、雄二の近くには日本史教師を連れた龍星が布陣されていた。

「先生！Fクラス榊龍星がDクラスの面々に日本史勝負を申し込む！試獣召喚！」

龍星の叫びに応え、現れる龍星の召喚獣。

「くそっ！試獣召喚！」

『試獣召喚！』

Dクラスの面々も召喚獣を喚び出す。

そして、提示される点数。

『Fクラス榊龍星VSDクラスメンバー

日本史485点VS平均70点』

『はあっ！？』

Dクラスメンバーから驚きの声上がる。

「燃え上がれ『爆炎』！！」

龍星の召喚獣に装備された腕輪が輝き、召喚獣の持つ刀が炎に包まれる。

「腕輪持ち！？聞いてねえぞ！」

Dクラスメンバーの一人が叫ぶ。

腕輪とは召喚者である生徒がテストで400点以上取った時にのみ召喚獣に装備される物で、様々な能力を持っている。

因みに龍星の場合は、

・『爆炎』のキーワードで武器が炎に包まれる。

・点数を消費する事で広域放射と収束攻撃が可能になる。
である。

「爆炎放射、秘剣・轟火剣嵐しゅうかけんらん！！」

龍星の召喚獣が刀を横薙に振るうと、炎の嵐が辺りに吹き荒れDクラスメンバーの召喚獣を焼き散らしていく。

その結果、大半のDクラスメンバーが0点になり西村教諭に 補習室へと連行された。

そして、

「Fクラス姫路瑞希、Dクラス代表平賀源二君を討ち取りました！」
戦いは終わった。

第5問（後書き）

Dクラス戦終了！次回は戦後会談と何時の間にか行方を眩ました美波の行方を書いたDクラス戦エピソードです。

今回は龍星がはっちゃけました。それに釣られて明久もはっちゃけました。

因みに巻き添え喰った卑怯者は深夜に起きた時、何故自分がこんな所で寝ていたのかが分からず深夜の学校に怯えながら帰ってます。

〜今回やりたかったネタ〜

龍星ダイナミック and 明久クラッシュ。

宇宙刑事ギヤバン and シャリバンの必殺技ネタ。〜レーザーブレードをハリセンに変えて〜

これにもう一人加わると『Fクラストリプルスラッシュ』になります。

漫画『覚悟のススメ』より『覚・悟・完・了！！』ネタ。

因みに『二段構えの矢』は小学校の頃好きだった漫画『ザ・モモタロウ』にあったエピソードから抜粋してます。

第6問（前書き）

Dクラス戦エピソードです。

最後にBクラス戦のフラグもあります。今回ダークネス美波の再臨もありません。では、どうぞ。

第6問

「バカテストノ古文」

【第6問】

問 『やんごとない』の意味を書き記しなさい。

姫路瑞希・瀬川芹香・榊龍星の答え
『貴い』

教師のコメント
正解です。榊君は珍しく正解ですね。

吉井明久の答え
『ヤバくない』

西村教諭のコメント
お前の頭がヤバいんだ！

Dクラス代表 平賀源二 討死
『うおお つー！』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「坂本雄二様々だな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「兄貴いいいっ！」

「姫路さん愛して……くぺっ！」

代表である雄二を褒め称える声が至る所から聞こえてくる。

因みに最後の生徒の言葉は龍星リウセイの手によって遮られた。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんっーか」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見る雄二。照れるとは意外である。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

龍星達の背中から誰かの声がした。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀の姿があった。

「あ、その、さっきは……」

謝ろうとする瑞希の肩に龍星が手を置いた。

「瑞希、謝る必要は無い。勝敗が在るのは勝負の常だ。それに今謝れば真剣に相手をしてくれたDクラスの連中を侮辱する事になる。」

龍星の言葉に平賀は頷いた。

「榊君の言う通りだ姫路さん。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。」

そう言つて平賀は雄二の方を向く。

「ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

敗残の将。これから平賀は再び試召戦争を行使出来る権利が回復するまでの3ヶ月間を、あのボロい教室でクラスメイトに恨まれながら過ごさなくてはならない。勝てば英雄扱いが代表ならば、負けて戦犯として扱われるのも代表なのだから。

「いや、その必要はない」

雄二は平賀を真っ直ぐに見て、そう言った。

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

疑問を口にする明久に雄二は答えた。

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることが出来たのに」

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスの筈だろう？」

打倒Aクラス。それは明久達の至るべき到達点。

「でもそれなら、なんで一気にAクラスに攻め込まないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘つかないですよ！」

「スマンスマン。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「明久、お前言われた事が……？」

「まさか……本当にあるのか……？」

龍星と雄二が明久を憐れみの目で見る。

「と、兎に角だな。Dクラスの設定には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達には有り難いが……。それでいいのか？」

「勿論、条件がある」

「一応聞かせて貰おうか」

「何、そんなに大した事じゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外にある室外機。但し、それはDクラスの物ではない。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性はあるだろうが、そう悪い取引じゃないだろう？」

悪い取引である筈が無い。上手く事故に見せかければ嚴重注意で済み、それだけで3ヶ月もの期間をあ教室で過ごすという状態に成らずにすむのだから。「それは此方としては願ってもない提案だが、何故そんな事を？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。では此方は有り難くその提案を吞ませて貰おう」
「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行って良いぞ」
「ああ。有り難う。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」
「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろ？」
「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てる訳がない。ま、社交辞令だな」
「じゃあ、と手を挙げてDクラス代表平賀源二は去っていった。

「そう言や明久。島田は何処に行ったんだ？」
全てが終わり、クラスに戻って帰り支度をしていた時、龍星が何時の間にかいなくなっていた美波の事を明久に聞いた。
と、同時にFクラスのドアが凄い勢いで開き、暗黒のオーラを纏った美波が入ってきた。

「ヨシイ。ナニカイイノコスコトハアル？」
美波……いや、ダークネス美波は先程の龍星（第5問参照）の様にゆっくりと明久に近付いてきた。

「……明久。お前あの後何やった……？（汗）」
「いや、その、ちよつと……（汗）」

「サカキ、ヨシイハネウチヲミステアゲク、ウチヲギセイニシタ
ノヨ」

じわりじわりと近付いてくるダークネス美波。

「アンタノセイデ、ウチハホシユウシツデ、ミハルニオソワレカケ
タノヨ？ケタケタケタ」

「明久……、お前の事は忘れない」

龍星の言葉をきっかけに、ダークネス美波が明久に襲いかかる。

「シネ！シンデウチニワビナサイ！！」

「ぎゃああああっ！」

「島田！女の子がスカートで飛びかかるな！？」

「ソナナコトヨリ、ヨシイヲシマツスルコトガセンケツヨ！」

「……………！？（パシャパシャ！）」

「止めんかい！（ズバシッ！）」

スカートが捲れるのにも構わず明久を痛めつけるダークネス美波。それをチャンスとばかりにシャッターを切るムツリニ。

それをハリセン（このムツリ野郎！！と書いてある）で張り倒す龍星。

Dクラス戦を終えた戦士達は、休む間もなく騒ぎを起こし、何時もと変わらぬ放課後を過ごしたのであった。

オマケ（瑞希の決意）

「ふう、今日は疲れました」

瑞希は自室で着替えを済ますと自分の机の椅子に座り、軽く溜め息をついた。

「明久君、大丈夫でしょうか？心配です」

あの後ズタズタになっていた明久を心配するが、今となってはどうする事も出来ない。

「明久君……………」

瑞希は机の上に飾ってある写真立てを見る。

ソコにはまだ小学生の自分と手を繋いだ小学生の明久、そして、小学生の龍星が笑顔で写っていた。

「明久君は、私のことどう思っているんですか？」

私は　と、呟いて頬を染める瑞希。

「よし！この気持ちを手紙に書いて、明久君に渡しましょう！」

そう言つて、便箋を取り出し文字の一つ一つに気持ちを込めて手紙を書いていく。

暫くして、書き上がった手紙を封筒に入れハート型のシールで封を止め、表に「明久君へ」と書いて裏に「瑞希より」と書き、ペンを置く。

出来た手紙を鞆に入れて一安心した瑞希は夕食をとる為に、キッチンへと向かう瑞希。

瑞希の気持ちが進められた一通の手紙。まさかコレが自らを苦しめ、明久や龍星を怒らせる原因になるとは夢にも思わない瑞希であった。

第6問（後書き）

取り敢えず、Bクラス戦での原作における手紙強奪フラグが立ちました。

人の気持ちを弄ぶ』とある二年B組の卑怯者』には必ずや超怒級シスコンの裁きが下る事でしょう。

今回は……珍しくネタ入ってないですね？

第7問（前書き）

VSBクラス戦序章です。

『とある二年B組の卑怯者』の悲劇の幕開けです。
では、どうぞ。

第7問

「バカテストノ化学」

【第7問】

問 以下の質問に答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希・瀬川芹香の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

榊龍星の答え

『ト、トラウマが……』

教師のコメント
君に一体なにが!?

「うあー……づがれだー」

「お疲れさん。船越女史の一件も片付いたし、良かったじゃねーか」
へタレる明久に声をかける龍星。

今日は朝から昨日のDクラス戦で消費した点数の回復を目的とした
補充テストを受けていた。

因みに船越女史の一件は、明久が近所に住むお兄さん（39歳/独
身）を紹介する事で片が付いた。

「お疲れ様じゃ明久に龍星殿」

「……………（コクコク）」

何時の間にか近くに秀吉とムツツリーニが来ていた。

「秀吉。そんなポニーテールとかすつから男扱いされねーんじゃね
えのか?」

「うぐつ!?!」

龍星の一言に秀吉が胸を押さえる。どうやらクリティカルヒットし
たようだ。

「よし、昼飯食いに行くか!今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレ
ーにすっかな」

勢い良く立ち上がる雄二からは疲れが感じられない。

「さて、俺は屋上に行くかな。明久、お前はどうする?」

「僕も屋上に行くよ」

「ウチは食堂に行くわ。今日、お弁当作ってこれなかったのよね」

「私は龍兄達と一緒にいきます」

「……………食堂」

「僕も屋上に行くとするかの。無論、龍星殿のお邪魔でなければじやがの」

秀吉の言葉に龍星は快諾。食堂に行くのは雄二、美波、ムッツリー
二の三人。屋上に行くのは龍星、明久、瑞希、秀吉の4人となった。

「くー！良い天気だなあ〜おい。」

龍星が伸びをしながら呟く。

あの後、芹香とも合流して5人となった面々は円を描くように座つた。

「……………（はい、りゅうくん）」

そう言つて龍星にお弁当を手渡す芹香。

「何時もありがとな」

龍星はお弁当を受け取つて礼を言いながら芹香の頭に手をおいて優しく撫でる。

「……………（んにゃ〜）」

芹香はまるで猫のように目を細め、気持ちよさそうにされるがままになる。

「本当に気持ちよさそうじゃの芹香殿」

「龍兄の手は暖かくて大きくて撫でられると気持ち良いんですよ」

「そういえば昔、僕も撫でられた事あつたっけ」

三人はにこやかな気分で二人のやり取りを見つめていた。

「そっか、この中じゃあ俺に頭撫でられた事ねえの秀吉だけか。秀

吉、いつとく？」

そう言つて芹香を撫でてる手とは反対の手で秀吉を手招きする。

「……………（秀くんも撫でられてみて〜気持ち良いによ〜）」

なんかもつ、とろけた様になつている芹香にまで手招きされた秀吉は顔を少し赤くしながら、

「そ、そこまで言うなら少しだけよろしいかの？」

と言つて、空いてる手の方に向かう。

「ほれ」

秀吉の頭に手を置いて撫で始める龍星。

「ん……こ、これは確かに気持ち良いのう」

そう言つて目を細める秀吉。

その後、数分間芹香と秀吉は撫でられ続けた。

数分後。お肌が艶々になった秀吉と芹香は満足しながら昼食を取っていた。

「ていうか、なんでそんなにお肌が艶々になってんの？」

「さあ？ひよつとしたら龍星殿の手から何か出てるのかも知れぬのう」

「……？（ここまで艶々になったのは初めてなんだけど……？）」
明久の問いに秀吉も芹香も疑問詞を浮かべる。

「まあ、それは兎も角サツサと食っちゃまおうぜ」

龍星は三人に促す。

食事を終えて、暫くすると雄二達食堂組が屋上にやってきた。

「木下と瀬川さん……」

「……？（あ、芹香でいいよ。私もみなちゃん、て呼ばせて貰っていい？）」

「ええ、いいわよ。所で、木下と芹香つてなんでそんなにお肌が艶々なのよ？」

不自然な程に艶々になっている二人に美波が明久と同じ疑問をぶつける。

「龍星殿に頭を撫でられただけなんじゃが？」

「……（りゆうくんの手から何か出てるのかな？）」
明久の時と同じ様な答えを返す二人であった。

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん、相手はBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

雄二が美波の言葉に頷く。

「雄二、どうしてBクラスなんだ？目標は「待て、龍星」？」
龍星の言葉を雄二は遮ると芹香の方を見る。

「……（あ、ごめんなさい。じゃあ私あっちに行ってるね）」
「すまんな瀬川。終わったら呼ぶ」

雄二は立ち上がる芹香に頭を下げると芹香が離れるのを待ってから話す。

「すまん」

「気にするな。それに正直に言おう。どんな作戦でも、Fクラスの戦力じゃAクラスに勝てやしない」

龍星が頭を下げるのを雄二は止めて、自分の考えを正直に言う。

「例え、姫路が居ようが龍星の日本史が高かるうが、それは個人の戦力だ。Aクラス相手じゃあつと言つ間に倒されるだろう。」

雄二の言葉に龍星も瑞希も頷く。

無理もない。この文月学園はAクラスからFクラスの6クラスから成るが、Aクラスは格が違う。別次元と言えるだろう。五十人からなるAクラス生徒の内、四十人はまだ良いだろう。Bクラスより少々点数が上の普通の生徒だ。

だが、残りの十人がヤバイ。特にAクラス代表である霧島翔子。彼女の力は想像を絶する。例え、奇襲をかけ明久達が彼女一人を取り囲んだ所で、返り討ちが関の山だろう。

どんな作戦でも、代表を討ち取れぬ限り勝利は無い。止めを刺せない以上、明久達に勝ち目は無いだろう。

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更って事？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違うじゃないか」

美波の言葉を引き継ぐ様に明久が間に入る。

「クラス単位じゃ勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う」

雄二の言葉に明久が首を傾げる。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

「え？も、勿論！……（拙い！知らない）」

（明久君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

瑞希が明久に助け舟を出す。

「設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまりBクラスならCクラスの設備に落とされる訳だ」

雄二が明久をジト目でみながら告げる。

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪きり要らずの身体にする動きがっ」

「阿呆。雄二も拷問しようとするな。後、本当に用意すんな康太」
「パミパミパミと三人の頭をハリセン（ええ加減にせんかい！と書いてある）で叩く龍星。」

「相手と設備が入れ替えられちゃうんですよ」

またしても瑞希のフォローが明久に入る。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるんだね」

「ああ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まず旨くいくだろっ」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「成る程ねー」

学年二番手のクラスと戦った直後に休む暇もなくまた戦争。これはキツイだろう。

Fクラスも連戦になるが、明久達には不満という原動力がある。そもそも体力は余っているが頭の悪い野郎だらけのクラスなのだからだが、Aクラスはそうではない。勝っても得られる物も無く、Fクラス相手に時間をくうのも嫌な筈。モチベーションね差は歴然としている。

「じゃが、それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじやろうか？此方に姫路と龍星殿がいるということは既に知れ渡っている事じやろう？」

FクラスがDクラスに勝ったとなると、当然その勝ち方に注目が集まる。瑞希と龍星の存在は最早周知の事実だろう。そうなれば相手も瑞希と龍星に対し何らかの対策を練っている筈である。

「その辺に関しては考えがある。心配するな」
皆の不安と対照的に自信満々な雄二。

「兎に角Bクラスをやるぞ。細かい事はその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

いくら雄二でも勝算無しにこんな事は言わないだろう。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら「断る。使者なら雄二が行けば良いじゃないか」……最後まで言わせる」

雄二の言葉を遮り全力で使者を断る明久。

「雄二、使者なら俺が行く。お前の目的は明久がボロボロになるのを見て楽しむ事だろうが」

ズバリ正解を当てる龍星き雄二は明後日の方向を見る。

「今日は良い天気だな」

「龍の言葉は当たりなんだな？雄二」

わざとらしく話をそらそうとする雄二に問い詰める明久。

「さて、話も終わったし。おい瀬川あ！もう良いぞー！」

「この駄雄二！瀬川さん呼び戻すとは卑怯だぞ！」

ととて走ってくる芹香を見て、雄二を問い詰める事を諦める明久。

「安心しろ明久。」

「龍？」

「こういった人を利用する駄雄二には必ず天罰が下るものさ」

龍星の言葉に笑みを浮かべる明久。

「それもそっか」

「だから駄雄二駄雄二うるせえって言っただろうが！！」

「…………？（りゆうくん、どうしたの？）」

雄二が叫ぶと同時に戻ってくる芹香。

「いや、何でもなし。雄二がいきなり叫んだだけさ」

「そうそう」

「くっお前ら…………！！」

悔しそうに明久と龍星を睨む雄二。

その後取り留めない話をしながら、昼休みは終わった。

この後、龍星はBクラスに赴き宣戦布告。襲われかけたが、筋肉をバンプアップさせ襲撃を回避。悠々とFクラスに戻ってきた。

今再びFクラスの試召戦争の幕は切って落とされたのであった。

第7問（後書き）

次回はBクラス戦その1です。
今回もネタは無し。次回は何とか入れようと思います。

第8問（前書き）

VSBクラス戦？です。

オリジナル展開混ざってます

後、根本は小物と思う作者がいます。
ではどうぞ。

第8問

「バカテスト／英語」

【第8問】

問 以下の問いに答えなさい。

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good better best
bad worse worst』

教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え

『good gooder goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estをつけるだけでは駄目です。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

榊龍星の答え

『good-bitter-best』

教師のコメント

惜しいです。bitterとbetterは似てますが全く違う言葉なので気を付けましょう。

Fクラスは今日も朝からテストで、つい先程全科目のテストを終え昼食を取った所で、雄二が教壇に立ち皆の方を向いた。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『オオーッ!』

雄二の言葉にFクラスの生徒達が雄叫びをあげる。

昨日から一向に下がらないモチベーションはFクラスの唯一の武器と言って良いだろう。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負ける訳にはいかない」

『オオーッ!』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい!」

「が、頑張ります」

野郎のノリについていけないのだろう。若干引き気味な瑞希が一歩前に出る。

『うおおおーっ!』

瑞希と一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は既に最高潮に達していた。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。いよいよBクラス戦の開始である。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サーイエッサー！』

Fクラスの生徒達が一斉に教室から出て行く。

「龍星、ムツツリーニ、お前らは少し待て」

「どうした？」

「……………何か用か？」

「ムツツリーニ、Bクラスの情報頼む」

「…………… Bクラスの代表はあの根本恭二」

「あの腐れ屑か！」

龍星が珍しく嫌な顔をして剣呑な雰囲気を出す。

Bクラス代表根本恭二。

この文月学園に通う二年生でこの男を知らぬ者は居ない。

なにせ評判が兎に角悪いのだ。

噂ではカンニングの常連だとか。目的の為には手段を選ばず、曰わく『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物は当然^{デフォルト}装備』とか。この試召戦争でも何をするか分からない為、用心に越した事はなかった。

因みに根本は一年の頃、芹香を落とそうとしつこく迫り龍星にボコられた事がある。

「…………… 基本的にBクラスの生徒達は根本に反感を抱いている」

「ま、あの糞野郎なら自分の仲間すら脅迫するだろうな」

「ちっ！ やっぱあの時、情けをかけずにゴールデンボールを潰しとくべきだったか？」

龍星の言葉の意味を瞬時に理解した雄二とムツツリーニは股間を抑えた。

「そ、それは兎も角だ！ 色々用心しといて損は無い。ムツツリーニ、

クラスの人数分の筆記具を手配出来るか？」

「……………少し時間がかかる」

「あの屑ならFクラスの教室を荒らす事を考えるってか？」

「間違い無くな。相手に楽して勝つには補給テストを受けさせなければ良い。どんな奴でも補給がなければ勝てないからな」

雄二は根本恭二という人間がどういう屑なのか、知り尽くしているのだろう。それ故にムツツリー二に筆記具の手配を頼んだのだ。

「すまない。Bクラスの使者だが、代表はいるか？」

「俺がFクラスの代表だが？Bクラスが何か用か？」

「うちの代表が協定を結びたいと言っているんだ。悪いがBクラスに来て貰えないだろうか？」

使者の言葉に雄二は少し考え頷く。

「良いだろう。だが、此方も近衛を一人付けさせて貰うぞ」

「ああ、それくらいなら構わない。」

そう言って使者はBクラスへと戻って行った。

「雄二、近衛ってまさか俺か？」

「無論だ。お前なら例え奇襲をかけられようが生身で切り抜けるだろ？ムツツリー二は筆記具の手配を済ませた後、情報収集を頼む」

「無茶言つなよ。俺は西やんか？」

「……………任された」

雄二は龍星に笑いかけると、ムツツリー二に指示を出してBクラスへと向かった。

龍星はそんな雄二にブックサ言つと雄二の後について行った。

「……………うわ、こりゃ酷い」

「まさかこう来るとはのう」

「卑怯、だね」

明久達は補給テストを受ける為に教室へと戻って来た……………が、彼等を迎えたのは穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃあ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はないし、それにこんな事もあろうかと思っただけ、前もってムツツリ
―二に筆記具の手配を頼んである」

「雄二がそう言うならいいけど。それはそうと、雄二も龍もどうして教室がこんなになってるのに気付かなかったの？」

雄二の予想は見事に的中した。

雄二と龍星が協定の為、教室を空けた間に根本はFクラスを襲撃。筆記具や卓袱台を壊していったのだ。

「協定を結びたいという申し出があっただけ。龍星と共に調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。4時まででに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「明久、俺達なら兎も角瑞希にそれはキツイだろ」

「あ、そうか。」

龍星の言葉に明久は納得した。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日という事になる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

「だから受けたの？瑞希ちゃんが万全の体制で勝負出来るように」

「そう言うことだ……って、明久、今姫路の事を名前で呼んでなか

「つたか？しかもちゃん付けで」

「明久があまりにもすんなりと言ったので雄二は思わずスルーする所だった。」

「言っただけどなんか可笑しい？」

「明久にとつては至極当然の事に思わず首を傾げた。」

「明久と瑞希、それに俺は小学校の頃からの付き合いだからな。当然っっちゃあ当然だろ？」

「龍星が雄二に答える。」

「明久、取り敢えず儂等は戦場に戻るぞい。向こうでも何かさされているかもしれん」

「了解。雄二、後よろしく」

「お、おう。龍星も行ってくれ」

「了解！代表殿」

「そう言つて、龍星は明久、秀吉と共に戦場へと向かった。」

「吉井！それに兄貴！戻つて来てくれたのか！」

「戦場にて三人を出迎えたのはFクラスの須川亮。指揮を取っていた筈の美波はいない。」

「待たせたな！戦況は？」

「かなり拙い事になっている」

「え！？どうして!？」

「Bクラスから本陣が出て来た様子はない。戦力としては負ける筈はないのだが。」

「島田が人質にとられた」

「なんだとっ!？」

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」
「現在、明久の部隊はそのせいで敵と睨み合いになっているようだ。」

「……そうだね。取り敢えず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

「須川が前を歩き、明久達が後に続く。」

明久の部隊の人垣を抜けると、そこには須川の言う通り二人のBクラス生徒と捕らえられたら美波及びその召喚獣の姿があった。

そして、側には補習担当講師の西村教諭もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

美波を捕らえている敵の一人が明久を牽制してくる。

「（明久、少し時間を稼げ）」

龍星が小声で明久に話しかけてくる。

「（龍？何か作戦があるの？）」「（奴らの後ろを見る。窓が開いてるだろ？）」

「（成る程、龍があそこから奇襲をかけて島田さんを救い出すと？）」

「

「（そう言うことだ。二分稼げ）」

「（了解！）総員突撃用意いーっ！」

「隊長それでいいのか！？」

敵と明久達がなんやかんややっている隙に龍星はすぐ近くの窓から外に出て、窓枠に手をかけて素早く進む。伊達にマッスルランキングは見えていない。

『コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？コイツ、お前が怪我をしたって偽情報流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ』

「（成る程ね。）んじゃお姫様救出作戦と行きますかっ！」

龍星は窓枠から廊下へと入り、叫ぶ。

「試獣召喚！んで、隙有り！」

「なっ！？」

ザシユザシユ！

龍星の召喚獣が美波の召喚獣を捕まえていた敵の召喚獣二匹を斬りつけると、美波の召喚獣を抑えていた手が緩む。

「今だ、島田！！明久！！」

龍星の声に明久と美波が動く。

『Bクラス鈴木二郎VS Fクラス吉井明久

英語W20点VS S21点』

『Bクラス吉田卓夫VS Fクラス島田美波

英語W5点VS S50点』

明久と美波の召喚獣が敵召喚獣を切り倒す。

「戦死者は補習ううううっ！！」

「ぎゃあああー……！！」

「助けてえー……！！」

近くにいた西村教諭に連行されるBクラス二人。

「大丈夫か、島田？」

龍星が美波に声をかける。

「あ、ありがとう。柎に吉井」

「無事で良かったよ。所で、何で一人で保健室に行ったの？まさか、怪我した僕に止めを！？」

「んな訳ねーだろ」

「あんた、ウチをなんだと思ってるのよ！」

龍星にハリセン（このにぶちゃんがーと書いてある）で頭を叩かれ、美波にアッパーを食らう明久。

「頭と顎がああああっ！？」

「ウチが吉井の心配したら悪いって言うの！ホントに心配したんだから！！」

明久に殴りかかる美波。うっすらと顔が紅いのは内緒だ。

「へぶっちよっしまっ」

「アキの馬鹿アアアッ！」

「落ち着け島田」

龍星は興奮気味な美波の頭にハリセン（今、アキって言ったよな？

と書いてある)を軽く落とす。
因みにFクラスの面々はこのやりとりを呆然と見ていた。

所変わってBクラス。

「代表、鈴木と吉田が戦死しました。」

「ちっ！使えない屑共が！」

Bクラス代表根本恭二が椅子に座って報告に悪態をつく。

『『『(屑はてめえだろうがっ！！)』』』

内心で一つになったBクラスの生徒達であった。

「まあいい。切り札はこっちにあるんだ」

そう言つて根本が取り出すのは1人の女の子の気持ちがかもった一通の手紙である。

「姫路は最早動けない。さて、どうする？坂本」

はっはっはっ和高笑いする根本。

だが、彼は気付いていない。決して気付きはしない。

自分が二人の男の逆鱗に触れたと言う事に。

一人はその女の子に密かに想いを寄せる観察処分者。

もう一人はその女の子を妹の様に可愛がっている超怒級シスコンを

自他共に認める兄貴と慕われる漢。

根本恭二は気付かない。

自分の末路が悲惨なモノであることに……。

第8問（後書き）

根本の卑劣な手に一人の女の子が苦しむ時、一人の観察処分者と一人の超怒級シスコンが怒りに吼える！

次回『バカとテストと年上の同級生』

『VSBクラス戦？・根本！てめーは俺達を怒らせた』

なんだ？この厨二臭い次回予告は？

今回のネタはこれですな。

ジョジョ第三部の『てめーは俺を怒らせた』です。

第9問(前書き)

VSBクラス戦?です。

決着は次回!

では、どうぞ

第9問

「バカテストノ保険体育」

【第9問】

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希・瀬川芹香の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

榊龍星の答え

『初恋』

教師のコメント

それは女の子が綺麗になる方法では？

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

「……………ここはどこ？」

明久が目を覚ますと汚い天井が目に入る。

「あ、気が付きましたか？」

「目覚めたか、明久」

すぐ近くから瑞希と龍星の声が聞こえる。

「あれ？僕確かBクラスと戦ってた……………」

どうやら、明久は記憶が飛んでいるようだ。

「……………」

龍星は近くにいる美波をジト目で見る。

「うっ……………あ、あれはアキが悪いのよ！ウチはホントに心配したって言うのに……………」

美波が教室の隅っこに向かい其処で座り込みのの字を書き出す。

「……………これはこれで売れる（パシャパシャ）」

「売るんじゃないよ！」

落ち込んだ美波の写真を撮るムツツリー二にハリセン（このムツツリ商売人が！と書いてある）でツッコむ龍星。

「所で、島田さん。」

「……………何よ？」

「今、僕の事『アキ』って呼んだよね？」

「え、あ、いや、それはホラ、なんというか
真っ赤になってあたふたしだす美波。」

「だから、その、そう！これからウチはアキの事アキって呼ぶから
！アキはウチの事『美波』って呼びなさい！！」

クラスメイトの前で真っ赤になって叫ぶ美波。どこからみても素敵
にテンパっていた。

無論、これを聞いたバカ達が嫉妬に燃えぬ筈がない。

『『『殺せーっ！』』』』

須川を筆頭とする黒いマスクの集団『FFF団』が明久に襲いかか
る。

『『『させぬ！！』』』』

だが、白いマスクの十人程の集団が明久達を庇うように立ちふさが
る。

『何奴！』

須川が叫ぶ。

「我等は去年一年を兄貴と共に過ごせし者」

「我等は哀を受け、愛に生きる者」

「我等は真に乙女達の為に生きる者」

「我等は真に学園の風紀を護る者」

「我等は己の嫉妬では動かぬ者」

「我等は……」

『『『ネオ・FFF団！！』』』』

龍星はその声に聞き覚えがあった。

「近藤、君島、柴崎、田中、横田、工藤、森川、山崎、河野、お前
ら……」

間違いない、去年同じクラスで今年も同じクラスになったバカ達で
あった。

「FFF団よ、吉井達の邪魔はさせぬ!!」

「醜い嫉妬で動く者よ、悔い改めよ!」

近藤と君島がFFF団に向かって言い放つ。

『おのれえ!者共、かかれえっ!』

須川の言葉に残りの団員達が動く。

それと同時にネオ・FFF団が動く。

FFF団の方が圧倒的に数は多いのだが、ネオ・FFF団はまがりなりにも去年一年龍星と共に過ごして来た男達。性根と根性では遙かにFFF団よりかなりまともである。

結果……………ネオ・FFF団の勝利。

後に、ネオ・FFF団は文月学園の自警風紀集団となり清涼祭などで活躍した為、女生徒達から圧倒的な支持を受け所属する生徒達は皆彼女持ちとなる。

この後、ムツツリー二の情報によりCクラスに不穏な動きありという事で雄二率いるFクラス主力部隊（秀吉除く）はCクラスに赴き、不可侵条約を結ぼうとしたが根本の奸計により締結ならず。一騒動あったが、明久と美波の活躍により主力部隊は無事Fクラスに帰還する事が出来た。尚、明久と美波も無事に戻ってきた。

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校してきた明久達に雄二は開口一番そう告げた。

「作戦?でも、開戦時刻はまだだよ?」

現時刻午前八時半。開戦予定時刻は九時である。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、成る程。それで何をすんの?」

「秀吉にコレを着てもらおう」

そう言つて雄二が鞆から取り出したのは文月学園の女子の制服。

赤と黒を基調としたブレザータイプで、他校や大人のお友達にもかなり人気の高いマニア垂涎の逸品だ。

「……雄二、どうやって手に入れた。いや、どうでもいい。俺はお前を見守っているからな？」

龍星がかなり生暖かい目で雄二を見る。

というか、殆どの生徒が龍星と同じ目で雄二を見ていた。

「待て！コイツはムツリーニに手配して貰った物だからな!？」

「……………! (ブンブン)」

ムツリーニが首を振って否定する。

「……………どうでもいいが、俺が女装してどうするんじゃ？」

男として大いに構った方がいい気がするのは作者だけだろうか？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

どうやら、それが雄二の狙いようだ。

木下秀吉にはAクラスに双子の姉がいる。一卵性双生児かと思う程よく似ていて、違う箇所はテストの点数と話し方くらいである。

秀吉が彼女に化けてAクラスとして圧力をかけるといふ作戦のようだ。

「と、いう訳で秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……………」

雄二から制服を受け取り、その場で生着替えを始める秀吉。

「……………!! (パシャパシャパシャパシャッ!)」

ムツリーニが凄まじいスピードでカメラのシャッターを切る。

因みに、龍星、明久、ネオ・FFF団の面々は着替え始めると同時に後ろを向いた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

「さあな？俺にも良くわからん」

「おかしな連中じゃのう」

()(可笑しいのはお前達の認識だ!)()

龍星、明久、ネオ・FFF団の心は一つになった。

一見美少女の秀吉は己の容姿を理解していない節がある。

男として認めて貰いたいのには充分理解出来るが、目の前で着替えるのは勘弁して貰いたい。

(今度、西やんに直訴して秀吉専用更衣室を用意して貰おう)

龍星は心にそう決めた。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

雄二が秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

「俺も行くか」

明久と龍星が雄二達の後を追って教室から出て行った。

CクラスはFクラスからは結構離れている。

そのまま暫く歩き、Cクラスを目の前にして立ち止まる明久達。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

Aクラスの使者になりすます以上、Fクラスの雄二や明久達が同行するのは流石に拙い。

よって、明久達は離れた場所から様子を窺う事になる。

「気が進まんのう……」

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方ないのう……」

「悪いな。兎に角あいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前なら出来る筈だ」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達者である。勉強は苦手だが、他の面に抜群に秀でているのだ。

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ……」

溜め息と共にCクラスに向かう秀吉。

「雄二、秀吉は大丈夫なの？別の作戦を考えておいた方が……」

「多分大丈夫だろう」

「心配だなあ……」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

雄二が明久に向かって口に指を当てる。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえてくる。

『静かになさい、この薄汚い豚共!』

「流石だな、秀吉」

「ああ。これ以上はない挑発だ……」

雄二と龍星が呆けたように言う。

間違い無くこれでCクラスの敵意はAクラスに向かうだろう。

『な、何よアンタ!』

この高い声はCクラス代表の小山友香。ヒステリー女とも言われる。因みに根本恭二の彼女でもある。

『話しかけないで!豚臭いわ!』

『アンタ、Aクラスの木下ね?ちよつと点数良いからっていい気になつてるんじゃないわよ!何の用よ!』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!貴女達なんて豚小屋で充分だわ!』

『なっ!言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!?'
『どうやら小山友香の中では、豚小屋=Fクラスとなっているようである。』

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。丁度、試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから!』

『そう言い残し、靴音をたてながら秀吉はCクラスの教室を出て来た。』
『これで良かったかのう?』

秀吉はどこかスッキリした顔で明久達に近寄ってきた。

「ああ。素晴らしい仕事だった」

『キーッ!なによあの女!こうなったらFクラスなんて相手にしてられないわ!Aクラス戦の準備を始めるわよ!』

Cクラスから小山友香のヒステリックな声が聞こえる。どうやら上

手くいったようだ。だが、龍星と明久の胸に罪悪感が残る。

「作戦もうまくいった事だし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「了解」

明久達は足早にFクラスへ向かった。

あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、明久達は昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二の『敵を教室内に閉じ込める』との指示を遂行しようと明久達は行動するが、ここで一つ問題がおきた。

瑞希の様子がおかしいのだ。

本来指揮官である瑞希だが、今日は一向に指示を出さない。それどころか戦線に参加しないようにしているように見える。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

今現在指揮を執っているのは副司令の秀吉である。ここ数時間は雄二の指示通りにうまくいつている。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

押し戻された左側出入り口にいるのは古典の竹中教諭。

Bクラスは文系が多いので、強力な個人戦力で流れを変えなければ一気に突破される恐れが出てくる。

「瑞希ちゃん、左側に援護を！」

「あ、そ、そのっ……！」

瑞希は、戦線に加わらず今にも泣きそうな顔でオロオロしている。「だああっ！」

掛け声と共に明久は人混みを掻き分け、今にも突破されそうな左側出入り口に向けダッシュした。

そして立会人の竹中教諭の耳元で囁く。

「……ツラ、ずれてますよ」

「っ！！少々席を外します！」

明久の狙い通り、竹中教諭は席を外し少しの間が出来る。

「古典の点数が残ってる奴は左側出入り口へ向かえ！消耗した奴は補給に回れ！」

明久が戻ってくるまでに、龍星が周りのFクラスに指示を飛ばす。

「瑞希ちゃん、どうかしたの？」

明久は瑞希に声をかけるがどうも様子がおかしい。

「明久！アレを見る！」

龍星が前線を指差し叫ぶ。

「？」

明久が見ると、そこには卑怯者代表根本恭二が何かを持ってニヤニヤ笑いながら立っていた。

「根本君だよな？それがどう」あの野郎が持っている手紙を良く見る！……っ！！」

龍星の言葉に明久は根本の持っているモノを良く見る。

それは一通の手紙だった。

宛名には『明久君へ』と書かれているようだった。

「ふーん、成る程ね。そう言う事か」

明久は昨日の協定の話聞いた時からおかしいと思っていた。

あの根本恭二がそんな対等な条件の提案をしてくる事自体がおかしいのだ。

「瑞希」

龍星が感情を抑えた声で瑞希に語りかける。

「は、はい……？」

「具合が悪いみたいだからな。余り戦線には加わるな」

「そうだよ。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕と龍は用があるから行くね」

「あ……！！」

瑞希の声を無視して二人は駆け出す。

「あのクソヤロウ、やってくれるじゃねえか」

「面白い事してくれるね、卑怯者」

二人の怒りは既に頂点に達していた。

「根本恭二！」

「あの野郎、ブチ殺す！」

怒りのオーラを纏った二人はFクラスに向かって駆け出したのだった。

「俺（僕）達の大切な人に出す奴は容赦しねえ！覚悟しておけ、根本恭二いつ！！」

第9問（後書き）

遂に根本が龍星と明久の逆鱗に触れました。
果たして根本は五体満足でおわるんでしょうか？

キャラ設定

ネオ・FFF団。

龍星の影響を受けFFF団から離れた真に女性を大切にする者達。

団員は現在9人。団員の詳細は本編参照。

醜い嫉妬では動かず、女性を困らせる奴ら（主にFFF団）を相手にする自警風紀集団。

因みに本編にもある通り、こいつらには彼女が出来ます。

後、この作品の明久は此方の筆頭になります。

今回もネタはハリセンのみ。

ハリセンは龍星の代名詞です。

第10問（前書き）

VSBクラス戦？決着です。

逆鱗に触れた根本のその後も書かれた第10問。それではどうぞ！

それにしても今回はヤリスギタ……………（汗）

第10問

「バカテスト/生物」

【第10問】

問 以下の問に答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希・瀬川芹香・榊龍星の答え

『(1) 脂質 (2) 炭水化物 (3) タンパク質 (4) ビタミン (5) ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さんに瀬川さん。優秀ですね。意外ですが榊君もお見事正解です。

吉井明久の答え

『(1) 脂質 (2) 炭水化物 (3) タンパク質 (4) ビタミン (5) 空気』

教師のコメント

? 空気は確かに大切ですがこれは栄養素を問う問題ですので残念ですが間違いです。しかし、意外とまともな間違いで先生驚きです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経と言う。また、十五歳になっても初潮が無い時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮が無い時を原発性無月経といい……』

教師のコメント
保険体育のテストは一時間前に終わりました。

「雄二いつ!」

「うん?どうしたって、なんでそんなに怒ってんだお前ら!」

怒りのオーラを纏った二人が教室に飛び込むと、雄二はノートに何かを書き込んでいた。

「頼み(話)がある」

「落ち着け。……取り敢えず、聞こうか」

二人の表情は真剣そのもの。その表情から察したのか雄二も真面目な顔になる。

「雄二、さっきの女子の制服まだあるか?」

「それと、根本君が着ている制服が欲しいんだ」

「……お前らに何があつたんだ?」

「なあに、面白い事思いついたのさ」

「それには根本君が着ている制服が邪魔なんだ」
龍星と明久が黒い笑みを浮かべる。

「面白い事?……成る程、確かに面白いな」

雄二が少し考えて何かに気付いた後、龍星達と同じ笑みを浮かべる。
「いいだろう。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやる。で、それだけか?」

龍星と明久が顔を見合わせ、次の瞬間土下座する。

「お、おい!何して……」

「頼む、雄二!何も聞かずにこのBクラス戦から瑞希を外してくれ!」

「僕達に出来る事は何でもする!だから頼む!この通りだ!」

雄二は土下座する二人を見て、何かを考える。

「頭を上げる。お前達がそこまでするんだ。その頼みは聞いてやる」

「雄二、すまん」

「恩にきるよ雄二」

「ただし、条件がある」

頭を上げる二人に雄二が言い放つ。

「明久、お前は本来姫路がやる筈だった役割をお前がやれ。どうやってもいい。必ず成功させる」

「勿論やって見せる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ。龍星、お前はBクラスの近衛部隊を全滅させる。何が何でもだ」

「古典なら何とかなるな。引き受けた」
龍星も頷く。

「所で、雄二。僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「龍星だけだ。しかも、Bクラスの教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……難しい事言ってくれるね」

これは厄介な事である。

今の戦闘はBクラス前後の扉の二カ所で行われており、場所の条件から常に1対1となっている。そんな中で教室の奥に陣取っている根本に近づくには圧倒的な個人の火力が必要になる。

そう、例えば瑞希のような。だが明久にはその火力がない。

「もし、失敗したら？」

「するな。必ず成功させる」

雄二はいつになく強い口調で明久に告げる。どうやら失敗はそのまま敗北に繋がると見て間違い無いようだ。

「それじゃ、二人共うまくやれよ」

雄二が教室を出るために立ち上がる。

「どこに行くんだ？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」
雄二は教室を出る直前で立ち止まる。

「明久、お前は確かに点数は低いが、秀吉やムツリーニや龍星のように、お前にも秀でていいる部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「……雄二」

「うまくやれよ。計画に変更はない」

そう言い残し、雄二は教室を後にした。

「俺も行く。頑張れよ明久。お前の花道は俺が切り開いてやる！」
そう言つて龍星は明久の肩を叩き、戦場へと戻つて行つた。

教室を出て走つている途中で教室に戻る近藤を見つけた龍星は、近藤に一つ頼み事をする事にした。

「近藤！ちよつといいか？」

「兄貴、どうしたんですか？」

「頼みがある。聞いてくれるか？」

「この近藤吉宗、兄貴の頼みなら喜んでお引き受け致します」

「ありがとう。Bクラスの教室に日本史の教師を連れて来て欲しいんだ」

「了解！待っていて下さい兄貴！」

そう言い残し、近藤は走つて行つた。

暫くしてBクラス教室前で龍星は一騎当千の立ち回りをしていた。

「おおおおおっ！！」

「兄貴に続けーっ！」

「ヒヤッハーツ！」

龍星の召喚獣が刀を振るう度に敵召喚獣の血が飛び散る。そして、

遂に龍星はBクラス内に突入した。

突入と同時に召喚獣が消える。

「誰かと思えば、筋肉バカの榊じゃないか」
ドンドン！

「お前らしい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に集まりやがって。暑苦しい事この上ないっての」

ドンドンドンドン！

「どうした？軟弱な卑怯者代表様はそろそろギブアップか？」

龍星は今にもへたり込みそうな足に力を入れて、根本を挑発する。

「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

龍星の後ろから雄二の音がする。振り返ると本隊を連れた雄二がそこにいた。

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子悪そうだぜ？」

龍星の額に青筋が浮かぶ。

「……お前から相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」
ドンドン！

「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？それがFクラスの事なら、もうすぐお前が負け組代表だな」
ドガッ！

「……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

ドガッ！

「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「雄二、一旦引け！体制を立て直せ！」

「どうした？散々吹かしておきながら逃げるのか！」

龍星達にBクラスの近衛部隊が迫る。だが、その時である！

「兄貴イイっ！」

近藤の声がBクラスの出入り口から響く。

「お待たせしました！」

振り返ると近藤が日本史の教師を引き連れてBクラス内に入ってきた。

「良くやった、近藤！先生、Fクラス榊龍星！Bクラスの近衛部隊に日本史勝負を申し込む！試獣召喚！」

龍星の召喚獣が再び戦場に現れる。

「後は任せたぞ。龍星、明久」雄二の言葉に応えるように、

『だああーっしやあーっ！』

ドゴオッ！

豪快な音を立てて、Dクラスとの壁が崩壊した。

「くたばれ、根本恭二いっ！」

明久が根本恭二を討つ為に召喚獣と共に走り出す。

「ひっ！お、おい！近衛部隊！俺をまもっ」そいつは無理な相談だな」なっ！」

龍星の声に根本が見ると龍星の召喚獣の武器が真っ赤に燃え上がっていた。

「さて、近衛部隊の諸君。恨みはないが消えてくれ」

龍星の召喚獣がBクラス近衛部隊の召喚獣達に向かって走り出す。

「爆炎収束！」

龍星が叫ぶとそれまで燃え上がっていた炎が刀に収束されていき、そこには真っ赤に染まった刀身があった。

「おおおおおっ！！！」

一人また一人と近衛部隊が倒されていく。

「秘剣！百火繚嵐・乱れ咲き」

最後の一人が倒れた時、近衛部隊の召喚獣達が炎に包まれる。それはまるで炎の華が咲き乱れているようだった。

「受け取れ、明久あつ！」

龍星の叫びと共に召喚獣が刀を明久に向けて投げる。

それは引き寄せられるように根本に駆け寄る明久の下に飛んでいった。

「先生、Fクラス吉井明久がBクラス根本恭二に日本史勝負で挑みます！試獣召喚！」

明久の召喚獣が現れ、飛んできた刀を掴み取る。

「ひっ！さ、試獣召喚！」

現れる根本の召喚獣。

『Fクラス吉井明久VS Bクラス根本恭二
日本史98点VS 89点』

「な、なんでそんな点数なんだよ！」

根本が慌てて叫ぶ。

「僕の親友が誰だと思ってるの？」

明久は召喚獣に刀を上段に構えさせ、

「チエストオオオオツ！」

一太刀で真つ二つに切り捨てた。

この時点で試召戦争はFクラスの勝利に終わったが、明久と龍星は根本に駆け寄ると、

「死にくされ！この腐れ外道があつ！」

根本の顔に拳を叩きこんだ。

悲鳴をあげる事無く根本は吹っ飛び、ロッカーに頭から飛び込んで気絶した。

十分後、漸く目覚めた根本を引きずり出し、雄二は告げる。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表

？」

「……」

床に座り込んだ根本。さつきまでの強気が嘘のように大人しい。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に、ざわざわと周囲の者達が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。此処がゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「此処はあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

「……条件はなんだ」

力無く問う根本。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

雄二の言い様に皆が頷く。

無論、Bクラスの生徒達もだ。

「そこで、お前からBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。

すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。雄二の当初の計画ではそれだけだったのだが。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、先程秀吉が着ていた女子の制服。

「ば、馬鹿な事を言うな！この俺がそんなふざけた事を……！」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの生徒達の温かい声援。これを見るだけで根本が今までど
ういった行動を取ってきたかわかるというものだ。

「んじゃ、決定だな。さて、龍星。後は好きにしていーぞ」

「へ？」

根本が間抜けな声をあげる。

龍星は悪魔の微笑みを浮かべながら、根本に近付いていった。

「さあ〜て、根え本お。覚悟はいいかあ」

心底楽しそうな龍星。

「ま、待て！さつき殴られただろ！」

「あんなもんですむ訳ないだろ？一年の時、言った事忘れたか？」

実は根本は一年の頃、芹香にしつこく迫った拳げ句、断られて逆恨
みをし芹香に嫌がらせをして龍星にボコボコにされた事がある。そ
の時、龍星は『次に俺の大切な奴に手を出したら潰す』と言われて
いたのだ。

「お、覚えている。それが今回の事と何の関係が！」

「お前知らんの？瑞希は俺の幼なじみだ」

根本はその言葉を聞いた瞬間、真っ青になった。

漸く自分が取った行動が目の前の男の逆鱗に触れた事がわかったの
だ。

「ま、待て！いや、待って下さい！今回は俺が悪かった！この通り
謝る！」

根本は必死に土下座をして謝った。一年の頃でさえ、ボコボコにさ
れて一週間程痣が消えなかったのだ。二回目となる今回は何をされ
るかわかったもんじゃなかった。

「ふむ、なら雄二にならないチャンスをやろつ」

龍星の言葉に根本の顔に希望の光が浮かぶ。

「今この場にいる皆に聞いて、お前を許して欲しいという奴がいた
ら許してやろつ」

が、次の瞬間地獄に真つ逆様の気分になった。

「さて、BクラスとFクラスの全員に聞く！この根本恭二と言う男、卑劣な手で姫路瑞希を苦しめ悲しませた男だ！俺はコイツをどうすればいい？」

龍星がその場に居た全員に問う。

Fクラス

「ヒヤッハーツ！汚物は消毒だぁーっ！」

「待て！火炎放射器はヤバイ！ここは生皮はいで鍋で煮るべきだ！」

「いや、窓から紐無しバンジーだろう？」

他にも様々な案がでる。どうやらこの時ばかりはFFF団もネオ・

FFF団も関係ないようだ。

Bクラス

「さいつてえ！」

「この腐れ外道！」

「さっさと逝けよ！」

他にも色々言われていた。やはりこの男、人望皆無である。

「いやぁ、流石に哀れだわ」

「……」

無言で泣き続ける根本に哀れみの目を向ける龍星。

「んじゃお仕置き行ってみようか？」

そう言つて、根本の両足を掴み股間に足を置く龍星。

「え？まさか、コレって」

根本の予想大当たり。

「秘技の4、アンマススペシャル！」

ゴガガガガガッ！

「あ　　っ！！」

龍星の足が高速で動き、悶絶する根本。伝統的な男の仕置きである。

「龍！もっと速く！もっと強く！」

明久が煽ると同時に、

『あつにつき！あつにつき！』

Bクラス中で巻き起こる兄貴コール。

「O.K.！my friend！」

龍星は何故か流暢な英語で応え足の速さをアップする。

ドゴゴゴゴゴゴゴゴツ！

威力も上がる。

「W W W W R R R R R R Y Y Y Y Y Y！」

根本の悶絶の声もあがる。

「おらおらおら！」

「ノオオオオオツ！新たな扉がああああつ！」

この後、約十数分このお仕置きは続く。

因みにこの時根本は確かに己の中で新たな扉が開いたのを感じたという。

「フィニッシュ！」

ズンツ！

「エクスタシイイイ！」

根本が気を失う。が、その顔は恍惚としていた。

「何か潰れたよーな感触があつたが、まあいいか！」

龍星は額に浮かんだ汗を拭き取り、やり遂げた漢の笑顔を浮かべて呟いた。

この後、予定通りに根本に女子の制服を着せAクラスに連れて行くBクラス生徒が確認されたが、根本は何故だか女のような仕草だったという。

更にこの後、瑞希に手紙を返しに行った明久が瑞希に抱き付かれ優しく抱き返していたのをFFF団が発見し、襲撃をかけようとしたがネオ・FFF団に返り討ちにされた。

そして、次の日。

欠伸をしながら登校する龍星と明久の前に一人の女生徒が現れる。

「おはよ榊君に吉井君」

ドサドサ

「あら、鞆が落ちたわよ？」

「「ね、根本（君）？」」「

そう、今龍星達の前に居るのは女子の制服を着て化粧をした根本恭二だった。

「ん？ああ、この格好の事ね？」

コクコク。

龍星達が頷く。

「実はあの後、覚醒めちゃったのよ。」

さらりと言う根本。

「あっと、遅刻しちゃう！それじゃあね」

走っていく根本。

「ねえ龍」

「言うな」

榊龍星今年二十歳。

男を一人、ニューカマーに変えた高二の春の事だった。

第10問（後書き）

と、言う訳でニューカマー&Mというダブルに覚醒めた根本でした。今後根本はニューカマー根本として活躍(?)します。

ー今回のネター

某世紀末救世主マンガから拳王様の部下モヒカンの台詞『ヒヤッハ
ーッ！汚物は消毒だぁーっ！』

某奇妙な冒険からDIO様の『WWWRRRRRRYYYYY！』で
す。

ハリセンネタは無し。

第11問(前書き)

VSAクラス戦序章です。

オリジナル展開混じってます。では、どうぞ

第11問

「バカテストノ歴史」

【第11問】

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

□（ ）年キリスト教伝来

霧島翔子・姫路瑞希・瀬川芹香・榊龍星・吉井明久の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

壇上の雄二が何時も一緒にいる明久でも覚えの無い程、素直に礼を言った。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「キモいぞ?雄二」

「やかましいぞ、龍星!明久、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

要らない事を言う龍星を怒鳴り、明久に答える雄二。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すれば良いってもんじゃないという現実を、教師共に突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっている。明久はそんな気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

明久、龍星、瑞希、美波、秀吉、ムツツリー二は先日の昼食時に聞いた話だったので驚きはしなかったが、Fクラスの皆はかなり驚いたようで、教室中にざわめきが広がる。

『どういう事だ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と教卓を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「馬鹿の雄二が勝てる訳なああっ!?!」

明久の頬をカッターが掠める。

「次は耳「危ないわ、ドアホ!」ぐはっ!」

カッターを投げた雄二に龍星がハリセン（お前は忍者か!?!と書いてある）でしばき倒す。

「いっつゝ。ま、まあ、明久の言う通り翔子は強い。まともなやり

合えば勝ち目はないだろう」

「そこで認めるなら明久にカッター投げつけんじゃねえよ」

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まとも
にやり合えば俺達に勝ち目は無かった」

龍星のツッコミをスルーして、雄二は話を進める。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手
に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

最初は皆勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた雄二の
言葉を、無理な話に思えても、否定する人間はもうこのクラスには
いないだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に
見せてやる」

『おおおーっ！』

既に皆の意志を確認するまでも無く、全員が雄二を信じていた。

（過去に神童って事は今は違っつて事だよな？大丈夫なのかねえ？）
ただ一人、龍星を除いて。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定す
るつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりなんじゃ？」

「日本史だ」

秀吉の疑問に雄二は答えた。

「ただし、内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点
の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生程度のレベルで百点の上限あり。

その条件だと、満点が前提となり、ミスした方が負けるといった注
意力勝負となるだろう。確かにAクラスと正面きつての試召戦争よ
りかはFクラスに勝ち目はある。

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうになったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「ブランクがあるお前が霧島ちゃんに勝てんのか？」

確かに勝ち目は少しはあるだろうが、それにしたって分の悪い賭けになるだろう。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？幾ら何でも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「??それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや、アイツなら集中していなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「雄二。あまり勿体ぶるで無い。そろそろタネを明かしても良いじやろう？」

クラスの皆が秀吉の言葉に頷いた。

「ああ、済まない。つい前置きが長くなった」

かぶりを降って、雄二は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ。その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

「単純というと 何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

大化の改新の年号は基礎的な問題と言える。あの霧島翔子がこんな簡単な問題を間違えるとは思えなかった。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久だつて間違えない」

雄二の言葉に頷く明久。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは仲が良いんですか？」

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

雄二が言い切った直後、FFF団が動いた。

「総員、狙えええっ！」

FFF団会長須川の号令と共にFFF団員達が上履きを構えた。

「なっ！？何故須川の号令で一部を除いた全員が上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

「遺言はそれだけか？……待てムツリーニ。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「……了解」

雄二に靴下を押し付けようとしていたムツリーニを須川が止める。

「ま、待て！それを言ったら龍星はAクラスに彼女が居るんだぞ！」

「……なっ、なんだってーっ！？」

雄二の一言が更なる混沌をFFF団にもたらす。

「あ、兄貴！本当なのか！？」

「ん？本当だぞ。っていうか康太、お前は知ってるだろうが」

「……黙れ、男の敵」

ムツリーニにがまるで親の仇を見るのような目で龍星を睨む。

「まさか、兄貴がS級異端者だったとは！皆、いつでも殺せる坂本は後回しだ！まずは兄貴を殺せええっ！」

須川の号令でFFF団員が龍星に殺到する。ネオ・FFF団と明久は龍星を護ろうとするが、

「明久、ネオ・FFF団は瑞希、島田、秀吉を護れ。此処は俺だけ

で充分だ」

制服のボタンを外しながら龍星は言い放ち、明久は瑞希を、ネオ・FFF団は美波と秀吉を護る為に動いた。

「ふっ。」

軽く笑うと龍星は上着に手をかけ、一気に脱いだ。

「こんな事もあるのかと、鍛えに鍛えたこの身体！」

そこにはガツシリとした西村教諭並みの筋肉を惜しみなく披露する（作者注・因みにランニングシャツは着てますよ？）龍星がハリセン（右手の芹香政宗はさあ、お前らの罪を数えろ！左手の芹香村雨は絶望がお前らのゴールだ！と書いてある）を両手に構えて立っていた。

「さあ、かかってこい！」

「「「うおおおおおおつ！」「」「」

~~~~乱闘中~~~~

「お前ら弱過ぎるぞ？」

数分後、無傷の龍星と倒れ伏す馬鹿達の姿があった。

「さて、残るは康太だけか」

「……………くっ！」

ムツツリーニは両手にカッターを持って龍星と対峙していた。

「龍、ムツツリーニは僕に任せてよ」

明久が龍星の前に出る。

「よし！任せたぞ明久」

龍星が明久に後を任せて下がる。

「……………舐めるな、明久」

「ムツツリーニ、君には弱点がある。それを何とかしないかぎり君は僕には勝てない」

明久とムツツリーニはジリジリと動きながら互いを牽制する。

「明久君……」

「アキ……」

「明久、無事に戻ってくるんじゃないぞ?」

瑞希、美波、秀吉(!? )の願いを背に明久が動く。

「ムツツリーニイイイイッ!」

「……………明久!」

2人が共にジャンプして空中で交差する。

タツという音と共に、着地する2人。

「……………」

明久の頬から一筋の血がツツと流れる。

「……………無念(ブシャアアアアアッ!!)」

一瞬後、鼻から大量の鼻血を噴きながら倒れるムツツリーニ。

「ムツツリーニ……………君は余りにも女の子に耐性が無さ過ぎる。それ

が、君の弱点だ」

明久が流れる血を拭きながら立ち上がる。

その手には一枚の写真が握られていた。

それは小さい明久と明久より少し大きい女の子が下着姿で寝ている

写真だった。

「て言うか、何でそんな写真持っておるんじゃない!」

秀吉が明久を問い詰める。

「明久君、小さくて可愛いです」

瑞希がその写真を見て頬を染めて微笑む。

「横でアキに抱き付いて寝てるの誰よ!」

「イタタタタッ!ちよ、美波!僕の腕はそっちに曲がらないよ!」

美波は顔を赤くして、明久に逆関節を極める。

「ん?こりゃ、玲さんだろ?」

龍星(制服着用済み)が写真を見て眩く。

「そうですね。この女の子、明久君のお姉さんの玲さんです。」

瑞希が龍星の指摘に頷く。

「えっ？アキってお姉さんいたの？」

「初耳じゃの。して、何故龍星殿と姫路は知つとるんじゃ？」  
美波と秀吉が2人に問いかける。

「俺達は小学校の頃からの付き合いだからな」

「明久君のお家にも何度か遊びに行った事ありますし」  
笑って答える龍星と瑞希。

「因みに写真は、瑞希ちゃんが僕の小さい頃の写真が見たいって言うたの思っだしてさ、アルバム持ってきてたんだ」  
そう言っつて写真をアルバムに納める明久。

「おーい、もういいか？」

すっかり、忘れ去られていた雄二だった。

「まあ、色々あつたが……兎に角だ、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

漸く起き上がつてFFF団と輸血処理を終えたムツツリー二が睨み付ける中、話を進める雄二。

「アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

一度覚えた事は忘れない程の頭の良さが、今回は仇となる。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ！そうしたら俺達の机は」

『システムデスクだ！』

Fクラスの生徒達が声を揃えて立ち上がる。

雄二は頷き、Fクラス首脳陣（龍星、明久、美波、瑞希、秀吉、ムツツリー二）を連れてAクラスへと赴き、宣戦布告を行った。それに対応したのはAクラスの木下優子、秀吉の双子の姉である。その後、雄二は代表同士の一騎打ちの提案を出す。

優子は渋りながらもその提案を受けるが、優子もお互い7人ずつ選び、一騎打ち七回の内、先に4勝した方の勝ちという提案を出した。

雄二は承諾するも、科目は決めさせると言い、優子は悩むがAクラス代表の霧島翔子が条件付きながらそれを承諾した。翔子の出した条件は『負けた方は何でも一つ言う事を聞く』という物。優子も七回の勝負の内四回はFクラスが、三回はAクラスが科目を決めるといふ妥協案を提示。雄二はそれを飲み、交渉成立となった。

その日の午前10時。

遂に、Fクラス対Aクラスの一騎打ち七回勝負が幕を上げた。

## 第11問（後書き）

次回はバカテストを休んで本編を書こうと思います。

次回、V S Aクラス戦？。

今回やりたかったネタ

・仮面ライダーWより決めゼリフネタ（決めゼリフをハリセンに載せて）

・Gガンネタ「こんな事もあるつかと鍛えに鍛えたこの身体」少しゼリフ回しは変えてますがね。

因みにムッツリーニは芹香の事を忘れてたのではなく、黙ってただけです。一応、龍星の事を親友と想ってるんですよ？ウチのムッツリーニ君は。

第12問(前書き)

VSAクラス戦?です。  
オリキャラ出しました。  
では、どうぞ

## 第12問

「では、両名共準備は良いですか？」

この日の対Aクラス戦は明久達がここ数日の試召戦争で何度も世話になっていて、Aクラス担任かつ学年主任の高橋洋子女史が立会人を務める事になった。

「ああ」

「……問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。此方の方が広く、腐った畳のFクラスでは締まらないからだ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

高橋女史の声に、Aクラスから秀吉の姉、木下優子が動く。

「アタシから行くよっ」

対するFクラスからは、

「儂がやるっ」

その弟、秀吉が動いた。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ、姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラス小山友香……それはBクラス戦の時、散々優子に扮する秀吉が罵倒した相手である。

「じゃーいいわ。その変わり、ちよーとこっちに来てくれる？」

にっこりとももの凄く良い笑顔で秀吉を連れて行く優子。

「うん？儂を廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

優子に連れて行かれる秀吉。

「なあ、何かドナ ナが聞こえてこねえか？（冷汗）」

龍星の言葉に頷く両クラスの生徒達。

以下、仲睦まじい姉弟の会話。

「姉上、勝負は どうして儂の腕を掴む？」

「ねえ、秀吉？アンタCクラスで何してくれたのかしら？どうしてお姉ちゃんがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性を儂なりに推測してアルゼンチンバツクブリーカーとは意外じゃっ!？」

ゴキッ

「あ、姉上！ちがつ……！その関節はそっちには曲がらなっ……！」

メキヨッベキベキベキッ

「あ つ……!？」

以上、仲睦まじい(?) 姉弟の会話終了。

ガラガラガラ

扉を開けて優子が教室に戻ってくる。その頬に赤い液体らしきモノが付着しているのはきつと気のせいだろう。

「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。代わりの人出してくれる？」

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い………」

「そうですか。それではまずAクラスが一勝、と」

高橋女史がノートパソコンを操作すると、壁一面の巨大ディスプレイに結果が表示される。

「Aクラス木下優子VS Fクラス木下秀吉

生命活動WIN DEAD」

クイクイ。

「ん？どうした、芹？」

「……………？（りゅうくん、政宗貸してくれる？）」

「あいよ」

龍星は懐からハリセンを出して芹香に渡す。

「……………（ありがと）」

芹香は龍星からハリセンを受け取ると、優子に向かって歩き出す。  
スタスタスタ。スパアアアンツ！！

「痛いっ！ちよ、芹香？」

「……………！！（どうして、ゆうちゃんは何時も秀くん虐めるの！！）」

芹香は優子にハリセン（虐め反対！と書いてある）の一撃を見舞う。  
それはAクラスには初めての、Fクラスには見慣れた光景である。

「だ、だって……………」

「……………！！（だってじゃない！ゆうちゃん、ちよっとそこに座りなさい。みっちりとお説教です！）」

珍しく怒った芹香に逆らえず、芹香の前に座る優子。

お説教開始。

~~~~~お説教中~~~~~

お説教終了。

30分みっちりとお説教を受けた優子だった。

「お説教は終わりましたね？では、次の方どうぞ」

高橋女史は今の出来事をすんなり受け入れて、次の対戦者を呼んだ。

「高橋女史、その前にちよっといいか？」

「はい、何でしょう？」

「今の木下姉弟の対決？はどっちが科目指名した事になるんだ？」

龍星の問い掛けは当然だろう。

「あゝ、こつちでいいわ。流石にアレは酷かったし」

優子が痺れた足をさすりながら、Aクラスのメンバーを見まわして言った。Aクラスのメンバー達も頷いていた。

「では、Aクラスが科目指名をしたと言う事にします。それでは、次の対戦者を」

高橋女史が号令を出す。

「私が出ます。」

「僕が行くよ。良いよね雄二？」

Aクラスからは佐藤美穂、対するFクラスは明久が前に出た。

「明久、2連敗は避けたい。必ず勝て！」

「負けるつもりで勝負に挑まないよ」

雄二の言葉に明久は頷いて返す。

「科目はどうしますか？」

「物理でお願いします」

高橋女史の言葉に明久が答える。

「物理は私得意なんですよ？」

「え、そうなの？……まあいいや、例えどんな教科でも僕は勝たなきゃいけないだし」

2連敗はFクラスにとつて避けなければならぬ事。ならば、どんな教科でも明久は勝たなければならない。

「それでは、物理フィールド展開。勝負を開始して下さい」

「「試獣召喚！」」

その声に応え現れる召喚獣達。

『Aクラス佐藤美穂VS Fクラス吉井明久
物理389点VS78点』

「アキ、何であんな点数取れてるの!？」

「明久君、前から私と芹香ちゃんや龍兄と一緒に勉強してたりしてましたから」

美波の驚きに瑞希が答える。

「さて、コイツは面白いぜ。何せ点数差はあっても、召喚獣の扱いに慣れてねえAクラスの生徒に対し、明久は常日頃から雑用で召喚獣の扱いに慣れていている観察処分者だ。この勝負どう転ぶかわからんぜえ?」

龍星が腕組みしながら、明久を見守る。

「じゃ、行くよ佐藤さん」

明久が召喚獣を操作して、間合いを詰める。

「このっ」

美穂も召喚獣を操作するがやはり慣れていない為か、若干もたついている。

「えいつ!」

「きやつ!」

明久の召喚獣の一撃が美穂の召喚獣に決まる。

美穂の点数が30点減り、359点になる。

「はあっ!」

「おっと」

美穂の攻撃をひゅるりと避ける明久。

「一撃当たれば決まるのに、何ですかその回避力は!?!」

美穂が続け様に攻撃を繰り返すが明久はひゅるりひゅるりと避けてはカウンターを当てると言う行動を繰り返して行っていた。

「メタル ライムか、アイツは」

「あの回避力なら、どっちかというとはぐメタルじゃない?」

雄二の言葉に美波が返し、その場にいた全員（龍星、芹香、瑞希は除く）が頷いた。

「失礼な!そんなに弱くないやい!」

明久がみんなにツッコミを返す。

因みに今の間にも攻防戦は続いており只今の点数は、

『Aクラス佐藤美穂VS Fクラス吉井明久
物理150点VS 52点』

と、なっていた。

「あれ、アキの点数が減ってる?」

「避けてはいてもかする位したんだろ?」

「……………」

美波と雄二が話していると、霧島翔子が二人を見て睨んでいた。

「…………? (しーちゃん、駄目だよ?)」

「…………雄二…………」

芹香が翔子の制服の裾を、皆に気付かれないようにクイクイと引っ張り注意を促す。

翔子は芹香の注意を受け入れ、雄二と美波から目を逸らす。

「はあっ!」

「よっと」

ブンツ! ひゆるりバキッ!

先程からのカウンター攻撃が効いており、美穂の点数は明久を下回る程に下がっていた。

『Aクラス佐藤美穂VS Fクラス吉井明久
物理25点VS 31点』

「そんな!? 美穂がここまで手こずるなんて!」

Aクラスの誰かがそんな事を叫ぶ。

「…………吉井君。ごめんなさい」

美穂は召喚獣の動きを止めて、明久にいきなり頭を下げた。

「うえっ!?! い、いきなりどうしたの? 佐藤さん」

いきなりの美穂の行動に慌てた明久は美穂に問いかける。

「私は、はつきり言ってあなたを見下していました。観察処分者な

んかに負ける筈が無い、と」

「……………」
「でも、それは間違いでした。あなたは強い。私なんかよりもずつと」

「それは買い被りだよ、佐藤さん。僕は観察処分者だから、皆より少し召喚獣に慣れていただけだよ。」

「そんな事はありませんよ吉井君。……私はこれから最後の攻撃を仕掛けます。」

そう言つて美穂は召喚獣に武器を構えさせる。

「受けていただけますか？」

「勿論だよ。僕も避けない。真つ向勝負だ」

美穂の挑戦を受け、召喚獣に木刀を構えさせる明久。

「ありがとうございます。では、行きます!!」

「行くぞ!」

走り出す二人の召喚獣が互いの武器を構えて攻撃を繰り出す。

「ハアアアアツ!!」

明久と美穂の気合いが同時に吐き出され、召喚獣達が動きを止める。

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

そして、二人の召喚獣が同時に消えた。

『Aクラス佐藤美穂VS Fクラス吉井明久』

物理0点VS0点』

「引き分け……………だね」

「吉井君」

その声に明久が美穂に顔を向けると美穂は明久に向かって手を差し出していた。

「最後の勝負受けていただきありがとうございました。」
「此方こそ、良い勝負だったよね」

そう言つて差し出された美穂の手を取り、握手をする明久。
その瞬間、双方から拍手が鳴り響いた。

『良くやっただぞ！吉井っ！』

『明久君、カッコイイです！』

『アキ、良く頑張ったわね！』

『良くやっただ！』

『美穂、ナイスファイト！』

良い勝負をした二人を讃える拍手の中、明久と美穂は互いの仲間の下に戻った。

(姫路さんの言う通り、ホントにカッコ良かったですよ？吉井君)
美穂は少し頬を染めて内心そう思いながら、戻っていった。

「只今の勝負は引き分けです。では、次の対戦者前に」

高橋女史の声に、Aクラスから一人の女生徒が前に出る。

「此方からは私が参ります。」

龍星はその女生徒に見覚えがあつた。そして思い出した瞬間、顔を驚きに染めた。

「お、お前白姫か！な、何でお前が文月学園に居るんだ！？」

「お久しぶりですわね、『お兄様』？質問の答は2年の初めに編入してきたからですわ」

『『『お兄様！？』』』

全員が驚きの声を上げる。

「ちょ、龍、妹居たの！？」

「初めて知りました……」

『兄貴っ！紹介してくれ！』

そんな、クラスメイト達の声の中、白姫と呼ばれた女生徒は龍星に近づいて行く。

そして、

「わうん おにいさまああん！お会いしとうございましたああん

(パタパタ)」

「だあああつ！離れんかい！」

と、犬耳と犬尻尾ハスキータイプが生えた挙げ句デレデレになって龍星に飛び付く白姫と、本気で逃げる龍星という双方のクラスメイト達にとって珍しい光景が、其処にあった。

数分後。

「こほん、先程は失礼致しました。榊龍星の従姉妹で榊白姫と申します。以後、お見知りおきを」

正気を取り戻した(後ろからこっさり芹香がハリセン(りゅうくんは私の！と、書いてある)を叩き込んだ)白姫が顔を赤くして、Fクラスの皆に挨拶をした。

「そして、芹香さん」

白姫が芹香に向き直る。

「……………？(な、なに?)」

龍星の背中から顔を出して白姫に言う芹香。

「これからは……………お姉さまって呼びまして宜しいかしら?(キラキラ)」

再び、犬耳犬尻尾(因みに尻尾を思いっきりブンブン降っている)が生えた白姫がオメメをキラキラさせながら芹香に聞いた。

「……………？(な、何で?)」

「あら、だってお兄様のお嫁さんになられるんでしょ？だったら、私にとつてもお姉さまみたいなものですわ」

白姫は爆弾を投下した。

爆弾は破裂した。

『『お、お嫁さん〜っ！』』

「……………！(にやあああっ！)」

真つ赤になつて龍星の背中に隠れる芹香（猫耳猫尻尾付き）に白姫は近寄つて抱き付いた。

「……………！？（ふみやあああつ！？）」

「私、嬉しいんですの。やっとお兄様に愛する方が、そしてお兄様を愛して下さる方が現れて下さつたんですもの」

芹香を抱き締めながら、白姫が一筋の涙を流す。

「……………（しろちゃん、りゅうくんのお父さんの事……………）」

「勿論、知つてますわ。あんな下衆でもお父様の兄、私の叔父ですもの」

白姫は芹香を離し、目を見つめる。

「これからお兄様をお願いいたしますわ。芹香お姉さま」

そして、深々と頭を下げた。

「……………（此方こそ、お願いします）」

芹香も頭を下げる。

「はい さて、吉井君、姫路さん、あなた方のお話も伺っていますわ」

そう言つて、白姫は二人に狙いを付けて勢い良く飛び付いた。

「うわっ！」

「きゃっ！」

「くうくん お二人共、お兄様と仲良くしていただきありがとうございます」

白姫は倒れ込んだ明久と瑞希にパンツ丸見せ状態で抱き付いて、礼を言う。

「……………… 売れる！？（パシャパシャ！）」

ムツツリーニが鼻血を出しながら、指が擦り切れる程のスピードでシャッターを切る。

「売るな！撮るな！このスケベ野郎！」

龍星がハリセン（このドスケベがっ！と書いてある）でムツツリーニをシバいた。

第12問（後書き）

あれ〜？美波の対決まで書くはずだったのに、どうしてこうなった？

キヤラ設定

さかきしほひめ
榊白姫

オリキヤラ。

龍星の従姉妹で見た目クールな甘えん坊。

口調はお嬢様言葉で話す。

芹香がにゃん娘なら白姫はワン娘。

すらりとした長身で胸は翔子より少し小さい位。髪は薄い青で肩までのショートカット。

嬉しい事があると犬耳と犬尻尾が生える。

尚、この状態（ワン娘モード）になると前後不覚となり、平気でパ
ンツ丸見せ状態になったりする。

人間大好きというよりも、龍星の周りの人大好き。明久、瑞希、芹香は言わずもがな、果てはネオ・FFF団、ムッツリーニ、美波、雄二、秀吉にも抱き付く。

因みに幽霊や妖怪と言った所謂おばけの類がまるで駄目。

幼い頃に散々父親に脅されて以来、その手の話を聞くとトラウマで
幼児化するようになった。

因みに幽霊や妖怪と言った所謂おばけの類がまるで駄目。

幼い頃に散々父親に脅されて以来、その手の話を聞くとトラウマで
幼児化する。

尚この後、文化祭編にてネオ・FFF団近藤吉宗とくっつく予定。

身長・165cm

体重・42kg

3サイズ・上から81・60・78

召喚獣の装備

赤い武者鎧に白い袴。二本の十文字槍。バサラの幸村装備。

腕輪の能力

氷結・武器に氷を纏わせて切ると相手が凍り付く。

細かい氷をショットガンのように打ち出すことができる。

白姫が自重しません。でも、こういうキャラは動かしやすいです。

また、白姫は美人です。だから、美波に抱き付けばキレた美春がフオークを投げながらやってきます。雄二に抱き付けば、翔子が嫉妬します。瑞希に抱き付けばムツツリー二がやってきます。ムツツリー二に抱き付けば、ムツツリー二が鼻血を吹いた拳げ句、愛子がムスツとします。秀吉に抱き付けば、FFF団が喜びます。その後、ネオ・FFF団にFFF団が殲滅されます。近藤吉宗に抱き付けば、ネオ・FFF団や明久達が祝福します。……………あれ？やっぱり近藤以外だと、白姫災難しかないよーな？

第13問(前書き)

VSAクラス戦?美波VS白姫決着とムッツリーニVS愛子の触り
です。
では、ごじごじ。

第13問

「あの……そろそろ、よろしいですか？」

高橋女史は目の前で起きている騒動を見て汗を流しながら、そう言った。

『はっ!?!』

それで、我に返る生徒達。

「も、申し訳ありません。高橋先生」

スカートを正した白姫が頭を下げる。

「黒峰さん、嬉しいのは分かりますが、もう少し抑えてくださいね？」

『黒峰?!』

Fクラス主要メンバーから疑問の声が上がる。

「ああ、黒峰とは母方の姓なのです。お兄様に見つからないように榊の名前を隠せとお父様に言われましたので……」

「やっぱり叔父さんの仕業か?!？」

「お兄様が入院してたのを黙っていらしたので、その仕返しにと言っております」

白姫の言葉に龍星が頭を抱える。既に四年前になる事で今更仕返しされるとは思ってもいなかったようだ。

「そろそろ、次の対戦に移りますよ？Fクラスの対戦者は前に出て下さい」

高橋女史の言葉にFクラス主要メンバーが動く。

「龍星、お前の従姉妹の得意科目は何だ？」

「白姫は数学が得意だった筈だ。島田も数学得意だよな？」

「じゃあ、ウチが行くわ」

「待て、島田。ちよっと耳貸せ」

「何よ?」

雄二の質問に龍星が答え、美波が動くがその前に龍星がちよっと待

つたをかけた。

「「」によ「」によ」

「えっ？本当に？」

「「」によ「」によ「」によ「」によ」

「わかったわ。やってみる」

龍星が美波に耳打ちし、美波は頷くと前に出た。

「Fクラスは島田美波が出ます」

「わかりました。科目はどうしますか？」

「数学でお願いします」

美波の指定に高橋女史は頷き数学のフィールドが展開する。

「試獣召喚！」

「試獣召喚ですわ！」

美波と白姫の声に応じ、二人の召喚獣が喚び出される。

美波の召喚獣は軍服姿にサーベル、白姫の召喚獣は犬耳犬尻尾に鉢金に赤い武者鎧に白い袴、両手に十文字槍というどうみても戦国ASARAの幸村の装備だった。

「え〜っと、榊白姫いざ参るといふべきなのでしょうかね？」

白姫が己の召喚獣を見て呟く。

『Aクラス黒峰白姫VSFクラス島田美波』

「あ、高橋先生。申し訳ありませんが名前を榊に戻して貰ってもかまいませんでしょうか？」

「分かりました。少々待って下さい」

白姫の申請に高橋女史は応じ、ノートパソコンを操作して、名前の変更をする。

「そんなに簡単に済む物なのか？」

「学園長の指示に有りましたので、日頃から用意はしてました」

「お父様が学園長にお頼みしたみたいですね。」

白姫の言葉に龍星と芹香が溜め息をついて頭を抱える。

「学園長……」

「……………?……………(何してるのかな?……………)」

「お待たせしました」

操作が終わり、改めて点数が表示される。

『Aクラス榊白姫VSFクラス島田美波
数学328点VS179点』

「ん、榊の情報通りね」

龍星が美波に最初に耳打ちした時、『白姫の点数は確実にお前を超える』と言っていたのだ。

「やはり、お兄様はわかっておられましたか。……………わうん 流石お兄様」

白姫に尻尾が生えパタパタと左右に揺れる。

「さて、それじゃあ行くわよ!」

美波の召喚獣が構えると、白姫の召喚獣も槍を構えた。

「榊白姫、参ります!」

「そういえば龍星。お前島田に何か耳打ちしてたよな?」

雄二が龍星に尋ねる。

「ああ、一つは白姫の点数の事。もう一つは白姫の得物が長物だった場合の対策かな。しかし、二槍流とはな。こいつはちと骨が折れるな」

龍星が闘いから目を離さず雄二に伝える。

相手が長物……………突撃槍ランスや槍といった場合、慣れない内は相手の攻撃は突くや薙ぎ払うと言った単調な攻撃になりやすい。ならば、敢え

て懐に飛び込めば相手は攻撃し辛くなる。

龍星はそう美波に耳打ちしたのだが、二槍流ではそう易々と懐に飛び込む事が出来なくなる。

只でさえ美波の武器はサーベル……細身の剣なのだ。まともに受ければ確実に砕けるだろう。

「はっ！」

白姫の召喚獣が二本の槍で交互に突いてくる。

「くっ！」

美波はそれを捌いていくが、通常の槍と違い十字槍は穂先の横に刃がある為それが掠り、次第に点数が削られていった。

「ヤバいな。このままじゃ、削られて終わりか」

雄二が腕組みをしながら呟く。

「いや、勝機はある。白姫は二年の始めに転入してきた。なら、召喚獣を使うのは恐らく初めてか二度目といった所だろう」

「つまり、まだ慣れていないといった所か」

「ああ、俺もそうだったが、慣れない内は長時間の戦闘はキツいからな。俺も清水との闘いの後へばった」

「つまり、美波の勝機は其処にあるって事？」

明久の言葉に龍星と雄二が頷く。

「後はそれに島田が気付くかどうかだが……」

「やあっ！」

美波がサーベルを突き出すが無事はかわされる。

「はあはあ……くっ！」

「このっ！」

白姫が次第に肩で息をしだすが美波はそれに気付いていない。

「無理っぽいなおい」

雄二が汗を流しながら呟いた。

「島田の奴、既に懐云々も忘れとるな」

「美波ちゃん……」

「美波、落ち着いて！相手を良くみるんだ！」

明久の激励が飛ぶ。

「島田あ！落ち着け！焦ったら白姫の思いつボだぞ！」

「！そうね、榊に言われてた事忘れてたわ」

美波は召喚獣を操作して一度白姫と距離を取ると軽く深呼吸をした。

「相手を良く見て……」

美波は気分を落ち着けると、明久に言われた通り白姫を良く見る。

「……」

すると、白姫が軽く肩で息をしている事に気付いた。

「相手の隙を見て、懐に入る！」

「きゃうん！？」

美波は召喚獣を操作して、白姫の召喚獣に突撃をかける。

咄嗟の事に白姫は対応仕切れず美波の接近を許してしまう。

「てやつ！」

美波がサーベルで突く。

ザシュツ

白姫は咄嗟に避けるが避けきれずに、美波の攻撃は白姫の召喚獣の右の二の腕を貫く。

『Aクラス榊白姫VS Fクラス島田美波

数学258点VS109点』

今の攻撃で70点のダメージを受ける白姫の召喚獣。

「わうん、島田さん流石ですわ。ですが、貫いたまま動かないのは戴けませんわよ？」

白姫は貫かれたままの右腕で美波の召喚獣の腕を掴み、左の十文字槍を短く持ってそのまま美波の召喚獣の頭を突く。

「やばっ！」

美波は召喚獣をしゃがませるとその危機を脱する。

「危なかった……わ！」

美波はそのまま開いた左手で白姫の召喚獣を殴りつける。

「野蛮……ですわ……！」

殴る。

「野蛮で悪かった……わね！」

殴る。殴る。

互いに殴り続け、その拳が紅に染まり始める。

『Aクラス榊白姫VSFクラス島田美波

数学89点VS20点』

何時しか白姫の点数は100を切り、美波の点数も残り20点までに下がっていた。

「このままじゃ、ヤバいわね」

美波は呟くと召喚獣の足元に落ちている白姫の十文字槍に目をやる。そして、召喚獣を操作して右手の拘束を解き放つとサーベルはそのまま突き刺したままにして、落ちている十文字槍を手に取り一旦下がる。

「貴女の武器借りるわね？」

「わうっ！ 狡いですわ……！」

白姫はサーベルを引き抜いて捨てる。十文字槍を構え、美波もまた十文字槍を構えた。

「アキに倣^{なら}って最後の勝負と行きましよう？」

「わうっ……。宜しいですわ」

双方槍を構え、同時に走り出す。そして、同時に突き出される槍。

ドシュツ × 2

美波の攻撃は白姫の召喚獣の心臓を貫き、白姫の攻撃は美波の召喚獣の頭を貫いた。

『Aクラス榊白姫VSFクラス島田美波
数学0点VS0点』

勝負は再びドローに終わった。

「わう」

呟きその場にしゃがみ込む白姫と膝に手を置いて息を整える美波。

「ふう、勝てなかったわ」

そう言つて白姫に近付いて手を差し伸べる美波。

「あ、ありがとうございます」

差し伸べられる美波の手を取り立ち上がり、礼を言う白姫。

「貴女が召喚獣の操作に慣れていたらこっちの負けだったわ」

「わう。(赤)」

笑顔で言う美波に照れながらも笑顔の白姫。

「……………記念^{パンヤ}」

ムツツリーニはそんな2人をファインダーに納めシャッターを切つた。

後にムツツリーニはこの写真を2人に渡し、データは自らのパソコンに厳重にロックをかけ保存し、売る事は無かったという。

「島田さん「美波」えっ？」

「美波で良いわ。私も貴女の事白姫って呼んで良いかしら？」

「でしたら、私の事はシロと呼んで下さい。親しい者はそう呼びますから」
そう言つて互いに握手を交わす2人。
今、ここに2人の乙女の間で友情が結ばれたのだった。

「これでAクラスが一勝2分け、Fクラスが一敗2分けでAクラスが一步リードです」
高橋女史の声が教室内に響く。

「さて、次は確実に取りたいな。……ムツツリー二頼むぞ？」
「……………任せろ」

雄二の言葉にムツツリー二が頷き立ち上がる。

「じゃ、Aクラスはボクが行こうかな」
Aクラスからは色の薄い緑色の髪をショートカットにした、ボーイツシユな女の子が出て来た。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね（パタパタ）」

スカートがパタパタさせながら挨拶をする愛子。

「科目は何にしますか？」

「……………保健体育」

ムツツリー二が高橋女史に伝える。これでFクラスは科目指定の権利を3つ使った。最後の一つは雄二が使う為、これ以降はAクラスの指定する教科で勝つしかない。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

得意どころではない。何せムツツリー二という男は総合科目の点数の内、実に80%を保健体育で獲得する猛者なのだ。

「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？……………君と違って、実技で、ね」

《《保健体育の実技ってなんだーっ!？》》

その場にいた全員の心が一つになった瞬間だった。

「そのこのキミ、吉井君だっけ？うん、可愛いしキミならいいよ？保健体育の実技……ボクが教えてあ・げ・る」

「アキに実技なんて永遠に要らないわ!?」

ゴキン!

「痛い!」

愛子の言葉に美波が反応し、明久の首を捻る。

「明久君の実技は私が教えるので必要ありません!」

ムニユン

「わぷっ」

瑞希は瞳に涙を溜めその豊満な胸に明久の顔を埋めるとそのままギョツと抱き締める。

因みに瑞希は自分の爆弾発言に気付いていない。

そして、明久も自らの天国に気付いていない。

「……吉井を殺せえええっ!」

無論、その爆弾発言に動くは嫉妬の塊FFF団。

「……させるかあああああっ!」

そして明久を護るは、乙女の守護者ネオ・FFF団。

FFF団は鎌や釘バットを手に取り、対するネオ・FFF団は芹香謹製スタンガン内蔵ハリセン『量産型スタンハリセンmark2』(因みにオリジナルのスタンハリセンmark1は龍星が持っている)を手に互いを睨み合う。

「あはは Fクラスって面白いね」

笑顔で言う愛子。

「……………皆落ち着け、奴の手に踊らされるな!(ポタポタ)」

先程の瑞希の抱擁を見て、握り締めた手から赤い血を垂らし、鼻から赤い何かを垂らしながらムツツリー二は皆に告げた。

「ぶがうはんほれっひえはにはぶっふりーひ?(工藤さんの手って

何さムツツリーニ？」

「ひゃうん！くすぐつたいです、明久君」

瑞希に抱き締められたままムツツリーニに問う明久に明久の口の動きがくすぐつたくて思わず声をあげる瑞希。

「……………殺したい程妬ましい（ボタボタ）」

「え〜から話を進めろ」

明久への嫉妬に燃えるムツツリーニをハリセン（羨ましいなら工藤ちゃんに頼んで見る？と書いてある）でシバく龍星。

「……………奴は男心を惑わせるが決定的な事は何一つしない！……………例えばさつき奴がめくりあげたスカートの中身は……………スパツツだ！？」

「あれ？今日穿いてたっけ？（ピラッ）」

「……………ぐはぁッ！（ドブシヤアアアッ!?!）」

ドシヤアッ

ムツツリーニは自らの血の海に沈んだ。

「冗談だったのになぁ……………ッひ！」

「……………（あいちゃん）」

愛子が振り向くと、ハリセン構えた芹香が佇んでいた。

「……………！（いい加減にしなさい!）」

スパアン

「いたぁーっ！」

ハリセン（えっちなのはいけないと思います！と書いてある）でシバかれ悶絶する愛子と倒れたムツツリーニが起きるまで数分間を要するのであった……………。

第13問（後書き）

因みに明久は瑞希の胸に埋もれたままです。

ムツツリーニではありませんが殺したい程妬ましい……。という冗談はあつちのお空にほいしましょう。

しかし、まあさんも言ってるっしやいましたがウチの瑞希と明久の間は誰も入れませんな。

……美波、本気で頑張れ？

今回のネタ

まほろまでいっくより『えっちなのはいけないと思います！』〜芹香のハリセンに載せて〜です。

第14問(前書き)

VSAクラス戦?ムツツリーニ戦決着、瑞希戦決着、そして、龍星
VS芹香戦触りです。
では、どござ

第14問

「……………(フラフラ)」

先程出血多量で倒れたムツツリー二が輸血をしながらフラフラと立ち上がる。

「せ、芹ちゃん。せめて顔は止めて欲しかったよ」

同じく、芹香にハリセンを食らった愛子が顔を押さえて立ち上がる。

「……………(ご、ごめん。頭を狙ったんだけど、目測がずれちゃった)」
流石に顔面を叩いた芹香は愛子に謝る。

「芹香政宗、俺用だからな。芹にはちとバランスが悪いんだろ？」
龍星が芹香政宗を芹香から返して貰いながら愛子に言う。

「おい、そろそろ勝負開始しねえと流石に高橋女史が怒るぞお」
「坂本君、変な事を言わないで下さい」

高橋女史が冷静に雄二に注意する。

「というか、康太。大丈夫か？顔が青通り越して白いんだが？」

「……………問題無い。輸血は続けている」

確かにムツツリー二の言う通り徐々に顔に赤身が指してくる。だが、後一度少量でも出血すればムツツリー二の命は無いだらう。

「……………もうちょっと待とうか？ムツツリー二くん」

「……………そうしてくれると有り難い」

自分がしでかした事が原因故にはつが悪そうな愛子の申し出を素直に受け取るムツツリー二であった。

「……………待たせた」

十数分後、何とか元の顔色に戻ったムツツリー二が愛子に告げた。

「いや、流石にからかい過ぎちゃったね。ごめん、ムツツリー二くん」

「……………気にするな」

素直に謝る愛子にムツツリー二は気にするなと言っ。

「（なあ、あの二人なんかお似合いじゃね？）」

「……（2人共、同じ科目を得意にするからね。うん、お似合いだね）」

「（ムツツリー二にも春が来るか？）」

「（いいなあ。ウチもアキと……）」

「（美波、吉井君と姫路さんの間に入るのは相当の勇気がいりますわよ？）」

龍星、芹香、雄二、美波、白姫の5人が集まってヒソヒソと話していた。

「もう良いですか？そろそろ勝負を開始して下さい」

高橋女史の声が響く。

「はい。試獣召喚っ」と

「………試獣召喚」

二人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手に持って出現する。ムツツリー二の召喚獣は忍者装束に小太刀の二刀流。対する愛子の召喚獣は、

「なんだあの巨大な斧は！？」

セーラー服に如何にも威力のありそうな巨大な斧と腕に腕輪が光っていた。

「何時も思っただが、召喚獣の装備はどんな基準で決められてるんだ？」

龍星の疑問に皆が首を傾げる。

「………（そうだよ。成績かと思っただけど、あいちゃんの召喚獣見ると違っような気がするし………どういっ基準なんだろ）」

「コンピューターかなんかで適当に決めてんじゃねえか？」

「しっ！始まるわよ」

美波の声で皆がムツツリー二達に注目する。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

愛子が艶っぽく笑うと同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。巨大な斧に雷光を纏わせ、有り得ないスピードでムツツリー二の召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして、豪腕で斧を振るいムツツリー二の召喚獣を両断する。

「ムツツリーニっ！」

Fクラスの生徒の一人が叫ぶ。

「……………加速」

斧が当たる寸前、ムツツリー二の腕輪が輝き、召喚獣の姿がブレる。

「……………えっ？」

愛子が戸惑いの表情を顔に浮かべる。ムツツリー二の召喚獣は既に愛子の召喚獣の射程外にいた。

「……………加速、終了」

ボソリと、ムツツリーニが呟く。

一呼吸置いて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太
保健体育 446点 VS 572点』

「そ、そんな……………！この、ボクが負けるなんて……………！」

「テストの点数に実践も理論もほぼ関係ないからな……………」

床に膝をつきシヨックを受ける愛子に雄二が汗を流しながら呟く。

「これで一勝一敗二分けのイーブンですね。次の方は？」

「あ、はい。私ですっ」

明久を抱きしめたままの瑞希が高橋女史に答える。

「所で姫路。何時まで明久を抱き締めてるんだ？」

「えっ？……ひゃわっ！」

雄二の言葉に瑞希が慌てて明久をその抱擁から解放する。ドサツと言う音と共に明久が床に倒れ落ちる。

「……？おい、明久どうした？」

「……あ、そこに居るのはおじいちゃん？」

龍星の問いかけに明久は訳の分からない事を言う。

「……っ！呼吸が止まっているっ！」

「明久ああああっ！？」

ムツツリーニが明久を調べると明久は呼吸をしていない事が判明し龍星が叫ぶ。どうやら瑞希の胸で窒息したようだ。

明久、絶賛臨死体験中。

「はっ！おじいちゃん！」

数分後、明久は龍星達の尽力で何とか息を吹き返した。

「……………良かった」

「流石に焦ったな」

「無事生き返れて良かったな。渡し守と値段交渉しだした時はもう駄目かと思っただぜ！」

ムツツリーニ、雄二、龍星が額の汗を拭きながら、心底安堵したように呟く。

「あ、明久君！無事で良かったです！」

瑞希が泣きながら明久を『優しく』抱き締める。

「えっ？瑞希ちゃん？えっと、何があったの？」

「気にするな、もう済んだ事だ。瑞希、ほら涙を拭いて行ってこい。明久の質問に龍星が気にしないように言って、瑞希に涙を拭くように言った。」

「は、はい。明久君、行ってきますね」

「うん、頑張つて瑞希ちゃん」
涙を拭いた瑞希が笑顔で言うと明久も笑顔で応えた。

「姫路さん、Aクラスは僕が相手をしよう」

Aクラスから歩み出るは、眼鏡を掛けた知的な男子生徒。

「やはり来たか、学年次席」

雄二が独り言のように呟く。

そう、彼の名は久保利光。

瑞希に次ぐ学年三位の実力者で、振り分け試験の際、瑞希が体調不良の為にタイアした為、彼は今明久達の学年で次席の座に居る。

「科目はどうしますか？」

高橋女史が2人に声をかける。

「総合科目でお願いします」

久保が高橋女史に答える。

「分かりました。総合科目のフィールドを展開します。それでは勝負を始めて下さい」

「「試獣召喚！」」

現れる2人の召喚獣。

総合科目は成績がそのまま戦力になる。その為、雄二の顔に不安が写し出される。……が、明久と龍星は微塵も心配してなかった。

「雄二、なんて顔してんだ？」

「お前ら、不安じゃないのか？」

「全然。僕と龍は瑞希ちゃんを信じてるから」

雄二の不安を吹き飛ばすかのようにあっけらかんと言う明久。

そして、明久と龍星の信頼に込めるように瑞希と久保の勝負は一瞬でついた。

『Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希
総合科目 3997点 VS 4409点』

『マ、マジか!』

『何時の間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』
至る所から驚きの声があがる。

無理もない。久保との点数差は実に400点オーバー。尋常ではない強さだ。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」
久保が悔しそうに瑞希に尋ねる。

「……私、このFクラスが好きなんです。龍兄が居て、明久君が居て、人の為に一生懸命な皆が居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」
「はい。だから、頑張れるんです」

瑞希の言葉に龍星達の心は温かい気持ちで溢れ、自然と皆の顔に笑顔が浮かんだ。

「これでFクラスが二勝一敗二分けで一步リードです」
高橋女史の表情に若干の変化が見られた。瑞希の急成長に驚いたか、あるいは、FクラスがAクラスと渡り合っている事に戸惑っているのだろう。

「さて、次は俺達の番だな……芹」

「……(気付いてんだ)」
そう言っつて、前に出る龍星と戦いたくないと言った雰囲気の前に出る芹香。

「まあな。何となく……いや、確実にお前だと思っていた」

「……（りゅうくん……）」

「戦いたくないって感じたな。俺だって愛する女と戦いたくないがな。ま、しゃーねーわな」

頭をかきながらはつきりと言う龍星。

「……（うん、愛してる人と戦いたくないけどしょうがないよね）」

「友とクラスのために……さあ、戦おう（戦いましょう）（愛する人よ……）」

2人は同じ言葉を同時に言う。

「では、科目を選択して下さい」

「……（日本史でお願いします）」

芹香が科目を選択する。

「条件は同じ得意科目か」

「……？（正々堂々勝負。負けないよ、りゅうくん？）」

そう、芹香もまた龍星と同じく日本史を得意とする。

AクラスもFクラスも2人を見守っていた。

「フィールド展開完了。では、勝負を開始して下さい」

高橋女史の声が開始を告げる。

「んじゃ、真剣勝負と行こうか芹！」

「……！（やるう、りゅうくん！）」

そして、再び同時に叫ぶ。

『試獣召喚っ！』

今、2人の真剣勝負が幕を開けた。

第14問（後書き）

次回で、Aクラス戦は決着……出来るかなあ？

龍星と芹香の戦いメインになると思うので、ひよっとしたら雄二戦と試召戦争編エピソードが一緒になるかも知れません。

そして、試召戦争編が終わったら番外編を二本ばかり挟んで、文化祭編に行きたいと思います。

第15問(前書き)

VSAクラス戦? 龍星VS芹香決着です!
今回は少し短いです。
ではどうぞ。

第15問

「試獣召喚！」

龍星と芹香、二人が同時に召喚獣を喚ぶ。

その声に応じ現れる2人の召喚獣。

龍星の召喚獣は青い着物に白い袴に日本刀、そして輝く腕輪。

芹香の召喚獣は猫耳に尻尾の巫女装束に胸当てに弓、腕に腕輪が輝いている。

『Aクラス 瀬川芹香 VS Fクラス 榊龍星
日本史 507点 VS 479点』

「なっ！龍星より点が上がった！」

雄二が表示された点数を見て驚く。

「かあ〜っ！やっぱり点数じゃ負けてたか！」

「…………でも、一年でこれだけの点数を取れるなんて、りゅうくん
凄いよ）」

笑いながら言う龍星に芹香も笑顔で言う。

「じゃ、行くぞ芹？」

「…………（うん、何時でもいいよりゅうくん）」

芹香が弓を構え、龍星が刀を抜き放つ。

「…………！（はっ！）」

芹香が一瞬で3本の矢を龍星に向けて撃つ。

「なんとおーっ！」

その悉くを切り落とし、芹香に向かって駆け出す龍星。

「…………！（甘いよりゅうくん！）」

更に矢を撃ち込む芹香に対し、龍星は全ての矢を切り落とす。

「芹こそ、俺の眼を甘くみんなよ!？」

龍星は動体視力が非常に良い。

その気になれば、弾丸すら見切れるだろう。故に龍星に取って攻撃を見切り捌くは簡単な事なのだ。

「……………?! (ならば、コレはどうか？唸りなさい、『疾風』!)」

芹香のキーワードに腕輪が反応し光り輝く。

すると、弓の周りに風が渦巻き始めた。

「……………! (秘技、飛燕の矢!)」

芹香が風を纏った一本の矢を明後日の方向に撃ち出す。

「おいおい、何処に撃つて「龍星、後ろだ!」なっ!?!」

雄二の言葉に、振り向くと龍星の後ろから召喚獣を狙って矢が高速で飛んできた。

咄嗟に避けるが、その矢は召喚獣の肩にかすり床に刺さる。

今ので30点削られ、龍星の点数は449点になった。

「……………成る程、風で矢をコントロールして狙ったって訳かい。飛燕とは良く言ったもんだ」

龍星はニヤリと笑い呟く。

「……………(次いくよ。飛燕三連)」

三本の矢を次々に放つ芹香。

矢は全て曲がり、龍星を襲う。

「んじゃ、こつちも行くか!燃え上がれ、『爆炎』!」

召喚獣の身体を炎が包み込み、矢を全て焼き払う。

「爆炎放射、轟火剣嵐・龍牙!」

龍星は炎を刀に纏わせ突きを繰り出す。すると、炎がまるで龍の様な形となり、芹香を飲み込む。

「……………! (疾風よ!)」

風で炎を撒き散らす、それでも60点のダメージを受ける。

『Aクラス 瀬川芹香 VS Fクラス 榊龍星』

「あれ？龍の点数が減ってる」「腕輪の能力を使ったからじゃないか？」

明久の疑問に雄二が答える。

「恐らく坂本君の言う通りだと思います。腕輪の能力は強力ですが、点数を消費するというデメリットがあるんです」

瑞希が解説する……が、更なる疑問が明久からぶつけられる。

「でも、瀬川さんの点数はさっき受けたダメージだけだよな？」

「それは……」

「……瀬川は腕輪を展開しただけ。能力を使ってない」

瑞希が答えようとした時、横からムツリーニが答えた。

「……龍星から聞いた。自然系の腕輪……『地』『水』『火』

『風』『雷』と言った能力は俺のような身体強化系の腕輪と違い、展開のキーワードとは別に能力解放のキーワードがある。龍星なら

『放射』『収束』がそれにあたる。だが、瀬川は展開のキーワード

は言ったが能力解放のキーワードを言っていない」

ムツリーニの解説に一堂が頷く。

「じゃあ、工藤さんは？」

明久がムツリーニに聞く。

確かに愛子の腕輪は電気系の能力。明久の疑問は最もだろう。

「……これは推測だが、工藤愛子は俺を嘗めてたか腕輪の能力を良く理解していない」

ムツリーニの言葉に愛子がピクツとなる。どうやらムツリーニの推測は当たっていたようだ。

「……（土屋くん、凄いね。大当たり、私は腕輪を展開しただけだよ）」

「情報通の康太だからな」

ムツツリー二の声が聞こえていた芹香と龍星は互いに笑いあう。

「……………！（それじゃあ、お見せしましょう。集い穿て、秘技飛燕疾風連弾！」

芹香の言葉に風が矢に集まり次々に高速で放たれる。

その数は10。

「くっ、はええっ！おおおおっ！」

龍星は次々襲い掛かる矢を弾くが弾かれた矢は向きを変え再び襲い掛かる。

「……………？（無駄だよ、りゅうくん。飛燕を能力で強化してるんだから、弾いた位じゃ止まらないよ？）」

「くそっ！質がわりい技だなおい！」

そう言いつつ、弾き続ける龍星だが三本の矢が召喚獣の背中に突き刺さり、点数を大幅に減らした。

『Aクラス 瀬川芹香 VS Fクラス 榊龍星
日本史 407点 VS 265点』

「拙い！龍星が腕輪を使えなくなっちゃった！」

雄二が焦ったように叫ぶ。

見ると、龍星の召喚獣の持つ刀から炎が消えかかっていた。

「龍兄っ！」

「龍！」

「龍星っ！」

「……………龍星っ！」

『負けるな、兄貴いいいいっ！！』

「……………へっ。ここまで応援されて無様に負けちゃあ男じゃねーよ……………なああああっ！！！」

仲間達の声援をその背中に受け、龍星の召喚獣が襲い掛かる矢を無視して駆け出す。

「……………！（りゅうくん！）」

「はっはーっ！点数が尽きる前に一太刀くらいは受けて貰うっぜええっ！」

龍星は襲い掛かる矢を、何時の間にか左手に持った鞘で叩き落としながら間合いを詰める。

「……………！（ひゃうっ、刃成せ疾風収束！）」

芹香は弓に風を集めて、風の刃を形成する。

「せえりいかあーっ！」

龍星が刀を突き出す。

「……………！！（りゅうくうーんっ！！）」

芹香が風の刃を振るう。

そして、二人の召喚獣が衝突し、刀は芹香の召喚獣の右肩を貫通し風の刃は龍星の召喚獣を切り刻んだ。

『Aクラス 瀬川芹香 VS Fクラス 榊龍星
日本史 100点 VS 0点』

二人の真剣勝負は……………芹香に軍配が上がった。

「すまん、負けちゃった」

龍星が雄二達に頭を下げる。

「いや、気にするな。お前は良くやったさ」

雄二が笑いながら、龍星の肩を叩く。

「それより、お前にやる事があるぞ。ほれ」

そう言つて雄二が指差した方向には、俯いた芹香がいた。

「まったく、勝者が落ち込んでどうすんだ？……おらっ！」

「……！（きゃっ、りゅうくん！）」

龍星は芹香に近寄ると落ち込んでいる芹香の両脇に手を添えると一気に抱え上げ自分の肩に座らせる。

当然の事だが、スカートは何処ぞのムツツリスケベが覗かないように龍星が足ごと押さえている。

「何、落ち込んでんだ！お前はそれでけえ胸張って仲間の元に帰りゃあいいんだよ！」

何気にセクハラ発言をするおっさん……もとい、龍星。

「……！……！（りゅうくん、セクハラ！もおー馬鹿あつ！）」

芹香は顔を赤くして笑い声をあげる龍星の頭をポクポク叩く。

因みに、ムツツリー二は再び記念と眩き、写真を撮った。

この写真も後日、龍星と芹香に渡され、データは自らのパソコンに封印した。

「今の勝負は瀬川さんの勝利です。これで、二勝二敗二分けのイーブンとなりました。それでは、最終戦を始めます。両クラス代表は前へ」

高橋女史の声が教室内に響く。

試召戦争Aクラス戦は遂に、クライマックスの幕を上げた。

第15問（後書き）

いよいよ、次回Aクラス戦終結です。
今回はちょっとしたオマケ空間付になりますよ？

自然系の腕輪のキーワードについて。

詳しい事は、作中のムツツリー二の解説のままです。
自然系や身体強化系と言った呼び方はワンピースの悪魔の実から拝借。

一応オリジナルの設定の積もりですが、バカテスSSを全部見てる訳ではないので、ひよっとしたら同じ設定の腕輪があるかもしれない。

さて、それぞれの展開と能力解放のキーワードですが、

龍星 『燃え上がれ、爆炎』 『爆炎放射』 『爆炎収束』

芹香 『唸りなさい、疾風』 『集い穿て』 『疾風収束』

白姫 『舞い踊れ、氷結』 『纏い凍てつけ』 『氷結放射』

と、なっています。

因みに愛子はまだ決めてません。行き当たりばったりですね。
もし、愛子のキーワードはこんなのでこんな能力が良いんじゃない？
という方がいらっしやいましたら、感想に書いて下されば、是非とも使わせていただきとうござります。

第16問 『第一次試召戦争編エピローグ』（前書き）

VSAクラス戦雄二対翔子編終結&第一次試召戦争編終了です。
今回はオマケ空間付きです。
ではどうぞ。

第16問 『第一次試召戦争編エピソード』

「両クラス代表は前に出て下さい」

高橋女史の声が、最後の決戦の幕を上げる。

「さて、俺の出番だな」

そう言つて雄二はゆっくり首を回しながら前に出る。

「……はい」

Aクラスからは学年主席で最強の敵、霧島翔子が前に出る。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言で先程まで静かだったAクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

これでFクラスにも勝利の可能性が出て来る。

それが分かったからこそ、Aクラスの生徒達はざわついている。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。

少しこのまま待つていて下さい」

ノートパソコンを閉じて、高橋女史が教室を出て行く。

「雄二、後は任せたよ」

明久が雄二の手をぐつと握る。彼等に出来る事は全て全力でやった。

後は代表である雄二の勝負で栄光か破滅かが決まる。

「ああ。任された」

雄二が明久の手をぐつと握り返す。

「……………健闘を祈る（ビツ）」

ムツツリーニが歩み寄り、激励を述べピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

ムツツリーニが口の端を軽く上げ、元の位置に戻る。

「あの、坂本君、頑張ってください！」

瑞希が、

「坂本！頑張りなさいよ！」

美波が、

「油断禁物だぞ？自分の力を信じて行ってこい！」

龍星が、雄二に近寄り激励する。

「任せろ、お前達の期待は裏切らないさ」

そう言つて雄二が皆にサムズアップをする。

「お待ちせしました。では、最後の勝負、日本史を行います。霧島さんと坂本君は視聴覚室に移動して下さい」

高橋女史が戻つて来てクラス代表二人に声をかける。

「……………はい」

短く返事をし、翔子が教室を出て行った。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

瑞希に送り出され、雄二も戦場に向かう。

この勝負で決着がつく。泣いても笑つても、試召戦争は終結する。

「皆さんは此处でモニターを見ていて下さい」

高橋女史が機械を操作すると、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点です』

画面の向こうでは、日本史担当の飯田教諭が問題用紙を裏返しのみ

ま二人の机に置いた。

『不正行為等は即失格になります。良いですね？』

『……はい』

『分かっているさ』

『では、始めて下さい』

二人の手によって問題用紙が表にされた。

「明久君、いよいよですね……！」

「そうだね、瑞希ちゃん。いよいよだね」

「これで、あの問題が無かったら坂本君は……！」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい、もし出ていたら」

「うん」

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が表示される。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ） 年 平城京に選都

（ ） 年 平安京に選都

小学生レベルの問題が次々に表示される。

（ ） 年 鎌倉幕府設立

（ ） 年 大化の改新

「あ………！」

明久は思わず呟く。

「あ、明久君っ」

瑞希が明久に抱き付く。

「うん」

「これで、私達っ……………！」

「うん！これで僕等の卓袱台が」

『システムデスクに！』

一人を除いたFクラス全員の声が揃う。

そして、湧き上がる歓喜の声。

そんな中、唯一人龍星だけがディスプレイを見つめていた。

「……………？（りゆうくん、どうなの？）」

肩の上に座る芹香が龍星の顔を覗き込む。

「……………」

だが、龍星は芹香に答えずディスプレイを見続ける。

そして、映し出された結末に龍星は目を瞑る。

《日本史勝負 限定テスト 百点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

《Fクラス 坂本雄二 59点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱に変わった。

「3勝2敗2分けでAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込むFクラスの生徒達に対する高橋女史の締め
の
台詞。

「……………雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に翔子が歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

そう叫び、ハリセン（龍星から借りた。修正してやる！と書いてある）を持ち、久々の明久クラッシュの構えを取る明久。

「明久君っ！落ち着いて下さい！」

瑞希が明久の背中に抱き付く。

二つのやわらかい感触が背中に感じられるが明久は敢えて無視した。

「大体、59点って何だよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと」

「如何にも今の俺の全力だ」

「この駄雄二があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら……って、アンタ日本史98点だったっけ？」

「そうだよ！僕以下じゃないか、このど阿呆ーっ！」

「それでも、坂本君を責めちゃ駄目ですっ！」

「くっ！何故止めるんだ瑞希ちゃんに美波！この駄雄二には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

瑞希が背中から、美波が前からしがみつき、身体を張って必死に明久を止める。

「……はあ、過去に神童って事は今は違っって事だからな。こうなると思ったよ」

それまで黙っていた龍星が芹香を肩から下ろしながら溜め息混じりに呟いた。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題と油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「って事は凶星だな！龍が油断禁物って言ったじゃないか！」

「言い訳はしねえ」

「……所で、約束」

「そう言やあ、交渉の時に『負けた方は何でも一つ言つ事を聞く』
て言つのがあつたな」

龍星がにやにやししながら、雄二に言つ。

「分かつている。何でも言え」

雄二が潔く返事をする。

「……それじゃ」

翔子が床に膝をつく雄二の目線に合わせてしゃがむ。

そして、小さく息を吸って、

「……雄二、小さい頃からずっと好き。私と付き合つて
言い放つた。」

『……はい?』

その場に居た全員の声が重なった。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。小さい頃からずっと、これからもずっと雄二
を愛してる」

翔子の突然の告白に視聴覚室内にまるで凍りついたような静かな空
気が流れる。

「翔子さん……素敵ですね。小さい頃からずっと一人の男性を思い
続けるなんて素晴らしいですわ」

白姫が呟く。

「ま、年貢の納め時って奴だな、だあ〜いひよっ」

龍星が雄二の肩をポンと叩く。

「うるせえっ！翔子、その話は何度も断つただろ？他の奴と付き合
うつもりは無いのか？」

「……私には雄二だけ。他の人なんて、興味無い」

「拒否権は？」

「……無い。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！放せ！やっぱこ「ちよつと待った」龍星！？」

雄二の首根っこを掴み、出て行こうとする翔子に龍星は待ったをかけた。

「……………？（りゆうくん？）」

「霧島ちゃん、これはこの日の為に用意した俺からの贈り物だ。良かったら使ってくれ」

そう言つて龍星が差し出したのは、二枚の恋愛映画のチケットとレストランの食事券だった。

「龍星、てめえっ！」

「……………ありがとう。榊は良い人」

「こんな事しか出来んが、友よつ！幸せになれ」

引き摺られていく雄二を龍星は敬礼をしてニヤニヤと見送った。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としているFクラス全員の耳に野太い声がかかる。

振り向くと、そこには鉄人の異名を持つ西村教諭が立っていた。

「おろ？西やん。俺達に何か用？」

「ごすつと言つ音と共に龍星の頭に拳骨が落とされた。

「西村先生と呼べ。何、今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

Fクラス全員がざわめく。

「おめでとう。お前達は戦争に負けたおかげで、福原先生から担任が俺に変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強出来るぞ」

『なにいつ！？』

龍星を除いたFクラスの男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確かにお前達は良くなった。FクラスがここまでAクラ

スを追い詰めるとは正直思わなかった。でもな、幾ら『学力が全てでは無い』と言っても、人生を渡って行く上では強力な武器の一つなんだ。全てでは無いからと言って、蔑ろにして良い物じゃない」西村教諭が説教臭い事を言う。

今回の戦争で補習室の管理をしていた生活指導の西村教諭は『鬼』の二つ名を持つ程厳しい教育をする先生だ。だが、それも生徒達を思つての事だと言う事を龍星は知っている。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ、開校初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！何としても監視の目をかいくぐつて、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想は無いのか」西村教諭が溜め息混じりの台詞を吐く。どうやら、明久のやる気の無さに呆れているようだ。

だが、明久はこの時、勉強を試してみようという気になっていた。

「取り敢えず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

何故なら3ヶ月後にまた試召戦争を起こし、この西村教諭から逃れる為に。

「さあ、アキ 補習は明日からみただし、今日はDクラス戦の時にウチを見捨てた罰としてクレープを奢つて貰いましょうか？」

「ちよっ！美波、あれだけボコボコにしておいて、まだ罰とか言うの！？」

「だ、駄目ですっ！明久君は私とショッピングに行く約束なんです！」

「瑞希ちゃん、そんな約束聞いてないよ！」

明久は嬉しい反面、持ち合わせが少ない事に焦る。

口座から下ろせば良いのだが、それをすると、残りの食費がヤバくなるのだ。

因みに生活破綻すると、苦手な姉が帰って来かねない上に、龍星が

ら（筋肉言語による）説教をされるのだ。

「に、西村先生！明日からとは言わず、補習は今日からにしましよ
う！思い立ったが仏滅です！」

「『吉日』だ、バカ」

「そんな事どうでも良いですから！」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが 無理する事は無い。
今日だけは存分に遊んでこい」

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなっ
たら卒業式の日、伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ」

「斬新な告白だな、オイ」

呆れた口調で、明久に言う西村教諭。

その後、美波と瑞希に引き摺られていく明久に苦笑しながら龍星は、
「くつくつく。命短し恋せよ乙女ってか？明久も大変だ」

と言った。

窓から外を見上げると、青空が見えた。

そして、教室の外から聞こえてくる明久の声に再び苦笑しながら芹
香と共に、明久を救う為に走り出したのだった。

オマケ《芹香のお説教空間》

それは、気絶していた秀吉が見た夢だったのだろうか？

「う、うーん。僕は一体……？」

優子に折檻された秀吉が目覚めます。

「……………(起きましたね、秀くん)」

「芹香殿？儂はいつた……………！？せ、芹香殿！？その格好はなんじゃ……………」

目を覚ました秀吉の前にいたのは、何とキャットガールな芹香だった。

良く見れば、バニーガールな瑞希、ナースな美波、サキユバスな翔子(後、縛られた雄二)にドッグガールの姿をした見知らぬ女子(白姫)が居た。

「……………(秀くん、坂本君。お説教があります)」

芹香は秀吉にハリセン(紙製)を向けてそう言った。

「な、何故儂が説教されねばならんのじゃ！？」

「……………？……………(Bクラス戦の際、Cクラスの皆さんを罵倒しましたね？それもゆうちゃんになりきって)」

「！？そ、それは雄二の指示で……………」

「……………(その坂本君の件に関しては、既にお仕置き済みです)」
見ると雄二は既に燃え尽きていた。

「……………(残念です秀くん。貴方がそんな事をするなんて)」

芹香が如何にも残念そうな顔をする。

「……………(罪には罰が必要です。みずちゃん、彼を連れてきて下さい)」

「
芹香が指示すると、バニーガール瑞希は頷いて何処かへ歩いて行く。暫くして戻って来たバニーガール瑞希が連れていたのは、

「はぁ〜い お・ひ・さ」

ピンク色の紐ビキニを着たニューカマー根本だった。

「*……………！」
シヨックを受ける秀吉。

「……………(人を騙し、陥れるという事は非常にいけない事です。これで秀くんが反省してくれる事を祈ります)」

芹香がニューカマー根本に頷く。

「ウフフ、木下君」

ニューカメラ根本が舌なめずりをしながらジリジリと近寄ってくる。
「ひっ！いい、嫌じゃ！男に襲われるのは嫌じゃっ！頼むから来るでない！」

股間とお尻を隠しながらジリジリと下がる秀吉。

「……………？（反省しますか？）」

「す、する！もう二度と人を陥れる演技はせんのだじゃ！」

既に涙をボロボロこぼしながら頷く秀吉。

「……………（分かりました。根本くん、お預けです）」

「あら、残念」

芹香の指示に心底残念に言うニューカメラ根本。

「うっう、怖かったのだじゃ。本当に怖かったのだじゃ」

ボロボロ泣きながら言う秀吉。

「……………？（では、後は普通のお説教で終わりですが、次にやったら今度は止めませんよ？）」

芹香の言葉にコクコク頷く秀吉。

この後、30分程芹香から説教を受けた秀吉は再び気を失った。

「……………？……………？（良いですか？二度とやったら駄目だよ？秀くん）」

最後にそんな芹香の声が聞こえたような気がした秀吉だった。

この後、保健室のベッドで目覚めた秀吉は二度と人を陥れるような演技はしなくなったという……………。

補足。因みに雄二はニューカメラ根本に迫られ、反省したのち芹香のお説教を受け、その後翔子に美味しく戴かれたとさ。
めでたしめでたし。

「めでたくねえーっ！って辞める、翔子！早まるなあーっ！」

「……………雄二、子供は男の子一人、女の子一人の二人が良い」

「辞めっ！助けてくれえーっ！」

めでたしめでたし……？

第16問 『第一次試召戦争編エピローグ』（後書き）

ニューカマー根本、オマケ空間にて再び惨上（誤字に非ず）！
因みに、恋姫のチヨウセンの格好です。

秀吉、マジ泣き。どなたかウチの秀吉を慰めて上げて下さい。因みに、女性陣は泣き顔の秀吉を見てこんな事思っています。

芹香《秀くん、かわいっ》

瑞希《木下君、可愛いです》

美波《うつつ、ウチより可愛い！》

翔子《……雄二》

白姫《ああん、可愛いですわ 抱きしめたいですわ》

今日で投稿開始して1ヶ月です。節目に第一次試召戦争編を終える事が出来ました。

これも読んで下さる皆様のおかげです。

本当にありがとうございます。

これからも『バカとテストと年上の同級生』をよろしくお願いします。

第17問・番外編の1『白姫のお引越し』（前書き）

連続投稿。

番外編の1『白姫のお引越し』をお届けします。

オリジナルです。

ではどうぞ。

第17問・番外編の1『白姫のお引越し』

「所でシロ」

Aクラス戦を終えた次の日の昼休み、何時ものメンバーに白姫を加えた面々は何時もの様に屋上で昼食を取っていた。その途中、龍星はふと気付いた事があり白姫に声をかけた。

「はい？何でしょうかお兄様」

「お前、今何処に住んでるんだ？」

何時もなら龍星の家に来るだろうが、今回龍星が気付くまで内緒にしていたと言う事らしいので、それは無い。ならば今白姫は何処に住んでいるのか？

「ホテルに滞在しておりますわ。お父様がお兄様が気付くまではホテルで暮らせと」

カラーン

龍星の手から箸が落ちた。

「1ヶ月経ってもお兄様が気付かれない様なら自分から出向くつもりでしたわ」

どさどさ

雄二達の手から昼食が落ちた。

「え〜っと、榊さん？」

「あっ、私の事はシロで良いですわよ？親しい人達は皆そう呼びますし。皆さんもそう呼んで下さいまし」

「じゃあ、シロちゃんが良い？」

「私もシロちゃんって呼ばせて貰います」

「ウチはシロって呼んでるし」

「……………俺は榊で呼ばせて貰う」

「俺もムツツリー二と同じで榊じゃのう」

「俺も榊で。他の女性を名前で呼ぶと翔子に殺されかねん」

「はい 康太さんと秀吉さんと雄二さんは残念ですが仕方ありません」

んわ」

「その、変な事聞くけど、シロちゃんの家ってお金持ち？」

1ヶ月近くホテルに滞在すればその料金もそれなりのモノになる。

明久の質問は最もだろう。

「そう……なりますわね。一応、1ヶ月のホテル代払っても余裕ありますし」

雄二達の動きが止まる。

「あの、どうかなさ」何考えてんだ！あのおっさんは〜っ!?」キヤウ〜ンッ！」

白姫の言葉を遮って龍星が叫び声をあげる。

白姫は龍星の叫びに驚いて悲鳴をあげ、芹香の後ろに隠れてプルプル震えだす。

「……よしよし、しろちゃん怖くないよ。りゅうくん落ち着いて」

芹香が白姫を宥めながら龍星に落ち着く様に言う。

「す、すまん。遂、叫んじまった」

そう言っつて龍星は白姫の背中を撫でる。

「龍の叔父さんって何の仕事してるの？」

「確か会社経営の筈だ」

「社長さんなんですな？」

「一応な。シロ、ちよっと伯父さんに連絡して来る。ケータイ番号変わってないよな？」

龍星が白姫に訪ねる。

「はい、変わってませんわ」

白姫が芹香の背中から顔を出して龍星に答える。

「そうか」

そう言っつて龍星は、ケータイを取り出しながら歩いて行った。

「待たせたな。シロ、伯父さんに許可を取った。ウチに来い」数分

後、戻ってきた龍星は少しムツとした顔で白姫に言った。

「龍？どうしたの？」

「あのくそ親父、白姫を預かってくれる礼に白姫を別の意味で喰って良いとかぬかしやがった！今度叔母さんにチクってやる！」

龍星の言葉に、明久・雄二・秀吉は吹き出し、ムツツリー二は鼻血を吹き、芹香・瑞希・美波は真つ赤に染まり、白姫は首を傾げキョトンとしていた。

「ちよつと龍！」

「いかなぞ、龍星殿！お主には芹香殿が！」

「おいおい、それが父親の言う言葉か！？」

「……………（ダクダクダクダクダク）」

「ひゃわわわわ／＼／（赤）」

「あ、あんたの伯父さんって何考えてんのよ！／＼／（赤）」

「……………！……………！？（りゅうくん、信じてるよ！信じて良いんだよね

！？（真つ赤）」

「？」

ちよつとした混沌祭り開催中である。

「てめえら、落ち着きやがれ！」

そう叫んで龍星は白姫を除いた全員の頭をハリセン（混沌よ、去れ！と書いてある）で叩き倒した。

「つー訳で、今度の日曜日白姫の引越しをやる。悪いが手伝ってくれ」

そう言っただけで龍星は皆に頭を下げる。

「それは構わんが、俺達だけじゃ時間がかかるだろ？どうするんだ」

「近藤達ネオ・FFF団にも手伝って貰うつもりだ」

「FFF団は？」

「あいつ等は呼んだら、シロの荷物やら下着やら漁りかねん」

さらっと言う龍星。どうやら彼の中ではFFF団はただの変態集団になっているようだ。

「俺と明久は構わんが、他の皆はどうだ？」

雄二の言葉に明久は頷き、他のメンバーを見回す。

「私も構いません」

「ウチも良いわ」

「……………俺も手伝う」

「僕も構わんぞい」

「……………（私も良いよ）」

「……………私も手伝う」

「ボクも手伝うよ」

他のメンバーも頷く。

「つて、霧島ちゃんに工藤ちゃん！？何時の間に居た？」

何時の間にか座っていた翔子と愛子に龍星が驚く。

「……………雄二が居るから私も居る」

「いや、何となくかな？」

因みに二人は雄二の横とムツツリー二の横に何時の間にか座っていた。

「……………まあ、翔子と工藤は置いてだ。日曜日の何時からやるんだ？」

雄二が仕切り直す。

「伯父さんの話だと日曜日の9時頃に荷物が届くそうだ」

「それじゃあ、8時半頃に龍の家に行けば良いよね」

明久の言葉に龍星が頷く。

「皆は俺んち知らんだろうから、明久と一緒に来てくれ。んで、悪いが芹と瑞希は早めに来て掃除を手伝ってくれ」

芹香と瑞希は揃って頷いた。

「皆さん、ご迷惑をおかけ致しますわ」

白姫が皆に向かって頭を下げる。

それに皆が笑って、

「友達の為なら構わない」

と、言って白姫に抱きつかれた。

因みにその時、翔子が雄二にしがみつき、愛子が鼻血に沈んだムツツリーニを何故かムツとして見ていた。

時は飛んで日曜日。

「此処が龍星の家か？」

「そうだよ」

雄二は目の前にある一軒家を見上げて呟くと、明久が頷いた。

「ワンっ！」

「あ、ヤマト。元気だった？」

「キョーン」

明久に吠えたのは、龍星の飼犬のハスキー犬「ヤマト」。

中学の頃に龍星が拾って来た。

因みにメス。龍星曰わく「大和撫子」から名前をとったそーな。

「おう、来たか。上がってくれ。茶ぐらい入れるぜ」

ヤマトの声で気付いたのか、ドアを開けて龍星が出て来て家へ上がるように言った。

『お邪魔しま〜す』

皆を居間に案内して、龍星はキッチンへと入っていく。

「結構広いな」

「龍の家に来るのも久しぶりだよ」

「意外と綺麗にしてるのね」

「……………過ぎしやすい」

皆がそれぞれ寛いでいると、龍星と芹香がコーヒーとクッキーを持って戻ってきた。

「すまん。コーヒーしか無いが我慢してくれ」

「……………？（クッキーは私が焼いたの。お口に合うかな？）」

「ああ、すまないな。しかし、そうやって私服で並んでるのを見ると、新婚夫婦みたいだな」

雄二が二人に向かってそんな事を言うと、龍星は少し照れながら、
芹香は真つ赤になりながら互いを見合う。

因みに龍星は黒のランニングシャツにジーンズ、芹香は白い長袖の
シャツに青色のスカートといった格好だ。

「あ、皆来てたんですね」

「本日はお世話になりますわ」

二階から瑞希と白姫が降りてくる。

「気にするな。そう言や、龍星。近藤達は来てないのか？」

雄二が二人に手をあげて応えようと、龍星に聞いた。

「近藤は来れるんだが、他の連中は今日はちよつと無理だそうだ」

龍星が雄二に答える。

「という事は、後は近藤が来るだけか」

雄二がコーヒーを飲みながら言うと龍星が頷いた。

「すまん、皆。飯位は奢るから今日は頼むな」

龍星がそう言うと、皆が気にするなと言って笑った。

「それじゃあ、女子は二階で整理を頼む。場所は瑞希か白姫に聞いてくれ。男子は荷物運びだ。タンスとか来るから足元には気を付けるよ？」

暫くして近藤もやってきて、その少し後に荷物を積んだトラックが
やってきた。

「よう、龍星にシロ。元気にしとるか？」

「龍君、これから白姫がお世話になるわね？」

トラックから降りてきたのは、白姫の両親、榊相馬・雫夫妻だった。

「お父様、お母様」

白姫が二人に抱き付く。

「伯父さん、叔母さん！今日来れないとか言っていましたよね？」

龍星がジト目で二人を見る。

「はっはっは、お前達を驚かしてやろうと思ってな。そちらの皆さま

んはご学友かな？はじめまして、コレの叔父で白姫の父の榊相馬と申します。今日は白姫の為にわざわざ申し訳ない」

「龍星の叔母で白姫の母の雫と申します。皆さん、今日はよろしく願いますね」

夫妻は明久達に頭を下げ、挨拶をする。

「はじめまして、吉井明久です」

「姫路瑞希です」

「坂本雄二です」

「木下秀吉と申す」

「……………土屋康太」

「島田美波と言います。シロ…………いえ、白姫さんとは仲良くさせていただけます」

「龍星さんのクラスメイトの近藤吉宗と言います」

「…………白姫さんのクラスメイトの霧島翔子です」

「同じく工藤愛子です」

『よろしく願います』

皆が夫妻に向かって頭を下げ、挨拶をする。

「こちらこそ、よろしく願います。所で、龍星。そちらのお嬢さんは…………」

相馬が龍星の横にいる芹香に目を向ける。

「……………！（は、はじめまして。りゅうくんとお付き合いさせてもらってます瀬川芹香です。よろしく願います！）」

芹香が夫妻に向かって頭を下げる。

「はっはっは！これはまた別嬪さんだな。龍星、良い娘を掴まえたな」

「あらあら、可愛らしいお嬢さんね。龍君、大事にしてあげるのよ？」

相馬が豪快に笑い、雫がコロコロ笑いながら、龍星に言う。

「勿論ですよ。当たり前前の事言わないで下さい」

「吉井君と姫路さんの事は龍星から伺っているよ。コイツと仲良く

してくれてありがとう。これからもよろしくお願いするよ」

「はい！勿論です」

相馬は明久と瑞希の手を取り礼を言い、明久と瑞希も力強い返事を返す。

「さて、始めるか。じゃあ、叔母さんも芹香達と一緒に整理をお願いします。伯父さんは荷物運びな」

龍星がそう言うのと各々が持ち場へと散った。

龍星達が荷物を運び、運んだ荷物を女性陣が運び込んだダンスや棚へとしまい込む。

まあ、秀吉が重い荷物を運ぼうとして、持ち切れず軽い荷物に変えられて男としての自信を無くしたり、ムツツリーニが荷物を運んだ時、丁度白姫の下着類を仕舞ってた所だった為、ムツツリーニが鼻血を吹いて沈み、雫が「あらあら、若いのね」とコロコロ笑いながら言ったという出来事があったが、それは些細な事である。

そんなこんなで1時間後。

大きな荷物は粗方片付き、芹香は白姫や雫と共に昼食の買い物に行こうと玄関から出ようとしていた。

「ん？買い物に行くのか？」

「……（うん、ちょっと行ってくるね）」

「俺も付いて行きたい所だが、そういう訳にもいかんからな。近藤、明久！悪いが荷物持ちで付いて行ってやってくれ！」

「了解です、兄貴」

「分かったよ。雄二、ちょっと行ってくる」

「ああ、分かった」

龍星に言われ、丁度手持ち無沙汰だった近藤は即答で、明久は共に荷物を運んでいた雄二に断りを入れてた。

「この辺りも、随分変わったわね」

スーパーへ向かう道中で、雫が周りを見渡しながら呟く。

「ここ二、三年でこの辺りも開発が進みましたから」

その呟きを聞き取った近藤が雫に答えた。

そうこうしてる内にスーパーに着いたのだが、此処で一つ困った事が起きた。後ろを付いて来てた筈の白姫がいなくなっていたのだ。

「あらあら、白姫ったら何時までも子供ね」

と、雫がさほど困った感じの無い声で言った。

「俺、探してきます。皆は買い物して置いて下さい」

「だったら、僕も」

「女性だけにする訳にもいかないだろ。大丈夫、任せてくれ」

そう言つて近藤は来た道を走つて戻つて行つた。

「此処は何処ですか？」

芹香達とはぐれた白姫は、歩き回り本来の目的地であるスーパーとは反対の方向へと来ていた。

「ん〜。あっちに行けば元の場所につくかしら？」

てくてくと歩き出す白姫。

何故か段々と人気の無い方へと歩いて行く。

「ねえ、キミ今暇？」

歩く白姫に声をかけてきたのは如何にも遊んでますといった格好の男。

「あなたなんですか？私、今スーパーを探してて忙しいんですの」

そう言つて、歩き出す白姫の腕を男が掴む。

「そんなの後に良いじゃん。俺と遊ぼうよ」

腕を引つ張り無理やり白姫を連れて行くこうとする男。

「ちよつと、放して下さい！」

白姫は男の手を振り解こうとするが、男は白姫の手を放そうとしな
い。

「良いから来いって言つてんだよ！」

「きゃん！」

男は白姫を殴りつけて、大人しくさせようとする。

だが、忘れてはならない。

この街にあるとある学園には、乙女の守護者たる集団が居る事を。

そして、その一人が彼女、白姫を探している事を。

「その手を放して貰おう」

その声に男が振り向くと、そこには白い覆面を被り、同色のマントを付けた複数の集団と近藤が居た。

「な、なんだ teme 等は！」

男が叫ぶ。

「我等、乙女を護る者」

「我等、乙女を傷つける者を許さぬ者」

「我等、乙女の涙を拭う者」

「我等……」

『ネオ・FFF団！』

ネオ・FFF団が声高々に名乗りを上げる。

「近藤、行け！お前が紳さんを護るんだ」

覆面を被った君嶋が、近藤に量産型スタンハリセン mark 2 を近藤に手渡す。

「すまん。…… teme、白姫さんになにしてやがるあつ！！」

近藤が男に襲い掛かる。

そして勝負は一瞬でついた。

片や、女を食い物としか考えぬ不貞の輩。片や、女性の為にその身を投げ出す者。

どちらが上かわずとも解ると言うものだ。

「この不貞の輩は俺達に任せろ。出でよ！ニューカマー根本！」

君嶋が片手を上げ叫ぶと、一人の男が前に出る。

「ウフフ、お・呼・び・か・し・ら？」

ニューカマー根本である。この男、実はBクラス戦の後、ネオ・F

FFF団に入団していた。

「この者を連れていけ。その後、好きにしる」

「ウフフ 了解よ。近藤くん、早く柗ちゃんを連れていきなさい？
柗君が心配するわよ？」

ニューカマー根本が近藤に白姫を連れて行く様に言う。

此処から先は乙女には見せられぬ地獄だ。

「分かった。君嶋、ありがとう。さあ、白姫さん。立てますか？皆
が待ってますよ？」

そう言つて、笑顔で手を差し伸べる近藤。

「え、ええ、皆さんありがとう御座います。」

近藤の手を取つて、立ち上がりネオ・FFF団に礼を言う白姫。
ネオ・FFF団は頷くと男を連れ去つた。

「……………」

てくてくと歩く近藤と白姫。

因みに手は繋いだままである。

「あ、あの白姫さん、大丈夫ですか？」

沈黙に堪えられず、白姫に話し掛ける近藤。

「……………」

「え？」

「怖かったですの」

振り絞るような声で答える白姫。

その瞳には、涙が浮かんでいた。

「白姫さん……………」

「近藤さんや、皆さんが居なかつたら、私……………」

立ち止まる白姫。その目から涙が零れ落ちる。

「……………」

近藤は無言で白姫の頭を撫で始める。

「近藤さん？」

「はは、兄貴の様にはいきませんけどね。俺で良ければ何時でも呼んで下さい。白姫さんの為なら直ぐ駆けつけますよ」
笑顔で撫で続ける近藤。

白姫はその手をまるで龍星のようだと思いながら、目を細めた。

「近藤……いや、吉宗。今日は白姫が世話をかけたな」

夕方、引越しの片付けも終わり近藤が自宅に帰ろうとした時、龍星がそう言ってきた。

「いえ、俺は別に……」

「謙遜するな、お前たちが居なかったら白姫は心に消えない傷を負っていた。ありがとう」

「兄貴、礼なら皆に言ってお下さい。俺一人じゃ間に合わなかったかも知れないんです」

実際、近藤一人では間に合わなかっただろう。途中で君嶋に会い、協力してくれなかったら白姫は今頃あの男に別の意味で食われていたかも知れない。

「近藤さん」

その時、白姫が中から出て来た。

「白姫さん」

「ありがとうございます。……あの時の近藤さん……かっこよかったですわ」

そう言って、微笑む白姫。

「あ、う」

近藤はその笑顔に見取れていた。

「やれやれ、お邪魔虫は戻りますかね。……叔母さん、なにしてるんです?」

「あら、娘の恩人に挨拶を、と」

「駄目ですよ。完全に2人の世界に入ってますから」

龍星の言葉通り、白姫と近藤は互いに見つめ合い、真っ赤になっていた。

翌日、白姫はネオ・FFF団の面々に礼を言いにFクラスを訪れ、白姫に礼を言われたネオ・FFF団を見て嫉妬に駆られたFFF団が襲撃をかけたが、ネオ・FFF団に返り討ちにされたが……それは些細な事である。

第17問・番外編の1『白姫のお引越し』（後書き）

白姫はこれ以降、吉宗に淡い想いを抱くようになります。

そして、龍星の呼び方が『近藤』から『吉宗』に変わります。

因みに男は何処かとおーい所に行きました。

ニューカマー根本が食った訳ではありません。

まあ、嫌がらせはしましたが。

ニューカマー根本はまだCクラス代表小山友香と続いていますんで、其処まではしませんでした。

キャラ設定

榊相馬・雫

白姫の御両親で龍星の叔父と叔母。家はお金持ち。

豪快な叔父、相馬。お淑やかな叔母、雫。

2人のおかげで龍星は真っ直ぐ育ってきた。

因みに相馬は龍星の父の弟に当たる。兄弟仲は非常に悪い。

龍星の父親は現在、行方不明中。この作品に出てくるかは解らない。

ヤマト

龍星の飼い犬。

シベリアンハスキーのメス。

龍星が中学生の頃拾ってきた。

非常に人懐っこい。

名前の由来は『大和撫子』から。

モデルはLAN武が高校時代、実際に飼っていたシベリアンハスキー
I 『大和』

名前の由来もそのまんまです。因みに名付けたのはLAN武の親父。
非常に人懐っこいわんこで可愛かったですよ。

第18問・番外編の2-1 『バカとテストと年上の同級生』予習編（前編）

番外編の2「バカとテストと年上の同級生」予習編（前編）を
お送りします。
では、どうぞ。

第18問・番外編の2-1 『バカとテストと年上の同級生』予習編（前編）

「バカテスト／日本史」

【問題】

以下の（ ）に当てはまる歴史上の人物を答えなさい。

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（ ）である。

姫路瑞希・瀬川芹香・榊龍星の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です。

島田美波の答え

『ちゃんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この解答を見て先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え

『織田信長』

先生のコメント

どうやら吉井君は日本史が得意なようですね。

これは、明久や龍星が一年の時の出来事である。

「全員動くな！鞆を机の上に置いて、中身が見えるように開け！」

朝のHRが始まるや否や、西村教諭がそんな事をクラスに告げた。

「言っておくが、逃げようなんて考えるなよ？よし、それじゃあ見て回るぞ。授業に関係ない物は全て没収するからな」

廊下側の最前列から順に鞆を覗き込んでいく西村教諭。トランプや雑誌といった小物が次々と没収されていく。

「坂本、お前はポケットの中も見せる」

そんな中、雄二は鞆の中だけでなく、ポケットの中までチェックされていた。

「……くそっ」

悔しげに毒づく雄二。

言われた通りに渋々ポケットを裏返すと、そこからはMP3プレーヤーが出て来た。

「やはりな。これは没収だ」

雄二のMP3プレーヤーを没収品袋の中に仕舞い込む西村教諭。まさかポケットの中までチェックされるとは思っても見なかった雄二は忌々しそうに西村教諭を睨みつけていた。

（雄二、災難だったね）

明久が小声で雄二に話し掛ける。

（全くだ！ポケットの中までチェックされたのは俺ぐらいなもんだぞ！??）

因みに、女子はキヤーキヤー言いながら手で顔を隠しているが、しっかりと指の隙間から明久の下着姿を見ていた。

「これで全部か？前から言っているが、学校は勉強する所だ。授業に関係無い物は持って来ないように。さて、榊。次はお前の番だ」

「ん？俺も明久みたいに脱げばいいの？」
そう言つて、上着を脱ぐ龍星。
鍛えられた肉体が露わになる。

「いや、別に脱ぐ必要は無かつたんだが……（汗）」
何故かマツスルポーズを決める龍星に対し、汗を流しながら言う西村教諭。

因みに、女子は顔を赤くしてガン見していた。
（意外かも知れないが、龍星は結構真面目な生徒である。授業に係無い物はハリセン位だが、この時はまだ持っていない）

「さて、持ち物検査に時間を取られたのでHRは省略する。1時間目はいよいよ『試験召喚実習』だからな。全員速やかに体育館に移動する様に」
締めの一言を告げ、持ち物検査を終えた西村教諭が皆のお宝を抱えて教室から出て行った。

『 試獣召喚っ！ 』

体育館内に響く声を聞きながら、明久は隣に座る雄二に話し掛けた。

「……朝から付いてないよね」

「全くだ。寄りによって先月買ったばかりのMP3プレイヤーが没収されるとは。くそっ」

「うわ、アレ買ったばかりだったんだ」

「高かったんだぞ畜生」

野性味溢れる顔を歪め、悔しげに呻く雄二。

「明久はゲーム機とかだったな。それも、かなりの量」

「うん……。総額で軽く三万はいったと思う」

「阿呆。そんなもん持ってくるからだ」

龍星は明久と雄二の頭を軽く叩く。

「龍星は何も没収された物は無いんだよな？」

「まあ一応、お前等よりは年上だしな。そこら辺はきちっとしとかねえとな」

そう言つて、龍星は頭の後ろで手を組んで壁に寄りかかった。

「でもな、お前等の気持ちも分かるんだよ。俺も中学ん頃は色んな物持って学校に行つてたしな」

「龍が？」

「馬鹿、俺だつてそんな頃もあったさ」

龍星達が雑談をしていると、明久と龍星の知った顔が先生に呼ばれる。

『次、姫路瑞希。前に出なさい』

『は、はい』

「お、姫路が出るぞ。ムツツリーニ、折角の体操服姿だ。写真に収めなくて良いのか？」

「……………デジカメは没収された」

「そうか。残念だったな。クラスが違うから、姫路の体操服姿なん

てなかなか拝めねえのにな」

「……………（ガツクリ）」

ムツツリーニが本当に残念そうにうなだれる。

「まあ、そんな事したら龍にデジカメ破壊されたと思うよ？」

「……………（ニヤリ）」

明久の言葉を肯定するように、龍星がニヤリと笑う。

『「こうですか？試獣召喚っ！」』

瑞希の言霊に反応し、足下に幾何学的な魔法陣が現れる。

そして、巨大な大剣を持った瑞希の召喚獣が現れる。

「うおっ、流石姫路だな。凄い装備だ」

雄二が感心したような声をあげる中、瑞希は相手の召喚獣を切り倒し、実習を終えた。

「次！吉井明久。前に出る」

立ち会いの西村教諭が明久を呼ぶ。

「あっ、ウチの相手は吉井なんだ」

「あう、島田さん……………」

「良かった。吉井を殴るのって凄く気持ちいいんだよね」

「先生、校内暴力発言が！」

「島田、いくら吉井でも堂々と暴力発言はいかんぞ」

西村教諭が美波を注意する。

「すいませんでした……………」

「分かってくれたか。それなら……………今回だけは特別だぞ？」

西村教諭から美波の明久への暴力を今回は見逃す発言が飛び出した。

「あなたは何を言っとるんだ、ボケエー！」

龍星が思わず西村教諭に全力ツツコミをかます。

「くっ、榊！貴様、教師にツツコミとは良い度胸だっ！」

「だったら、校内暴力を擁護するような発言すんなや！」

西村教諭と龍星が互いに構える。

「お前とは決着をつけねばならんな！」

「上等だ！表に出ろい！」
そう言つて、西村教諭と龍星は体育館の外へと出て行つた。
「……………あゝ、吉井、島田。召喚獣を喚び出しなさい」
体育教師の大島教諭が、2人に召喚獣を喚ぶ様に促す。
「……………試験召喚」

結局、この日の試験召喚実習は妙な空気の中で終わりを告げた。

追記。

西村教諭と龍星のバトルは決着はつかず、騒ぎに気付いた学園長が止めるまで続いたという。

その日の夕方、龍星は商店街にあるファンシーショップに芹香と共に訪れようとしていた。

「……………（りゅうくん、付き合ってくれてありがとね。どうしてもノイちゃんのストラップが欲しくて）」

「構わねえよ。たまにやこつという所に来るのも悪かねえさ」

龍星は痣だらけの顔で、芹香に笑いかけた。

「……………？（所で、りゅうくん大丈夫？）」

「……………大丈夫」

実はかなり痛い龍星であった。

店の中に入ると、見知らぬ女の子と見知ったバカと女の子……………明久と瑞希が店員とやり取りしていた。

「およ？明久に瑞希じゃねえか。どうしたんだ？」

「龍！」

「龍兄、それに芹香ちゃんも」

「……………？……………？（どうしたの？何かあったの？）」

瑞希達と芹香がやり取りをしている中、龍星は女の子に近付くとしやがみ込んで女の子と視線を合わせた。

「こんにちは」

「こんにちはです」

「何か困った事でも合ったのかな？」

龍星が訪ねると、女の子は涙目になり、

「葉月、お姉ちゃんにノイちゃんのぬいぐるみをプレゼントしよう
と……でも、お金足りなくて……」

遂にはその大きな目から涙が零れ落ちだした。

「そっか、葉月ちゃんはお姉ちゃんにノイちゃんのぬいぐるみをあげようと思ったんだ。優しいね葉月ちゃんは」

そう言つて、龍星は葉月の頭を撫で始めた。

「ごめんね。お兄ちゃんがお金持ってたらか何とか出来ただけど、
今日は持ち合わせが無いんだ」

「龍も？僕も持ち合わせが無くつて……。何とかならないかな？」

「……………（ゴメンネ。お姉ちゃんも余りお金を持って無いから）」
芹香も、葉月の横にしゃがみ込んで大きな目から流れる涙をハンカチで拭う。

「……………あ、あの、このノイちゃんのぬいぐるみ、少しの間だけ売らないようにする事は出来ませんか？」

瑞希が店員に聞くと、

「ん〜。ホントはイケないんだけど、その子の為に少しの間だけ売らないように取っておいてあげるよ」

葉月の姉を想う心にうたれたのか店員はそう言つて、ノイちゃんのぬいぐるみをバックヤードへと持って行った。

「兎に角これで一時的にキープは出来たが、問題はどうやって金を作るかだが……」

ノイちゃんのぬいぐるみは税込みで24800円。

葉月が一万持っていると言っていたので、残りは14800円。今、
ここにいる全員の持ち合わせを合わせても足りないのだ。

「バイト代が入れば何とかなるけど、まだ一週間は先だしなあ」
龍星がガシガシと頭をかきむしる。

「あの、葉月の漫画を本屋さんに買って貰えばお金になるよね？」
これぞ妙案と言わんばかりに目を輝かせる葉月。

「……そうか。その手があったか！」

明久が葉月の言葉を聞いて、何かを思い付いた様に声をあげる。

「……どうしたの？お兄ちゃん」

「どうせ戻って来ないと思ってたし、上手くいけばその位の額には……。よしっ！葉月ちゃん、明日の今ぐらいにこの公園に来られるかい？」

明久が葉月に訪ねると、葉月は頷いた。

「じゃあ、また明日ここに集合だ。今日はもう遅いからお家に帰ろうね」

そう言つて、明久は手を振つて葉月と別れた。

「あ、うん。ばいばい……」

葉月もまた、手を振つて明久達と別れた。

「明久、どうする気だ？」

「没収品を取り出して、売りに行く。上手くいけば、あのぬいぐるみを買えるくらいの金額になる筈だよ」

「正気か？相手はあの西やんだぞ？取り返せても下手すりゃ『観察処分者』になるぞ？」

「あの子の為なら、構わないよ。僕には他にどうする事も出来ないしね」

明久は龍星に別れを告げると走り出した。

「……………？（どうするの、りゅうくん……………りゅうくん？）」
芹香が黙り込んだ龍星の顔を見ると、龍星の顔には笑みが浮かんでいた。

「くっくっく、やっぱり明久は昔から変わらんな。誰かの為に損をみる。それでこそ明久だ」そう言つて、龍星は声高らかに笑い始めた。

たのだった。

第18問・番外編の2-1 『バカとテストと年上の同級生』予習編（前編）

次回（予習編）（後編）です。因みに、西村教諭とのバトルは学園長が止めなかったら龍星が負けてました。

白姫「出番がありませんの……」

第19問・番外編の2-2『バカとテストと年上の同級生』予習編（後編）』

第19問・番外編2-2『バカとテストと年上の同級生』予習編

（後編）』をお送りします。

では、ごじゆ。

「没収品を取り返す、だと？」

翌朝。明久は何時もの教室で雄二達に相談を持ちかけてみた。

「確かに昨日没収された物は、手放すには惜しい物ばかりじゃが…

…」

「うん……。相手はあの鉄人だし、下手を打てば《観察処分者》に認定される可能性もあるしなあ……」

顎に手を当てる雄二と秀吉。

「……………明久に賛成」

「え？ムツツリーニ。手伝ってくれるの？」

「……………（コクリ）」

ムツツリーニが頷く。明久はこれで少なくとも隠密行動に長けた人材を確保出来た。

「……………まあいい。やってみるか」

「あ、雄二もOK？」

「ああ。買ったばかりの物だったし、鉄人には散々貸しがあるしな。丁度いい」

そう言つて雄二はニヤリと悪人面で笑う。

「それならば、俺も手伝おうかの。俺とて取り返せるものなら取り返したい」

最後に秀吉も同意する。

「……………明久、俺はちょっと用があるから行くぞ？」

何時の間にか明久の後ろに立っていた龍星が明久に声をかける。

「あ、うん」

明久はそう言つて龍星を見送った。

「西村先生、ちょっと良いか？」

龍星は職員室に赴くと西村教諭に声をかける。

「どうした？もう直ぐHRが始まるぞ？」

「なに、時間はとらせねえ。ほんの2〜3分だ」

「……分かった」

西村教諭は頷くと、龍星の後について行く。

職員室から少し離れた階段の前で、龍星は立ち止まる。

「どうした？」

「……西やん、昨日の決着を付けようぜ」

「なに？」

「俺が勝つたら……昨日没収した物を皆に返して欲しい」

「何を馬鹿な……っ！」

西村教諭は断るうとしたが、龍星の目を見て龍星が本気だということに気付いた。

「……私が勝つたら？」

「俺を観察処分者だろうが、退学だろうが好きにしる」

龍星が西村教諭に告げる。

「……良いだろう。だが、今回だけだ。今回だけお前が勝った場合にのみ没収品を皆に返してやろう」

「恩にきる西村先生」

西村教諭の承諾に頭を下げる龍星。

「それで、時間は？」

「今日の昼休みに格闘技部のリングで」

「分かった」

西村教諭が承諾すると龍星は再び頭を下げ、教室へと戻っていった。

「アイツのあの目を久しぶりに見たな。誰かの為に闘う決意をした目。あの目をした時の龍星が一番手強い」

残された西村教諭はポツリとそんな事を呟いた。

「島田」「はい」「清水」「はい」

毎朝恒例の出席確認が、教室内に響く

「山口」「はい」「渡辺」「は」

ピロピロピロ

「……吉井。出せ」

「……はい」

明久の携帯が鳴り出し、西村教諭が携帯を出すように言う。

明久が着信を確認すると、

『着信 坂本雄二』

「ゆ、雄二！？貴様裏切ったな！？僕の気持ちを裏切ったんだ！」

「没収だ」

「ああっ！携帯！僕の携帯！」無情にも西村教諭に没収される明久の携帯電話。

「良いぞ、今日は遅刻欠席が一人もないな。今後もこの調子で頑張るように」

出席簿を閉じ、西村教諭は明久の携帯を持つてのっしのっしと教室を出て行った。

「なに、やってんだか……（汗）」

龍星は、明久達のやり取りを見ながら呟いた。

そして、昼休み。

龍星は、格闘技部のリングで西村教諭を待っていた。

「待たせたな」

「おせえぜ、西やん」

扉を開け、入ってきた西村教諭。

「早速始めようぜ。時間も惜しいしな」

龍星がリング上から手招きする。

「良いだろう。ルールはどうする？」

「昼休みが終わった時、立っている者が勝者だ」

西村教諭がリングに上がり、拳を構える。

「行くぜ！西やん！」

龍星が、拳を構え一気に詰める。

「ふっ！」

「甘いわ！！」

「甘いのはそつちだぜ！」

龍星が放った拳を西村教諭は交わし、カウンターを放つが龍星は交わして蹴りを放った。

「ぬっ！」

西村教諭はその蹴りを掴むと、そのまま投げ飛ばす。

「ぬわあーっ！あんた化け物か！？」

「私と対等に張り合えるお前が言っつなっ！」

くるりと回って着地した龍星が西村教諭に文句を言うが、西村教諭に言い返される。

「おおりやあーっ！」

「ふんぬううううっ！」

殴り殴られ、蹴り蹴り返される。

龍星が投げ飛ばせば、西村教諭も投げ返す。

そんな攻防が続き、気が付けば昼休みも残り少なくなっていた。

「がはっ」

龍星が膝を付く。その身体はボロボロだ。

「どうした、龍星！お前の全力はこんなものでは無いだろう！？」

西村教諭も気を抜けば、崩れ落ちそうな身体に力を込め龍星に呼び掛ける。

「へっ！んな訳ねえだろ？」

ニヤリと笑い、立ち上がる龍星。

「ふっ、さあやろうか！」

西村教諭も不敵に笑い、拳を握る。

（とは言え互いに残された力も時間も少ない。これが最後の一撃だ！）

（よもや、私がここまでやられるとはな……。さあ、最後の勝負だ！）

龍星と西村教諭が互いに笑い、そして動きだす。

「オオオオラアアアアアアアッ！」

「オオオオオオオオオオッ！」

交差する拳。

そして崩れ落ちる人影。

キンコーンカーンコーン……

昼休み終了のチャイムが鳴った時、立っていたのは……

「俺のっ勝ちだああああっ！！」

ボロボロの龍星だった。

「見事だ、龍星。約束通り今回だけは、没収品を皆に返そう」

西村教諭がヨロヨロと立ち上がる。

「ありがとな西さん。だが、こんな事は、もう、二度と、ご、め、ん……」

ドサツという音と共に倒れる龍星。

どうやら限界を越えたようだ。

「やれやれ、無茶をする奴だ」

そう言って、西村教諭は龍星を担ぎ上げ保健室へと向かった。

その後、龍星が目を覚めたのは放課後になってからで、その時は全てが終わっていた。

翌朝。

「昨日、職員室で盗難事件が発生した」

教室に入ってきた西村教諭は、開口一番そう告げた。

「実は、先生は昨日ある者と勝負をした結果負けてな、今日皆に没収品を返すつもりだったんだ」

その言葉にざわつく生徒達。

「だから、没収品に関しては先生は何も言うつもりは無い。だが、そいつは事もあるうに、先生の私物を持って行った拳げ句、古本屋に売ったらしくてな。その際に身分証明として文月学園の生徒手帳を提示した。……吉井、先生が言いたい事が分かるか？」

西村教諭が明久を睨み付ける。

因みに龍星は包帯だらけの顔を抱え、盛大に溜め息をついていた。

「一体誰ですかね？そんな事する奴は」

明久が汗をだらだら流しながら言う。

「全くだ。所で、吉井。今日は先生からお前にプレゼントがある。」
西村教諭が懐から一枚の封筒を取り出した。

「取りに来い。今のお前に相応しい役職をくれてやる」

封筒を受け取った明久が、封筒を開けると中には一枚の紙が入っていた。そこには

『一年D組 吉井明久。上記の者を『観察処分者』に任命する』

と、書かれていた。

「良かったな。これからたっぷりとき使ってやるからな」

につこりと笑って言う西村教諭に、青ざめる明久。

龍星はそんな明久に近付くと、一気に放り上げ、自らも飛び上がり明久を担ぎ上げ、足首を掴む。

「ちよっ龍!？」「俺の苦勞を無にしゃがって……、この大馬鹿野

郎がああああつ！！」

「ギヤアアアアアアツ！！」

ズドゴオオオオン！

「マ、マッスルバスターだとおおおつ！！」

マッスルバスターが見事に決まり、明久は崩れ落ちたのであった。

追記。

葉月は無事、姉にノイちゃんのぬいぐるみを渡す事が出来、大層喜ばれたそうだった。そしてその日以降葉月の部屋には、手作りと思しきノイちゃんのぬいぐるみが飾られるようになった。

いよいよ、次回から清涼祭編に入ります。
頑張るぞっと。

白姫「今回も出番がありませんでしたの……」

瑞希「私もありませんでした……」

芹香「……………（私も無かったよ……………）」

美波「奇遇ね。ウチもよ？」

葉月「葉月もです……………」

今回のネタは、某新世紀なアニメの根暗少年の台詞の一部とマッスルバスターですな。

第20問 『清涼祭編』 (前書き)

今回から清涼祭編に入ります。

龍星達Fクラスはどんな出し物になるのか？

また、龍星は雄二達の野球を止められるのか？
それでは、どうぞ。

第20問 『清涼祭編』

【清涼祭／アンケート】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『貴方が今欲しい物は何ですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成る程。お客さんの思い出になるような、そう言った出し物も良いかもしれませぬ。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正）成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるのででしょうか？

吉井明久の答え

『マトモなクラスメイト』

教師のコメント

吉井君からこのような回答が出た事に驚きを感じています。

榊龍星の答え

『マトモなクラスメイト……俺は無力だ（涙の跡）』

教師のコメント

榊君の回答の涙の跡に切実なモノを感じます。

新緑が芽吹き始めた季節。

明久達の通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

殆どのクラスが準備を始める中、龍星達Fクラスはというと

「俺は無力だ……」

「り、龍！しっかりして！」

「榊、元気を出して！」

「龍星殿、気を落とさずに！」

「龍兄、元気を出して下さい！」

「兄貴、頑張つて！」

『兄貴いいいいっ！』

膝を付く龍星の他十数名が教室に残っているだけで、後の馬鹿共は姿を消していた。

他の馬鹿共が何をしているかと言うと、グラウンドで野球をしたりする。

「ああ、そうか。馬鹿共の筆頭（雄二と須川）を殺そう。そうすりゃ、真面目に清涼祭の準備をするかも知れない」

龍星の周りに段々と黒いオーラが滲み出てくる。

「ちよつと龍！？瑞希ちゃん、瀬川さん呼んでこよう！」

「駄目ですよ！芹香ちゃんも準備で忙しいんですから」

明久が龍星を救う為に、芹香を呼ぼうとするがそれは瑞希に止められる。

だが、捨てる神あらば拾う神ありと言うように天は龍星達を見捨てなかった。

『貴様等、学園祭の準備をサボって何をしているか！』

『ヤバい！鉄人だ！』

グラウンドの方から、西村教諭の声が響く。

そして、数分後。

見事に全員が西村教諭に捕まってクラスに戻って来た。

「さて。そろそろ「ユウジ」ん？なんだ龍星？」

発言をしようとしていた雄二を遮り、黒いオーラを背負った龍星が呟いた。

「マジメニヤラントクロス……」

顔に笑顔が浮かんでいる龍星だが、目は全く笑っていない上にかなり本気だった。

どれだけ本気かと言うと、明久他十数名以外全員が背筋に寒気が走る程に本気だった。

「と、取り敢えず、議事進行及び実行委員として龍星を任命する。

お前に全権を委ねるから、後は任せた」

そう言つて、そそくさと自分の席に戻る雄二。

「良いだろう。誰かもう一人手伝つて貰いたいんだが……。島田、手伝つてくれないか？」

「え？ウチがやるの？うん……、ウチは瑞希と召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

龍星に声をかけられた美波は少し困ったような顔をする。

「兄貴、俺で良ければ手伝いましょうか？」

美波の代わりを名乗り出たのは、近藤吉宗である。

「おう、吉宗か。すまん」

「いえ、お気になさらず」

そう言つて、吉宗は前に出る。

「んじゃ、早いとこ決めますか。クラスの出し物でやりたいものがあつたら挙手してくれ」

龍星が告げると数名が手を上げる。

「じゃあ、康太」

「……………（スクツ）」

名前を呼ばれて立ち上がるのは土屋康太。彼は本名よりもムツツリ一二という名前の方が有名だったりする。

「……………写真館」

「……………康太の言う写真館は、かなり危険な予感がするんだが？」

龍星がジト目でムツツリー二を見る。

「まあいい。吉宗、一応書いといてくれ」

「わかりました」

そう言つて、吉宗が黒板にムツツリー二の提案を書く。

【候補1 写真館『ベストショット』】

「次、横溝」

「メイド喫茶」と言いたいけど、流石に他のクラスからも出ると思うから、此処は斬新にウエディング喫茶を提案します」

「なんだそりゃ？どんなのだ？」「別に普通の喫茶店だけど、ウエ

イトレスがウエディングドレスを着てるんだ」

「横溝、残念だが却下だ。ウチのクラスには女子が二人しかいないし、純白のウエディングドレスが汚れてもしたら店のイメージにも関わるだろう？」

横溝の提案は龍星の権限で却下された。

『確かに兄貴の言う通りではあるな』

『ああ、汚れたウエディングドレスじゃ客は呼べないな』

『だが、女子は島田に姫路さんに木下の3人じゃないか？』

『俺は男じゃっ！？』

様々な意見がクラス内に飛び交う。

「静かにしろ。という訳だ、すまんな横溝」

「いえ、じゃあゲームコスプレ喫茶はどうでしょう？これなら、ウエイターでもウエイトレスでも関係ないと思うけど」

横溝が新たな提案をする。

「ふむ……。それなら、男も女もゲームキャラのコスプレをすれば関係ないか。吉宗、書いていてくれ」

龍星の言葉に頷き板書をする吉宗。

【候補2 ゲームコスプレ喫茶『ファイターズ』】

「さて、他に意見はあるか？ 須川」

「俺は中華喫茶を提案します」

「中華喫茶？女子にチャイナドレスでも着せる気か？それなら」
「いえ、違います。俺の提案する中華喫茶は本格的な烏龍茶と簡単な飲茶を出す店です。そうやって色物的な格好をして稼ごうって訳じゃありません。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉がある事から分かるように、こと『食べる』という文化に対しては中華程奥の深いジャンルはありません。近年、ヨーロッパ文化による

中華料理の淘汰が世間では見られますが、本来食という物は「
須川が熱く食に対して語り出す。

「待て、須川そこまでだ！他の馬鹿共の頭から煙が出だした。兎に
角、吉宗頼む」

「了解」

そして書き込まれる須川の提案。

【候補3 中華喫茶『食の起源』】

と、吉宗が書き終えた所で教室の扉がガラガラと音を立てて開き、
Fクラス担任の西村教諭が入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今の所、候補はこの三つだな」

龍星が言くと、西村教諭はゆっくりと黒板に目をやった。

【候補1 写真館『ベストショット』】

【候補2 ゲームコスプレ喫茶『ファイターズ』】

【候補3 中華喫茶『食の起源』】

「ふむ、後はこの三つから決めるだけか？」

「ああ、それと喫茶店ならテーブルとかの手配もいるだろうな。流
石に段ボールを重ねてテーブルにするのは拙いだろっし」

「そのくらいなら、私が手配してやろう。榊、先に進める」

西村教諭が、龍星に話を進めるように言う。

「よっしゃ、この三つの中から出し物を決めるぞ！まずは写真館に
賛成の奴手を上げる！ よし、次はゲームコスプレ喫茶！ 最

後だ、中華喫茶！」

クラス中に龍星の音が響く。

それぞれの出し物に皆が手を上げて、それを龍星が素早くカウントして吉宗が黒板に書く。

「結果として、Fクラスの出し物はゲームコスプレ喫茶に決まった！皆、協力頼むぞ！」

接戦の末、僅差でゲームコスプレ喫茶が中華喫茶を抑えて勝利を収めた。

因みに写真館はムツツリー二だけだったと記しておく。

「さて、後は厨房とホール、それにメニューだが……、メニューは軽食やクッキーなんかの菓子類に飲み物はジュースや珈琲と紅茶なんかが妥当だろうな」

龍星のメニュー提案に皆が頷く。

「明久、厨房のリーダーを頼んで良いか？」

「うん、了解」

「兄貴、俺も料理は得意ですから厨房に入ります」

須川が手を上げて龍星に告げる。

「……………俺も厨房に入る」

「康太？お前料理出来たのか？」

「……………紳士の嗜み」

龍星の言葉にそう返すムツツリー二。

恐らくは可愛い女の子のいる店に通う内に見様見真似で覚えたのだろつ。

「瑞希、お前はホールを頼む。島田、お前もホールを頼む。その方が召喚大会の時に抜けやすいだろ？」

「はい、分かりました」

「りょーかい、ありがと榊」

龍星の気遣いに瑞希は頷き、美波はウインクをして礼を言う。「では、僕はホールにするでしょうか。ゲームキャラのコスプレとは言え演技に関しては演劇部の僕が適任じゃろつ」

「頼むぞ、秀吉。後はコスプレの衣装だが……」

「……………俺に任せろ。皆に合う衣装を作ってきてやる」
ムツツリーニが衣装係に立候補する。

「大丈夫か、康太？時間が無いから突貫作業になるぞ？」
龍星の心配にムツツリーニは、

「……………2日もあれば出来る」

と、自信に溢れた表情で応えたのだった。

「よし！皆、協力頼むぞ！」

『『『了解！』』』

皆が一丸となり、龍星達Fクラスの清涼祭は幕を開ける事になった。

第20問『清涼祭編』（後書き）

今回、龍星が軽くキレました。

本気でキレた訳じゃありません。

本気でキレた龍星は今後出て来ます。

原作とは違い、Fクラスの出し物がゲームコスプレ喫茶になりました。というのも、龍星にあるゲームのコスプレをさせたかったからです。

何のゲームかは、次回の秘密です。

ただ、ヒントは『クラスメイト達の龍星の呼び方』にあります。

分かり易いかな？

因みにLAN武はそのゲームをやった事はありません。が、そのゲームを題材にした漫画は読んだ事があります。

第21問（前書き）

取り敢えず、最後にオマケをつけときました。
第21問、どうぞ。

第21問

【バカテストノ地理】

以下の問題に答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていない事に違和感を覚えましょう。

榊龍星の答え

『スイミング バイシクル ラン』

西村教諭のコメント

それは、トライアスロンだろうが。

「明久、雄二が何処に行ったか知らねえか？」

帰りのHRも終わって放課後。龍星は帰ろうとしていた明久を呼び止めて、雄二の行方を聞いた。

「多分、逃げてるんじゃない？」

「逃げてる？誰から？」

「霧島からじゃろ？」

明久の言葉を聞いていた秀吉が答えた。

「参ったな。あいつの知恵を借りてえんだかなあ……」

頭を掻きながら龍星は心底困った顔をして、呟いた。

「どうしたの？何か困り事？」

「ああ、ちよつとな。あいつの知恵を借りてでも、何とか喫茶店を成功させねえといけないんだよ」

「……？」

龍星の言葉に明久と秀吉の頭の上に疑問詞が浮かぶ。

「……瑞希には言うなと言われていたが、お前には言っておいた方が良くかもしれんな。実はな、このままだと瑞希は転校するかも知れんのだ」

「ほえ？」

「どう言う事じゃ？龍星殿」

「ちよつと待て。明久が処理落ちしてる」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

「秀吉……、モヒカンになった僕でも、友達でいてくれるかい？」

「……どういう処理したら、瑞希の転校からそこに持っていけるんだ？」

「無論じゃ、じゃから落ち着くのじゃ！」

「取り敢えず、正気に戻れ」

龍星は明久の頭をハリセン（久々のハリセンだ！わーいわーいと書いてある）で軽く叩く。

「はっ！瑞希ちゃんが転校ってどういう事！？」

正気に戻った明久が龍星に詰め寄る。

「そのまんまだ。考えてもみる。劣悪な教室に馬鹿なクラスメイト達。どう見ても瑞希に悪影響しか与えんだろぅが」

「詰まり、Fクラスの環境が姫路の転校の理由という訳じゃな？」

「そう言うこつた。瑞希は親父さんに抵抗して『召喚大会に優勝してFクラスを見直して貰う』って言うてるがな、やはり設備を何とかせにやならんだろ」

Fクラスの劣悪な教室環境は瑞希の健康にも影響を与える事になる。一番手っ取り早いのは試召戦争だが、前回の敗北で向こう3ヶ月は宣戦布告は出来ない。

「そう言う事なら、何としてでも雄二を焚き付けてやるさ！」

「そうじゃな。僕もクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、先ずは雄二に連絡を取らないとね」

そう言うて明久はポケットから携帯を取り出し、雄二の番号を呼び出す。

Prrrrrと、呼び出し音が受話器から響く。

『もしもし』

「あ、雄二。ちよつと話が」

『明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞆を後で届けに　げっ、翔子！』

「え？雄二。今何をしてるの？」

『くそっ！見つかつちまった！兎に角、鞆を頼んだぞ！』

「雄二！？もしもし！もしもーし！」

携帯電話からはプー、プー、という無機質な音しか返ってこない。

「雄二は何て言ってた」

「えっと『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってたよ」

「大方、霧島から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

秀吉が腕を組んでうんうんと頷いている。

「なら、霧島ちゃんに雄二を連れてきて貰うか」

龍星は携帯を取り出すと操作をして何処かに電話をかける。

『……もしもし』

「霧島ちゃんか？ 榊だが」

『……どうしたの？』

「済まんが、雄二を捕らえたらFクラスに連れてきて欲しいんだ。少々アイツの知恵を借りたくてな」

『……榊の頼みならお安いご用』

「悪いな。今度手に入る映画のチケットをそっちに回すから」

『……ありがとう、榊は良い人』

そう言つて、翔子は電話を切る。

「これでよしと」

龍星は携帯をポケットに仕舞うとFクラスに向かって歩き出した。

「ちよつと龍！ 何で霧島さんの電話番号を知ってるの？」

「お前、俺の彼女が何処のクラスか忘れたか？」

「あ、そっか。瀬川さん経由で……」

明久は龍星の言葉に納得した。

「正確には、色々と俺と芹で霧島ちゃんの相談に乗ってるからだけだな」

龍星がニヤリと笑った瞬間、

『ギヤアアアアアアアツ!?!』

学校中に雄二の断末魔の音が木霊するのであった。

「そうか。姫路の転校か……」
所変わってFクラス。

遂先程、気絶した雄二が目を覚まし、瑞希の転校の件を龍星から告げられると考え込みながらポツリと呟いた。

「なら、喫茶店の成功だけじゃ不十分だな」

「不十分?どうして?」

「姫路の父親が転校を進めた要因は恐らく三つだ」

そう言つて、雄二は指を三本立てて見せた。

「先ずは一つ目。莫塵とみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したら利益で何とかなるだろう」

雄二は言いながら指を一本引つ込める。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこつたな」

「そうだ。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教室自体の改修となると、学校側の協力が不可欠だ」

机や椅子程度ならば明久達でもお金を出して買う事は出来る。

だが、教室の改修となると業者の出入りや手続きが必要になる。これは明久達に出来る事では無い。

「そして最後の三つ目。レベルの低すぎるクラスメイト。つまり姫路の成長を促す事の出来ない学習環境という面だ」

部活動でも言える事だが、能力を伸ばす為には実力の近い競争相手の存在が重要になる。Fクラスにいる限り、そんな競争相手は望め

ない。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけなら兎も角、二つ目と三つ目は難しいのう」

「それでもねえぞ。三つ目は瑞希と島田が対策を練ってるからな」
龍星が三人にそう言い放つ。

「対策とはなんなのじゃ？」

「召喚大会……だな？」

秀吉の問いかけに雄二が答える。

「ああ」

「でも、召喚大会って三人一組でしょ？瑞希ちゃん達の三人目って誰なの？」

「……シロだ」

明久の問いに龍星が間を空けて答える。

「それだと、父親に認めさせるのは厳しくないか？一人Aクラスがいたら、全てそいつのおかげと言われるんじゃないか？」

雄二が龍星に聞くと龍星は頷く。

「そうだ。シロもそれを危惧していた。本来なら三人共Fクラスが望ましいが……考えてみる。瑞希達に匹敵するような奴がFクラスにいるか？俺は日本史特化だし、明久も成績は上がってきてはいるがまだ心許ない。結局、瑞希に匹敵するのはAクラスの奴らくらいなんだよ」

龍星が苦しそうな表情で淡々と説明する。

「ねえ、僕達も出てみない？僕と雄二と龍の三人で」

明久が皆を見ながら告げる。

「そうじゃな。儂も……と言いたい所じゃが、儂では足手まといになるからな」

少し寂しそうな表情で言う秀吉。

「そうだな。賞品の腕輪にも興味あるしな」

雄二が頷く。

「俺は構わないぞ」

龍星も頷いた。

「なら、残りは二つ目だけだね。どうするの、雄二？」

二つ目の問題、教室の改修。これは明久達だけでは難しい。

「どうするも何も、学園長に直訴すれば良いだろう？」

さも当然、と言わんばかりの雄二。

「それだけ？僕等が学園長に言った位で何とかしてくれるかな？」

「あんな。此処は曲がりなりにも教育機関だぞ？幾ら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と龍星は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見掛けたら俺達は帰ったと言っておいてくれ」

立ち上がり、指示を出す雄二。こう言う事が自然に出来るのは一種の才能だろう。

「有無、了解じゃ。鉄人に会ったらそう伝えておこう」

そう答え微笑む秀吉。

「明久、任せたのじゃ」

「オーケー。任せといてよ」

秀吉に笑いかけ、雄二と明久は学園長室に向かった。

「……秀吉。暫く、吉宗と準備計画を練っていてくれ」

「それは構わんが、龍星殿はどうするのじゃ？」

「切り札を連れて、学園長室に行くのさ」

そう言い残し、Aクラスに向かう龍星であった。

数分後、龍星は芹香を連れて学園長室の前にいた。

『……だよ』

『……アを……よっ』

『……え』

学園長室の中から、明久と雄二、それに学園長の声が聞こえる。

コンコン。

『誰だい？』

「俺だよ、ばあちゃん」

『龍星！？』

『なんだ、あんたかい。さっさと入りな』

「失礼するぜ」

そう言つて、学園長室の扉を開く龍星。

「瀬川さん、どうしたの？ババアに何か用なの？」

「明久、失礼だぞ？」

龍星が明久の言いように言い返す。

「……………？（おばあちゃん、話はりゅーくんから聞いたよ。Fク

ラスの改修駄目なの？）」

芹香が学園長に聞く。

「ちよつと待て、今かなり聞き捨てならない単語が聞こえたんだが

？」

「今、瀬川さん学園長を『おばあちゃん』って言ったように聞こえ

ただけど？」

明久と雄二の顔を見て、龍星が笑う。

「ああ、確かに言ったぜ？」

「どついう事なの龍？」

「どついうも何も、芹と学園長は正真正銘祖母と孫の関係って事だ」

龍星が笑いながら、言い放つ。

「……………（孫です）」

「祖母さね」

『はいー！ー！ー！』

その日一番の絶叫が、学園中を駆け回るのであった。

その後、少々のいざこざはあったが、学園長と雄二達との間である契約が交わされた。

その契約内容は、召喚大会に出て、優勝賞品である『白銀の腕輪』と『如月ハイランドプレオープンプレミアムペアチケット』を見事勝ち取る事である。

ただし、学園長が言うにはペアチケットの方を回収したいとの事だった。

様々な思惑の飛び交う中、雄二はこれを了承。代わりに教室の改修と清涼祭で雄二達が得た利益で設備を変更する事を約束させた。

そして、数日後。いよいよ清涼祭が幕を開けた。

オマケ【龍星のコスプレ】

「……………衣装が完成した」

学園長との取引から2日後。

教室に来たムツツリーニが開口一番そう告げた。

「早いな！」

「……………俺の手に掛ければこんな物朝飯前。まずは姫路と島田」
ムツツリーニが瑞希と美波に衣装の入った袋を手渡す。

「私達のですか？」

「どんな衣装なのよ」

瑞希と美波がムツツリーニに問い質す。

「…………… 姫路はガンダ SEEDのラ スの衣装。 島田はフェ
トノステイナイトのセイ ー」

そう言つて、ムツツリーニは新たな袋を取り出す。

「…………… 厨房班は、モン ンのキッチンア ルーの着ぐるみ。 キ
チンと耐熱性の素材で作つた」

「うわ、凄いリアルだ！」

明久が袋から衣装を出すと、まるで皮を剥ぎ取つて来たようなりア
ルさだった。

「っ！こ、これは！」

「どうしたんですか？明久君」

「瑞希ちゃん、コレ触つてみて」

そう言つて、明久は着ぐるみの手の平にある肉球を瑞希に差し出す。

「は、はい。じゃあ、触ります」

瑞希が肉球を指で押すと、ぷにっという感触が返ってきた。

「ひゃう！まるで本当のにくきうを触つてるみたいですよ」
ぷにっぷにっぷにっ……………

「…………… 肉球に一番こだわつた」

ムツツリーニが満足げに頷く。

「…………… 龍星の衣装はこの三つ。時間によって着替えて貰つ
そう言つて、三つの袋を龍星に手渡すムツツリーニ。

「多いな！」

「…………… 取り敢えず、着てみてくれ」

「あいよ」

そう言い残し、更衣室へと向かう龍星。

その間にムツツリーニは残りのメンバーに衣装を渡す。

因みに、雄二はヴァンパイアシリーズのガン（狼男）、秀吉は天
元突破の少年シ ン、他のメンバーは無双シリーズに出て来る兵士

の恰好だった。

そして、龍星はと言うと……

「康太、一つ聞きたい事がある」

扉を開けて、龍星が入ってくる。

『いつイ テン！』

「……………良く似合っている」クラスメイトが叫び、ムッツリーニが満足そうに頷く。

そう、今の龍星の恰好は超兄 シリーズの主人公『イダン』の恰好だった。

「確かに、自分でも吃驚するくらい似合っていて驚いた」

龍星が頷く。

因みに他の二つは、K F怒チームのラルフ、天元突破な兄貴の恰好だった。

「……………考え抜いた末、その三つに決まった」

「はあ、しょうがねえか……………」

どうやら龍星は、ムッツリーニの苦勞を無にしたくないようだった。

「んじゃ、ゲームコスプレ喫茶『ファイターズ』の衣装も決まったし、皆頑張っていくぜ！」

龍星が、片手を挙げて皆に声をかけると、

『おおおおおーっ！』

と、威勢の良い声が返ってくるのであった。

第21問（後書き）

龍星のコスプレは『イダン』と『ラルフ』の2種類でしたが、天元突破な兄貴の衣装を増やして3種類にしました。

次回はいよいよ、召喚大会の一回戦が始まります。

そして現れる（筈の）あの二人！

龍星はどういった対応をしますかね？

第22問（前書き）

一週間ぶりの本編投稿です。

本当は昨日の夜にあげるつもりでしたが寝落ちしてしまいました。
申し訳有りません。

それでは第22問どうぞ。

第22問

【清涼祭／アンケート】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんな物が良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

如何にも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位の物を用意し裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールで』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと言っています。

榊龍星の答え

『ピンクの上下に白いエプロンドレス。右手にお玉を持ち、左手にはフライパンを持つ。そして、お寝坊さんには鉄槌を』

教師のコメント

某エルロン家最強の妹さんですか？リメイク版では何故かマンボウとお友達でしたね。

榊龍星のコメント

何で知ってんですか、先生？

「何時もはただのボンクラの上に馬鹿にしか見えんが、雄二の統率力は侮れんな」

「ホントだよ。何時もはただのボンクラの上に馬鹿なのにね」
清涼祭初日の朝。

Fクラスの教室は何時もの小汚い様相を一新して、喫茶店へと様変

わりしていた。

皆それぞれの衣装を身に纏い、テーブルや貸衣装（クラス全員分の衣装が出来て、手持ち無沙汰になったムツリーニが更に作って来た為、急遽レンタル制度を作った。1時間500円。気に入った物は販売も可。値段は千円から）の準備をしていた。

「室内の装飾も綺麗だし、これなら旨くいくよね」

「……………メニューも完璧」

「おう、味見用が出来たか」

何時の間にか龍星の後ろにムツリーニがその手に味見用のクッキーとサンドイッチ、それと紅茶をトレイに載せて立っていた。

「わあ……………美味しそうです……………」

「土屋、これウチらが食べちゃって良いの？」

美波の言葉にムツリーニがコクンと頷く。

「では、遠慮無く頂こうかの」

瑞希、美波、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたてのクッキーを頬張った。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はサクサクで中はしっとりしていて食感も良いし！」

「有無、甘過ぎぬ所も良いのう」

大絶賛である。

「お茶も美味しいです。幸せ……………」

「本当ね……………」

瑞希と美波の目がトロンと垂れる。トリップ状態である。

「それじゃあ、僕も貰おうかな」

「……………（こくこく）」

ムツリーニがクッキーとサンドイッチが乗ったトレイを明久の方に差し出す。

「いただきます」

明久はサンドイッチを手に取り頬張った。

「もぐもぐ……………。うん、スッゴク美味しいよムツリーニ！これな

ら大丈夫だよ」

「……………良かった」

「うん、イケるな。サンドイッチやクッキーならお持ち帰りも出来るし売れるんじゃないか？」

龍星もサンドイッチを食べ、太鼓判を押す。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんな所に雄二が帰ってきた。

「あ、雄二。お帰りー」

「ん？なんだ、試食用か？」

「ああ、食ってみる。美味いぞ」

雄二がムツツリーニが手に持ったトレイを見て聞くと、龍星が頷いて食べるように進める。

「んじゃ。むぐむぐ……………。おお！店で売ってても不思議じゃないくらい美味いぞ！」

雄二が感想を述べると、ムツツリーニは満足そうに頷いた。

「所で、雄二は何処に行っておったのじゃ？」

「ああ、ちよつと話し合いにな」

秀吉の質問に雄二が珍しく齒切れの悪い返事を返す。

実は雄二は学園長室に赴き、学園長との取引の一つ『召喚大会に使用する試験科目の指定』を行ってきたのである。

「そうですか。それはお疲れ様でした」

人を全く疑わない瑞希がその言葉を信じ雄二に笑顔を贈る。

「いやいや、気にするな。それより喫茶店は何時でもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……………任せろ」

秀吉が頷き、ムツツリーニがサムズアップで答える。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉、ムツツリーニ、近藤の三人に任せる。俺は龍星、明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」
そう言っ雄二は秀吉とムツツリーニ、吉宗の肩を叩く。

「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

確認するように明久達を見る美波。

「え？あ、うん。色々あつてね」

「もしかして、賞品が目的とか……？」

美波の探るような視線が明久に刺さる。

「うん。一応そういう事になるかな」

「……ダレトイクツモリ？」

「ほえ？」

美波の目がスツと細くなる。全身から噴き出す黒いオーラ。美波ダイクネスモードである。

「明久君。私も知りたいです」

瑞希は心配するような目で明久を見上げる。

「そうだな。チケット手に入れたら瑞希ちゃん、一緒に行つてくれる？」

すんなりと答える明久。

その言葉を聞いて、瑞希は花が咲いたような笑顔が浮かべ、

「はい！勿論です」

と、嬉しそうに言った。

逆に美波の顔は悲しみに曇る。

「（諦める……とは言わん。だが、覚悟は決めておけ。瑞希と明久の絆はかなり深く結ばれているからな）」

龍星は美波の気持ちを感じたのか、彼女の肩をポンと叩いて美波の耳元に小声で呟く。

「（榊、ウチじゃ駄目なのかな？）」

「（今、言つたら？覚悟は決めておけとな。告白するもしないもお前が決める事だ美波）」

美波が驚いた表情で龍星を見る。今、龍星は確かに自分の事を『美波』と呼んだのだ。

「（榊、今ウチの事、美波って……）」

驚く美波に龍星はニヤリと笑い、美波の頭に手を置いた。

「（俺は、彼女持ちだからな。幾らクラスメイトとは言え軽々しく女の子を呼び捨てには出来んよ。今回はまあ、もう長い付き合いだし、そろそろ良いだろと思ってたんだ。前にお前にも言われてたしな）」

龍星はそう言って美波の頭をポンポンと軽く叩き、

「（じゃあ、頑張れよ？大丈夫、明久ならどちらにせよ悩み抜いて応えてくれる）」

と行って明久達の方に歩いて行った。

（そうね。同じフラれるのも何も伝えなくてフラれるのと気持ち伝えてフラれる方がマシよね。その方が諦めも尽くし……）
美波はそんな事を考えていた。

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで試召大会は催される。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出して下さい」

今回の立会人は数学の木内教諭。当然勝負科目は数学になる。

「頑張ろうね、律子、京香」

「うん」

「勿論よ」

対戦相手の女子三人が頷き合う。微笑ましい光景である。

「では、召喚して下さい」

「……………試験召喚っ！」「……………」

6人が揃って喚び声をあげると、お馴染みの魔法陣が足元に現れて召喚者の姿をデフォルメした形態を持つ試験召喚獣が喚びだされた。

『Bクラス 岩下律子 & Bクラス 菊入真由美 & Bクラス
山田京香

数学 179点 & 163点 & 181点』

Bクラス三人娘達は似たような装備の召喚獣で、西洋風の鎧と剣を装備している。瑞希の召喚獣を一般的な強さにしたような感じである。

対する明久達の召喚獣は明久が何時もの改造制服に木刀装備で龍星が青い着物に白袴に日本刀装備。一方、神童とまで呼ばれたFクラス代表の召喚獣は

「……素手？」

明久が間の抜けた声を出す。

「馬鹿が。よく見ろ」

雄二が召喚獣を動かし、拳を掲げて見せる。

「メリケンサックを装備しているだろう？」

「ざ、雑魚だ！雑魚がいる！」

「……何かもう、本気ですまん」

明久が驚き、龍星がBクラス三人娘に頭を下げる。

「いや、別に榊君が謝る必要は無いけど……」

「あの、元気だしてね？」

「あ、頭を上げて下さい」

Bクラス三人娘達が龍星に励ましの言葉をかける。

「取り敢えず、点数見るか……」

微妙に煤けた龍星はディスプレイに表示された点数を見る。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久 & Fクラス
榊龍星

数学 179点 & 92点 & 41点』

「雄二、何やらかした？」

「坂本君、カンニングは駄目ですよ？」

龍星と木内教諭に突っ込まれる雄二。

「いや、普通に勉強したんだが……？」

「……嘘だっ……！」

敵味方全員に突っ込まれる雄二。

「そこまで言うか!？」

「だって雄二だよ! 『あの』雄二なんだよ……！」

「どういう意味だそりゃ! ったく、前回の試召戦争以来、Aクラスに勝つ為に本気で勉強してんだよ」

と、苦々しく告げる雄二。

「どした? 霧島ちゃんに結婚でも迫られたか？」

「……嫌だ! 霧島雄二なんて嫌だ! 婿養子は嫌だあああああ
っ……！」

龍星の質問にいきなり叫び出す雄二。どうやら凶星を指したようだ。

「……龍」

「……榊君……！」

「……すまん」

明久と三人娘が龍星に視線を向けると龍星は再び頭を下げた。

「あの、そろそろ開始してもらえますか？」

「あ、すいません。おい雄二……ドルアツ！」

龍星が雄二に拳を叩き込む。

教師がいるので、ハリセンが使用出来ません。没収されるからね。

「婿入りは嫌だ……。霧島雄二なんて御免ぶるあああっ! はっ！」

「……若干不安もあります、兎に角始めて下さい」

そう告げると、木内教諭は明久達から若干距離を取った。

「律子、京香！」

「真由美、京香！」

「律子、真由美！」

「行くわよ！」

Bクラス三人娘は名前を呼び合って頷き、明久達を囲むように移動してきた。

「へえ。結構息が合ってるね」

「そのようだな。オンナノコの仲良しごっくばあっ！」

再び、雄二に拳が叩き込まれる。

「雄二、失礼な事言っちゃ駄目だよ。女の子は護るべき潜在なんだから」

明久がにこやかに言う。

「お前等、いい加減にしろや！幾ら俺でも数学で3対1はキツイ！」
龍星が怒鳴る。

「つと、御免！」

「くそっ！この一発は後で返すからな！」

雄二と明久もそれぞれの相手に向かう。

……結果から言えば、明久達の勝利だった。

仮にも明久達は前回の試召戦争で負けはしたものの、Aクラスの猛者達と互角に戦ったのだ。

更に、龍星は操作に慣れ、明久は瑞希に勉強を教えて貰い、雄二もまた本気で勉強をしている為、戦力的にも点数差は有るものの互角以上に戦えたのだ。

「勝者、坂本、吉井、榊チーム！」

木内教諭の声がステージに響き渡る。

「よし、じゃあさっきの続きだ！馬鹿久！」

「上等だ！駄雄二！」

争いながらステージから降りる馬鹿二人。

「なんつーか、その、すまん」

龍星は落ち込むBクラス三人娘に頭を下げて、ステージから降りていった。

「さて、カミナの衣装に着替えるか」

そう言っつて、龍星は更衣室へと向かうのだった。

第22問（後書き）

あ、常夏の出番忘れてた……ま、いつか。常夏だし。

？」「おいおいっ！」「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5232w/>

バカとテストと年上の同級生

2011年10月28日13時09分発行